

なくなる……たゞ、若い雀だけが屋根瓦の下で愁ひげにちゆく啼いてゐる。……半ば以上消えた明りのなかは、たゞ夫れ静にして寂……アルマに飛んでゐる昆虫は、もう見つからぬ。ただの一匹だつて、蜜蜂も迷迭香の上を漁つてゐはしない。全く生氣が無くなつちやつた……。

「……たゞ、或るさうむし、あゝさうむし、（彼れはこれを籠の中で觀察してゐるのだ。）だけは少しも驚かないで、依然として一歩々々その戀の道草を摘んでゐる——さも／＼自然には變つた事もないかのやうに……、鶯とほゝじろとは怯氣づいて黙る。蜜蜂は巢の中へ隠れ込む。だが、さうむしと來ては、太陽が消えようとしても、何んとも感じないのか……」（原稿。此の觀察は公けにせられたことはない。それは一九〇〇年五月二十八日の日蝕である。）

彼れはまた、嵐の莊嚴な恐ろしさに浸ることに無限の愉快を感じるのであつた。彼れはそれを自然の提供し得る最も素晴らしい光景の一つであると考へてゐた。そして彼れは、單に窓硝子を通して眺めるだけでは満足しなかつた。夜、彼れはよく凡ゆる窓を開け放ち、兩舷を窓框に突いて、大氣の燐光、雲の亂舞、雷電の閃き、及び淨化の壯大な現象が現はれる一切の壯麗さを眺めるので

あつた。それから彼れは、アルマの奥まで駆けつけて、電化せられた地球の凡ゆる發散物や、酔ふやうな香氣を精一杯に呼吸するのであつた。

然しながら、レオミュウルや、ユベエルや、デユフウルやのやうな、彼れの先輩がしたやうな純然たる觀察は、多くの場合十分ではない。若しくは「單に事物の一面を見るに過ぎぬ。」

- 註一 Réaumur 1683—1757 フランスの理學者にして博物學者。
- 註二 François Hubert 1750—1831 スイスの博物學者。
- 註三 Léon Dufour 1780—1865 フランスの博物學者。

そこで、實驗と云はれる人爲的觀察に頼らなければならぬ。そしてファブルこそは、動物の心理研究に、此の實驗法を採り入れた最初の人であると云つてもよい。先輩等のやうに自然科学の純思维的な領域に止まつてゐるかはりに、彼れは小さい蟲けらどもの呈する現象を、直接に理解しようと努めた。此の點で彼れは、常に崇拜して措かなかつたクラウド・ベルナルの例に倣つたものである。そして彼れは昆蟲學、云ひ換へれば昆蟲の自然史に對して、ベルナルが彼れ以前には單に

記述的だつた醫學を、眞の實驗科學としたのと同じことをやつたのである。

こんな譯で、觀察場に近く、母屋に續いてこの自然科學者のアトリエが建てられてある。百里香やラヴァンドの間を自由自在に放浪してゐる昆蟲の、自然な動作や様子から暗示せられる演繹が、其處で實驗の試金石にかけられるのだ。

それはかけ離れて森閑とした一つの大きな部屋で、南面して庭に向つた二つの窓から明かるく照らされてゐる。そして尠くも一つの窓は、昆蟲どもを自由に出入せしめるために、何時でも明け放たれてゐる。

縦で造つた硝子張りの標本棚が、白堊をかけられた壁を殆んど一杯に占めてゐる。その中には南フランスの全昆蟲や、地中海の實に奇異なあらゆる巻き方の貝類や、すべて辛棒強く蓄められた標本が丁寧に並べられてゐる。また、古銭や、土器の破片や、尙ほ他の有史以前時代の研究資料等、色々な珍品の豊富な寶も陳列されてゐる。さうした研究資料はあつちこつち、セリニヤン近傍の岡の上に數多い骨塚に幾らも見附かるのであつた。

遙か上、硝子張りの標本棚の正面には、大きな帶飾りでもせられたかのやうに、途方もなく大き

い乾腊植物標本がぎつしりと詰められてゐる。その最初の標本はファブルの幼年時代にまで溯るもので、北部のものも、南部のものも、平野のものも、山のものも、更に、凡ゆる海水及び淡水に生ずる藻に至るまで、有りとあらゆる植物が含まれてゐる。

それは實際、之等の標本が莫大な勞苦を語るものではあるが、ファブルは心底に於て、あまりこれに執著しては居らぬ。それは彼れにとつて、知り、組織を立て、そして智識を整理する手段だつた。けれどもそれは、空な好奇心や、子供らしい誇りやを充たすためではなかつた。實際、何よりも先きに、一つ／＼の草木に特有な色や形を判然と見、眼底へしつかりと刻みつけ、そして後に、何處かで吟味してみようと思ふものに出會はす時、ちらりと見ただけでも、確かにそれと認知が出来るやうでなければならぬ。

此の點に關して、例へばレオミュウルの科學などは、如何にもおぼつかなく不完全である。多くの場合、彼れは自分で習性を描寫してゐるところの種そのものに就いて、讀者へ確然と語つてはゐないのだ。ファブル自身も、分類の越權を痛烈に攻撃する餘り、屢々さうした過失に陥いつてゐる。それにしても彼れは、生物の組織的な研究を怠つてはゐない。彼れの『ゾオウクリユウズの植物』

や、よくも彼れが編纂したアヴィニオン近傍の鞘翅類の、あゝした奇妙なカタログなどが其證據で
ゐる。即ち、「名前が分らなければ、物も分らない」——*Nomina si nescis, perit et cognitio rerum*
——そして彼れは誰よりも、この偉大なリンネの意味深長な金言を理解してゐたのだ。

註一 *Insectes coléoptères observés aux environs d'Avignon*——一八七〇年アヴィニオンにて出版。此の
カタログは、今日極めて稀になつてゐる。

それにしても、彼れは生涯かなり平凡な分類家であつた。何よりも先きに、彼れの懐しむトウツ
スネルでも云ひさうな、性的昆蟲學——換言すれば、生命や、本能や、それらの神祕などに心を奪
はれて、彼れは純記述的な昆蟲學には、殆んど興味を持たなかつた。「私は系統昆蟲學にかけては
カラ駄目だ」——かう、彼れ自身がレオン・デュフウルへ書いてゐる。そして、彼れが始めてあの
素敵なつちすがり、(*Cercaris tuberculé*)に出會した時などは、最初、これを認知することが出来な
かつた。彼れはそれを何んか新種であるだらうと考へて、デュフウルに見て貰ふ。彼れは「ヴァント
ウ山の麓であさつてゐる膜翅類の中で、最も美しいものに昆蟲學の老大家の名前をつけたい希望か

ら、「これをデュフウルへ捧げなければならぬと思ふたのだ。

もつと経つてから、彼れがその珍品を判定する上に助力を請ふたのは、ボルドオの偉大なる昆蟲
學者ペレエ (*Pérez*) である。それに彼れ自身は、嚴密な意味で昆蟲學者ではないと頻りに云つてゐ
た。で、時によつては、此の語が酷く彼れの癢に障るやうに見えた。之れに反して、彼れは好んで
博物學者、乃至は生物學者と稱してゐた。それは定義の上から、生物學は凡ゆる方面から全體とし
て考察された生物の研究であるからだ。そして、生命には何んにも孤立したものはなく、一切が連
絡を保ち、且つ、一つ／＼が觀察者の眼には無數の局面を以つて現はれるのだから、同時に哲學者
たらずして眞の博物學者たることは出来なからう。

こんな譯で、昆蟲へ針を刺し、現を抜かしてこれを箱のなかへ並べたりすることは、彼れに
とつては研究の最も附屬的な、殆んど無意味なことに過ぎなかつたのだ。

私が始めて彼れを訪問した時は、多くの人々のやうに、あゝした大科學者の住居には極めて不思
議なものがあるだらうと思ふてゐた。で、少くも私の好奇心を満足せしめることなしに、此のまゝ

私を歸らせないやうに切願した所のは、あんなにも永い生涯を通じて辛棒強く蓄めてあるに相違ない標本だつた。彼れはかう答へた。

「わしの標本！ わしには標本なんでもないよ。いや、尠くもわしのところにあるものは、大してお目にかかる値うちの無いものなんさ。だが、ご案内しよう、強つてと仰るから。さあ、わしの紙屑へ。ひよつとしたら、あなたのお氣に入らないこともあるまい。」

そして、私は彼れの後へ跟いて、あの「蟲けら実験場」へ這入つて行つた。その眞ん中は胡桃の木の大きな卓子で占められてゐた。それがまた此の時も、矢張りフラスコだの、硝子管だの、サアデインの空罐などを以て一杯に蔽はれてゐた。それは名の無い、若しくは疑はしい百千の胚子の發育を窺ひ見たり、幼蟲の仕事、繭の製作、それから「椶の實から椶の木になる發芽よりも驚くべき發生をした後に、變態の幾多の小さい奇蹟などを見張るためのものだつた。

砂を詰め込んで鐘形の鐵網をかけた井、硝子片をもつて蓋をした植木鉢、若しくはジャムの空罐などが、之等の「小さい生きた機械」の發育や動作を辿つてみるために、蟲籠——實驗の飼育箱となつてゐた。

壕の中では腐爛し切つた動物の屍が、その死の舞臺の上で熱烈な生命劇を觀察者へ見せてゐた。

その時忽然、新しい正確な方法に依つて復活せられ、若々しくせられた全科學が私に啓示せられた。そして偉大なクラウド・ベルナルに對する崇拜に燃えてゐた新信徒らしい感激をもつて、恰度ダンテがヴィルヂイルへ云つたやうに、私も私の案内者へ「貴方は私の創造者であり、私の師であります！」と云ひたい氣になつたのであつた。

それが昆蟲をして語らせたり、彼れに質問を掛けたり、彼れをして秘密を明かさせたり——寔に至難な、寔に微妙な實驗術にかけて、彼れが玄人の牙へた腕を持つた無類の生理學者となつた所以である。何んとなれば、實驗は「本能の本質を、幾らか明らかにすることの出来る唯一の方法」であるからである。

資力が薄弱なところから、彼れは創意に富んだ研究心を以つて道具の貧弱さを補ふた。そして實驗のために、色々金のかゝらない極めて單純な方法を工夫した。彼れは實に「百姓の手細工にかゝる碌でもないもの」をぞんざいに組み合はしても、莊嚴な眞理を巧みに引き出す術を心得てゐた。

實際彼れは彼れの質素な鄙びた實驗室に於て、生物學の大家達が遵奉する調査及び實驗の嚴格な原則を、昆蟲學へ巧みに適用することが出來た。だからこそ、彼れの後に來て同じ研究をしようと思ふ人々も、彼れの探究から刺戟を受けざるを得ず、また、同一の結果を認容せざるを得ない程、それ程彼れは彼れの見事な觀察を、論議の餘地ない様に打ち建てることが出來たのだ。

一現象の詳細を綿密に記るすと——それがたとひ後進の助けとなる爲めに過ぎないとしても、第一に肝要なことである。それにしても困難なのは、その現象を解釋し、その隣接の關係、理由、結果、因縁等を發見することである。

然しながら、偶然小徑のほとりで觀察せられ、他のものの眼にはつきりしない様な寔に小さい事柄も、此の鋭い觀察者には忽ち火のやうに明るいものとなり、幾多の意外な問題を暗示し、そして彼れのなかに、これから實驗によつて確かめなければならぬ突然の明かり——色々な豫想を生ぜしめる。

例へば、ふしだか蜂 (Philanthus) ——仔蟲を養ふために花の上で蜜蜂を捕へる此の細りした胡蜂

が、何故それを子供等へ持つて行く前に、その餌袋を絞つては彼れの大好物らしい、否、彼れの大好物をすつかり吐き出させたりして、「此の瀕死のものに暴行を加へる」のであるか。「餓鬼のやうに、此の人殺しは死人のだから」と出した甘い舌を、その口の中へ入れては出し、出しては入れる。それから、彼れはまた頸や胸を探す。彼れは再びその蜜囊を彼れのお腹の壓搾機へかける。そしてシロツプが出て來ると、彼れはいきなり舐めてはまた舐める。こんな風にして、一滴また一滴と、蜜蜂の餌袋の内容が絞り出される。こんなむこたらしい馳走が蜜の最後の跡がなくなるまで、時には半時間以上も続く。」

これに對する解答は、正しく實驗によつて與へられる。實驗が斯うした「いまはしいロハのご馳走」に、目ざましい説明を與へる。その理由は何んのことではない、母性といふことに過ぎぬ。ふしだか蜂は彼れの「いつものご馳走」であるところの蜜も、寔に奇妙な「顛倒」によつて、彼れの仔蟲等にとつては致命の毒であるといふことを、聞きも教はりもしないで本能的に知つてゐるのだ。

(昆蟲記)

彼れの研究主題は屢々彼れの所謂思想狩り中に、偶然が彼れへ提供して呉れる。夜さへ彼れの頭脳は不斷に思ひ耽つてゐる。そして何んか思想が判然と浮び上る時、若しくは何んか糸口が見つかる時、それをそのまま消滅させては一大事。で、彼れは床を蹴つて起き上り、それを引き止めて標柱を打ちたてる。

それから彼れは骨を折つて少しづつ、だん／＼と或る章の材料を手に入れるのだ。或ひは以前のやうに遠方へ出掛けて崖の前に間断なく立ち續けたり、或ひは低い石へかけて背を踏め、腕を膝へつき、眼は太陽に焼け、そのまま午後一杯を過したりした。そんな時には、彼れは彼れの犬のブル、若しくはその後に老衰仲間のトムと話したりして、永い待つ間を慰むのであつた。

或る物語、例へばひめどろ蜂 (Odysseus nidulator) のそのために、彼れの娘クレエルがオランダユ近傍の、彼女が住まつてゐる田舎から研究資料を送つて呉れた。彼女はその熱誠を彼れに通じて、この蜂の研究の最も熱心な激勵者となつてゐる。(昆蟲記)

時としては、或る種が頑として彼れへ打ち明けないものを、他の種が発いたりする。何んとなれば、習性が屢々族全體に亘つて著しい變化なしに繰り返へされて居り、そして類推が途切れ／＼な

観察を結びつけて、動物の歴史を完成する一つの貴重な方法となつてゐるからだ。こんな譯で、彼れは永い間の摸索をしてから、やつと大きく、やくてふの戀のロンドに關する神祕を明らかにした。それは不可解な象形文字の斑紋をつけた翅をもつて、眞暗な山や谷、森や林を重々しく飛んで行く。彼等は「遠い王女」に逢ふために、どんな神祕に導かれて地平線の涯から駆けつけるのか。雌が止まつたアマンヂエの枝が、吾々には分らないが雄にとつては彼女自身と同じやうに驚くべき魅力を持つてゐる。それ程身に染み込むやうな未知の發散物は一體何んであるか。大きく、やくてふは、どうしても之れを語らない。そして最後に此の祕密を彼れに明かして呉れたのは、白晝に婚禮をし戀をする椋のけむしてふ (Bombix du Chêne) である。それは事實に於て、吾々の嗅覺とは異なる嗅覺でなければ感ずることの出来ない匂ひに依つて、雄が惹きつけられるのだ。そしてファブルはこれを巧みにX光線に比してゐる。實に世界の如何なる博物學者も彼れの如く觀念を惹き起し、彼れの如く假定を呼び起しては居らぬ。此の事實は恐らく科學が早晚認めるであらう。

申し分なき生理學者としてもまた彼れは、先刻私がその名を云つた著名な大家のやうに、「見た

めに實驗」を行つてゐる。彼れは色々工夫を凝らして鐵網の下で、幾多のぞつとするやうな戦闘、恐ろしい決闘を行らせる。彼れは怖るべき毒の作用を色々な種へ試みるために、さそりと凡ゆる昆虫とのはらくするやうな取組合ひを演じさせる。彼れはその毒に對する感受性に、意外にもそれぞれ相異があることを認める。毒蜘蛛 (Tarantula) は殆んど即座に斃れる。然るに大きくちやくてふは咬傷にめけず、毒をもともせず、さうした殘忍な戦闘にも無難である。彼れは同時に仔蟲の不可思議な免疫性を發見する。「靈妙な化學の反應物のやうな此のさそりの毒は、仔蟲の肉と大人の肉とを區別して、前者には何んでもないが、後者には致命的である。」これまた「變態が有機質を變化さして、その極めて根本的な特性をも變へるに到る」ことの、新らしい證據ではないか。(昆蟲記)

これを以つて見れば、彼れの忠實な物語の對照となつてゐる凡ての昆蟲の歴史を、彼れは徹底的に知つてゐたことが分る。彼れは彼等の極めて小さな出來事にも眼を配つてゐる。引きよせられた葉の間にある彼等の身の寄せ場、地中に於ける彼等の部屋、ぼそ／＼する木皮に蔽はれてゐる彼等

の隠れ家——彼れはそれらの凡てを知つてゐる。彼れは彼等の誕生の曆も、代々の年譜や相續も心得てゐる。彼れは彼等の仕事の順序や方法を記し、また彼等の食物や獻立を調査してゐる。彼れは彼等をして選擇せしめる動機をも發見してゐる。例へば、何故つちすがりが取れば取ることの出來る無数の犠牲のうちで、たゞ吉丁蟲、若しくはさうむしだけしか選まないか、といふ如きである。彼れはまた、彼等の戦術や、闘争の仕方を知つてゐる。

彼れの鋭い眼光は、極めて隠されてゐる住居の奥までも透視することが出來た。くだ蜂 (Halictus) が「その獨房へワニスをかけて、卵を宿すべき丸いパンを作る」のは、さうした奥である。そして繭を被つたまゝ、この人殺しの蛆蟲は熟睡してゐる若蟲 (Nympha) を食つてゆくのも其處である。彼れは色々な手練手管を用ひて、地中の深みに於けるミノタウル (Minotaurus 金龜子の一種) の驚くべき秘密をも不意打ちすることが出來た。

彼れは物語、珍談、それから辻褄の合はない、見方の誤つた、そして誤解せられて來た習性の所謂特徴など、書物製造人等が手から手へと渡し合つてゐる「お決まり文句」を、凡て篩にかけた。

さうした繰り言の代りに、彼れは法則、不變の事實、一定の規約などを發見するのである。無類無双の熟練さを以つて、彼れはレオミュウルの古い實驗を自らやつてみて、それを一々訂正してゐる。また、彼れはエラスム・ダアキン(Erasme Darwin 1731—1802、英の詩人で博物學者。チャーレス・ダアキンの祖父)の誤謬を證據立て、更に進んで、彼れが如何なる理由によつて誤謬に陥いつたかを示してゐる。(昆蟲記)

彼れは古い信仰の意味を解かうと努めてゐる。彼れは俗間の傳説に精通してゐるミストラルへ、プロヴァンス地方に擴まつてゐる或る不可思議な云ひ傳へのことを訊ねてやつた。實際、如何に不正確な、若しくは虚偽な事柄にも、屢々幾分の事實が含まれてゐるではないか。彼れはラ・フォンテヌ(La Fontaine 1621—1695、Fablesの著者)を批評し、またホルス・アポロ(Horus Apollo、ヘラトスの作家)の物語を疑ふ。彼れはプリイヌ(Plinie 古代ローマの博物學者)のコスス(Cossus)——これは此の生々した科學——昆蟲學をつくつた。それはレオミュウルに依つて、最初の生命を吹き込まれたのであつた。そこで、彼れの人物の一つ一つが、何んと云ふ人相の正確さ、及び性格や習慣

の絶對的眞實さを以つて、それ／＼現はされてゐることか——野や林に住まうもの、芝草の間を駆けずり廻るもの、地の中へ深く穿ち込むもの、針を持ったもの、翅鞘の鎧をつけたもの、吾々に何んかしら云ふべき秘密、若しくは教ふべきものを持った凡てのもの。寓話のそれとは甚だ異つた蟬。また、從來極めて幻想的な傳説の後光を帯びて來たもの、即ちあの素敵滅法な墓の神聖な金龜子。此の金龜子の驚くべき習性に関する研究は、年代順から云へば、彼れの經歷の比較的後の時期に屬するものであるが、フアブルはそれを面白い口繪かなんかのやうに、彼れの敘事詩の眞先きへ入れてゐる。

註一 フアブルからミストラルへ送つた手紙。日附なし。

「博物學に關して知りたいことがありますので、どうか、御好意に縫らして下さい。あなたは、壯麗な詞の世界の大家であります。けれども、あなたは俗間の傳説に關する智識にかけても大家であります。私が御相談申したいのは、此の後者であります。それは斯うであります——私は今昆蟲記の第五卷を準備中です。昆蟲記と云ふのは、私が辛抱強く觀察したり、實驗にかけたりして來た小さい蟲けらで、むごたらしいダアキン説の空虚さを明らかにする私の著作であります。さう云ふ所から、プロヴァンス地方の昆蟲學は、もう哲學者や博物學者などの間に、幾らか評判となつてゐます。だが、そんな事は何うでもよい。そんな事は詩人の構つたことでは有りません。」

「今準備中の巻にはお祈り蟻螂、俗にプレゴ・デュ (Prégo-Dieu) と云ふのに關して一章入る筈になつて居ります。實に奇妙な此奴の集のことは、定めしあなたも御存知でせう。セリニヤンなどでは、それはティニヨ (Tigno) と呼ばれて居ります。ところで此のティニヨは、此處らで非常に積まつてゐる信仰によりますと、寔に素晴らしい御利益があるとされてゐるのです。これをポケットへ突込んで置きさへすれば、齒痛を病むことがない。娘共でも、お主婦さん達でも、百姓等さへが、乾度そのポケットの底へ此の齒痛除けを縫ひつけてゐます。近所隣りの者の間で、これを借りたり貸したりも致します。恰度その季節には、これが恭々しく新しいのに代へられもします。それだけでは有りません。ティニヨは、霜焼けをなほすに持つてこいだと云ふことです。此處らでは此の霜焼けのことを、矢張りティニヨと云つて居ります。多分此の蟻螂の集は、その效能があるとされる此の病氣の名前をとつたものでありませう。

「私は古い書物を探つて見ましたが、全く奇妙な、かうした信仰の起原が未だに分りません。それが果して私の村に特殊なのでせうか。それとも他處にもあるのでせうか。あなたは御地でも同様の云ひ傳へをお聞きになつたことがありますか。ティニヨはプロヴァンスの他の地方でも有名でありませうか。さうだとすれば、それにどんな御利益が有るものとされてゐるでせうか。

「親愛な大家、私があなたのプロヴァンス地方に於ける傳説に就いての博識にお尋ねしたい質問と云ふのは、即ちそれでありませう。アレゴ・デュの集に關して、どんなことでも御知らせ下さることが出来ませうならば、寔に幸ひに存じます。そして、若し御許し下さるならば、私は博物學者としての私の著書に、

それを利用さしていただきたいと思ひます。

「詩人に對する深い讃仰の心を以つて——敬白。」

しかも彼れが開陳する推測は、何んと云ふ控へ目であることか。彼れの執拗な忍耐が「不可知の寄つてもつけない壁」に衝突する時、何んと云ふ臆病であることか——そんな時には天晴れな率直さを以つて、彼れは平氣に、忠實に、たゞ「私には分らない」と告白するのだ。それから見れば、他の多くの無批判的精神の人達は、寔に斷片的な幻影に満足し、事實を先き走りして、無限にイリユージョンと誤謬とを懐いてゐるに過ぎぬ。

實際、最も博學な、最も教養のある人達の間にさへも、觀察に對する實際の傾向を持つてゐる人は、實に寥々たるには驚かされる。また、吾々の智識の相異や弱點は、實に多數であつてみれば、之れを題材に一冊の本が出来らうであらう。若しもそれらを嚴密に比較研究するならば、自然や宇宙によつて提出せられてゐる謎で、吾々の以つて既に解決せられてゐるとなす所のものも、如何に赤裸々に現はれて來ることであらうか！

例へば、あんなにも吾々が聞かされて来た時鳥の傳説が打破せられ、その歴史が明らかにせられ、
として正確なものとしてせられるために、どれだけの時間を要したことか。

註一 ラスパイユ (Xavier Raspail) が一九〇五年のフランス動物學會會報で發表した研究——*La légende
de Jenner sur l'isolement du jeune Coucou dans le nid.*

また、フアブルがトゥスネルを譏嘆した理由の一は、此の作家が動物世界を蔽ふ幾多の憶説を破
壊して、それをありのままに説明しようとした努力ではないか。就中、ペリカンのあの詩的な、麗
はしい物語を見よ。此の鳥はその餓ゑたる子供らへ「夕べの霧の中で、自分の臟腑を分ち、最後に
は、彼等へそのハートまでもやる」と云ふではないか。然しながら、かうした傳説の唯一の源泉は、
事實が誤つて觀察せられたことにある。事實、此の鳥は漁の獲物をその巨大な餌袋へ呑み込んで置
きて、そして彼れの赤兒共へ分けてやるのが習慣なのだ。

註一 トゥスネルの *Le monde des oiseaux. Le Pelican.*

かうした事實を以つて科學は打ち建てられる。何んとなれば、理論は凡て崩壊するではないか。

そして、たゞ確かに觀察せられた事實のみがびくともせずに残るではないか。偉大なる職人によつ
て截られるさうした岩をもつて、未來は建設せられ、恐らくは何時か、吾々自身の科學も築造せら
れるであらう。

これ故に彼れの著作は、觀察に身を委ねようとする者にとつて、學校であり、心的訓練の手引で
あり、凡ゆる博物學者用の眞の「方法論」なのだ。それはまた、嘗て日を見たものの中で最も興
味のある、最も教訓的な、最も生々とした、最も親しみのある教科書なのだ。

その代り、これらの至難な研究のために、どれだけ苦痛を舐めねばならなかつたことか！ また、
一粒の金を掘り出すために——あんなにも朗らかに澄んだ美しい物語のやうな、寔に魅力のある敘
述の一つ／＼に層となるやうな、決定的な材料、確實な研究資料を摘んでは蒐めるために、どれだ
けの忍耐をフアブルは爲なければならなかつたことか！ 吾々は唆かされる、魅せられる、恍惚と
させられる。其處には摸索も失敗も現はれては居らぬ。それにしても、凡て如何なる勞苦と、如何
なる忍耐とを要したことか！ 期待や、躊躇や、調査の絶望的な緩慢なども、其處にはよもやと思

はれる。が、例へば、すゝめ蜂とは、ねひげ蠅との間に存在する不思議な關係を明らかにするために、何んと云ふ經驗が長い間に互つて繰り返へされ、繼續せられたことか！ 彼れが觀察する所のもの、彼れが見る所のものを、すべてその日々に記してゐる記録は、その間の消息を語つて餘りある。女郎蜘蛛の獵の網の構造、及び製作法を解くために、幾年もくの間、リラの小路へ幾度び立ち止つたことか。さうした物語のうちでも、つちはんめうの過變態のその如きは、精勵倦まざる探究の四半世紀有餘の後に、はじめて完成せられた。くだ蜂の物語はオランダに於て始められ、殆んど三十年後にセリニヤンで完成せられた。また、スカラベ・サクレのそれを完成するために、四十年かゝつてゐる。蓋し同時に見ることの出来るのは、一部分に過ぎぬ。既に見た僅かのものによつて、未だ見ない多くのものを洞察することは、殆んど常に不可能である。そして多くの場合、その空隙を埋づめるために、根氣よく繰り返へし、同じ點へ歸つて見なければならぬ。

ファブルが研究した昆蟲の大部分は、孤獨な生活をしてゐて、際限のない擴がりに撒き散らされてゐる所から、一つくりにしか遭ふことは出来ぬ。或るものなどは一定の場所にしか住んで居らず、他所では見つからない。例へばあの素敵なつちすがり、若しくは黄翅のあな蜂の如きは即ちそれで、

カルバントラスの田舎を除いては、その痕跡を見出すことは出来ぬ。

時期を窺ひ、「仕合せな偶然」を利用し、谿底で間斷なく見張りをし、幾時間もくの間、燃ゆる太陽の下にぢつと緊張してゐなければならぬ。また屢々時期が去つて、待ち設けてゐた機會が消えて了ふ。或ひは辿つて來た緒が誤つてゐると分る。が、もう季節が去つて何うにもならず、止むなく翌春のやつて來るのを待たなければならぬ。觀察者の仕事たるや、随分多くの場合、轍の食ひ込んだ石だらけの道を、骨を折つて小さい球を押し上げて行くところの、あのシジプス (Sisyphus 金龜子の一種) のへとくになる仕事に似通つてゐる。絶えず馬がよるめく。荷がこぼれる。ひつくり返へる。そして凡てがやり直ほし。

ファブルの名聲のはじめを記したあの不死の研究を、ゆつくりと考察して見るために、今吾々は振り返つてみてもよからう。此の發見は、彼れが隱遁したればこそ非常な効果を以つて、あんなにも普遍化し、あんなにも擴大することが出来たのだ。

第一に、デュフウルが、つちすがりの脊で行つた觀察が、彼れの手にかゝつてどんなふうに変つた

が、また、それが何んな風に擴張せられたか、それを見てみよう。

フアブルに依つて徹底的に説明を與へられてから、これらの異様な事實は有名になつてゐる。それはさすがに驚異に富んだ此の科學——昆蟲學の中でも大なる不思議の一つである。

此の胡蜂は自分では花の甘露だけを吸つてゐる。然るにその顔を見ることも出来ない彼れの仔蟲には、尙ほ生命の顛へてゐる汁氣の多い生肉がなければならぬ。

胡蜂は地中へ窖を掘つてその卵を埋める。そして食料としては蟋蟀、蜘蛛、毛蟲、若しくは甲蟲などの生餌を仕入れて置いて、最後に彼れはその入口を閉ぢ、そして再び這入つて行くやうなことはない。

凡ての昆蟲のやうに、若い胡蜂は孵つて幼蟲状態をとる。そして孵化の瞬間から發育の終りに到るまで、即ち幾日もくの間獨房へ閉ぢ籠つてゐる蛆蟲は、もう何ものをも外から期待することは出来ぬ。

そこに魅力ある謎がある。——母によつて仕入れられる犠牲は死んでゐる。そして、それはさつさと干からびるか、腐つて了ふであらう。若しくはこの犠牲が、幼蟲に必要な様になつて、生きてゐ

よう。だが、さうなると「窖の狭い室の中で、無にも等しいものに殺されるこの繊弱い生き物が、幾週間もの間、拍車をつけた長い脚を動かす強壯な甲蟲等の間に在つて、若しくはまた蛇々と身體を伸したり巻いたりしながら、えらい大顎を振り翳す巨大な毛蟲と對座して、一體全體どんなことになるであらうか。」

かうした興味のある神祕に對する鍵を、フアブルは巧みに見出した。

思ひもよらない術策を以つて、その生餌は動けなくされたのだ。事實、胡蜂はその針を突き刺した。が、身體の何處でも構はずと云ふ譯ではない。そんなことをしようものなら、殺して了ふであらう。否、眼には見えないが、運動神經のある一定の點へ、それが正確に刺し込まれるのだ。

さうした鋭い傷を蒙ると、生餌は直ちに全身不隨となる。彼れの手足は「恰かも發條が毀れたかのやうに、」關節が外れて了つたかのやうである。眞個の死骸だつて、こんなにちつとしては居らぬ。

とは云ふものの、その傷は致命傷ではない。犠牲が依然として生き續けるのみでなく、彼れはおまけに癡痺から來るところの、云はば自活的不動状態のお蔭で、不思議にも頗る永い間、何等の食

物をも擯ることなしに生きて行けるのだ。

こんな譯で、その時期になると、此の食道樂の仔蟲の口元には、ちやんと馳走が備はつてゐる。そして、彼れは洗煉された、慎重極まりなき本能を以つて、此の抵抗力のない生餌に食ひかゝる。彼れは「得も云はれない微妙な術を以つて、先づ手近な所から段々と食ひ込んで行く。そして誤ることのない方法を以つて、犠牲の内臓の比較的不要でない所を先きに平らげ、最後になつて、はじめて、生命に缺くべからざる部分を平げる。こんな風にして、犠牲は殆んど二週間の間、一片々々と生きながらに食はれて、次第に空虚になり、薄くなり、最後にべちやんこになつて了ふ。その光景たるや、實に不可解なものである。」而かも、最後に到るまで、犠牲の新鮮味、その水々しさは保たれるのだ。

それは事實に於て、「最初の咬み傷があまりひどく感ぜられないやうに、母が針を刺して無感覺にした局部の、何時も同じ點へ」卵が産みつけられるのだ。然しながら、仔蟲が絶えず先きへ〜と食ひ込むにつれ、「蟋蟀は急所を咬まれて、大顎の缺を虚空に閉閉したり、若しくは觸角をばた〜とさして、何うにか抵抗しようとすることもある。」「だがそれは無駄な骨折りだ!」「食ひしん坊の

仔蟲はもう急所を衝いてゐる。そして酷い目に遭ふ心配もなく、内臓を掘つて行けるのだ。」若しも意識の光りがなほ纖弱い脳髓のなかに閃めき得るものとすれば、麻痺せられた犠牲にとつて、それは何んと云ふ怖ろしい、何んと云ふ永い苦悶であらう! 隠所を蔽ふて陽に輝いてゐた百里香の茂みから遠く、突然あな蜂 (Spilix) の容へ落つこちた野の小さい蟋蟀にとつて、それは「何んといふ怖ろしい悪夢」であらう!

とは云へ、これを餘り強く云ふことは慎まなければならぬ! 苦痛には人間種族にあつてさへも、無数のニュアンスがあるではないか。そして動物種族にあつては、神経の反應は體形の等級と、構造の複雑さや繊細さやと逆比例をなしてゐる。その迅速なものもあれば、緩慢なものもある。鋭敏なものもあれば、遲鈍なものもある。さうかと思ふと、殆んど無感覺なものもある。そしてその段階の下から上に到るまで、苦難の娑婆に於ける感性には無限の度合ひがある! (昆蟲記)

殺さずに動けなくする。「仔蟲へ、動けないが生きてゐる餌食を與へる」——これが到達しなけ

ればならない目的である。たゞ種によつて、また生餌の構造によつて、その方法は相異なる。されば甲蟲を攻撃するつちすがり、及びはなむぐりの幼蟲を獲物にするあかすち蜂などは、生餌を唯一回、而かも唯一點を突刺すだけである。と云ふのは、其處にのみ、運動神経が大部分集中してゐるからだ。怖るべき毒蜘蛛(Tarantula)を好んで犠牲とする鼈甲蜂は、彼奴が一方、肢の運動を掌る二つの神経中樞と、他方、恐ろしい鉤とを持つてゐることを知つてゐる。そこで此の場合、二撃の針が加へられる。あな蜂はその針を蟋蟀の胸倉へ三回突き立てる。彼れも亦、吾々には分らない直覺によつて、蟋蟀の運動神経が、かなり隔たつた神経中樞に支配せられてゐることを知つてゐるのだ。尙ほまた、「本能の論理の最高發現であつて、吾々も途方に暮れさせられるやうな技術の持主」たるじが蜂は、その毛蟲へ針の九撃を加へる。何んとなれば、彼れがその仔蟲を養ふ毛蟲の身體は、それからそれと接続して一つ／＼獨立した、小さい神経中樞を持つた環の連りであるからだ。

そればかりではない。あな蜂の天稟が、まだ／＼豫見に盡きては居らぬ。

頭蓋を碎いた結果、脳髓が激しい出血若しくは骨の破片によつて壓しつけられでもすると、負傷

者はよく昏睡状態に陥るではないか。生理學者が、例へば實驗中の動物を完全に不動ならしめようとする時にさうした自然の指示に従つてゐる。然しながら、海綿を以て脳髓に或る程度の壓搾を加へるために、動物の頭蓋へ圓鋸術を施さうと考へた最初の人が、さうした行り方が昆蟲世界に於ては既に夙くから使用せられてゐることに、果して想ひ到らなかつたらうか。さうした荒々しい方法は「無意識者」の驚くべき妙技に較べると、全く兒戯に等しいものであることに氣がつかかなかつたらうか。

實際、胸部の神経球を刺すことが、たとひ効果があるにしても、屢々十分ではないのだ。よしんば六本の肢が全部麻痺されるにしても——よしんば生餌が絶対に動くことが出来なくなるにしても、「缺のやうに敵を挟む鋭いぎざ／＼のある彼れの大顎は、依然彼れの暴君にとつて一の威嚇である。尠くもまはりの草か何んかに獅噛みついたりして、彼れは運搬に多少手應へのある抵抗となるかもしれない。」こゝに於てか、前の戰術以外、尙ほもぐ／＼と嚼む。と云ふのは、蜂が勿論傷をつけないで、單に氣絶、麻酔、一時的な昏睡状態を惹き起すやうに、その犠牲の脳髓を一生懸命壓しつける」のだ。これを見た非凡な觀察者たるフアブルは、さすがに「何んと云ふ恐ろしい科學だ！」

と結んでゐる！

ファブルの最初のテーマとなつたデュフウルの乾燥無味な檢證と、かうした宏大な心理詩の未曾有の豊富さとの間には、何んと云ふ隔たりのあることか！

あの貧弱な物質から、あの不恰好な素描から、今や吾々は何んと遠ざかつてゐることか！ ラン
ド (Lander) の奥の郷土に引き籠つた、これまた偉大な隱者のデュフウルは、特に記述解剖學者であつた。そして彼れはつちすがりの巢の内容を列舉したに過ぎなかつた。彼れにとつては、吉丁蟲は死んでゐるのであつた。そして生々と保存せられてゐるその状態は、單に胡蜂の毒の特殊な作用に依つて防腐せられたといふのであつた。で、さうした事實もあまり重大なものではないことになつて來た。ところがファブルは、此の犠牲へ色々な刺戟を與へて手足に痙攣を起させたり、何時までもそれを人爲的に生かして置いてみたりして、それが運動以外の凡ゆる生命の特性を持つてゐることを證據立てた。他方、巨大なつちすがりや堂々たるあかすぢ蜂などは、そのでつかいことや怖ろしい外觀などによつて、見るめのをぞつとさせずにはゐないのであるが、彼れはさうした胡蜂の

毒も、さほど有害ではないことを實證してゐる。さうしてみると、生餌の保存は或る隱密な特質、毒液の多少效力あらたかな、若しくは防腐的な働らきに依るものではなくて、それは單に針撃の正確さと、「外科醫」の奇蹟的な巧妙さとに依るものである。

そして彼れは、昆蟲の顎が如何に巧みに根本生命の神経系統と、莖葉生命のそれとを即座に區別することが出來、交感神経球を含んでゐる腹部を害なふことを慎しんで、前者を助け、胸部の腹面に沿うて多少集中してゐる後者をば絶滅するかを見せてゐる。

彼れはかうした素晴らしい實證を完成するために、嘗に「殺人の術策——あのはら／＼させる隱秘のドラマ」を眼のあたりに惹起させた許りではなく、また實驗に依つて、凡ゆる驚くべき現象を繰り返へさせました。そして光明と論理と、巧妙さと明敏さとを以つて、その機制と變化との悉くを述べた。それが嘗つて科學に知られたものの中で最も見事な此の觀察を、實に生理學の不死の發見の間に伍せしめてゐる。パストウルやクラウド・ベルナルサへも、それ／＼の有名な實驗に於て、より多くの創意、より多くの眞の天才を見せては居らぬ。

八

本能の不思議

靈は到る所へ通ふ

昆蟲をあんなにも不思議な結果へ導く本能とは、一體どんなものか。それは知能の或る程度、若しくは全然異なる活動力の一形式に過ぎないか。

他方、動物の動作を研究することによつて、吾々自身の本性をも突き止められる様な、ある活動の源泉を発見することが出来ようか。

例へば、あな蜂、この「誤ることのない」痲酔術師に、吾々は記憶力のみならず、また觀念を結ぶ力、判断する力、あんなにも愕くべき程整然たる動作に互つて、推理して行く力をも認容すべきであるか。

さうすることは、何んといふイリュージョンであらう！ 實驗者が手練手管を用ひて尋ねて見ると、

此の優れた解剖學者は何んでもないことに躓き、極めて些細な新奇にも途方に暮れるではないか。平生の習慣から一步外に出ると、何んと云ふ愚、「何んと云ふ闇に、彼れは取り巻かれることであるか！」

彼れは隅みつこへ引込む。彼れは分らうともしない。「彼れは先づ肢を口へ通す。それから眼を拭ふ。彼れはものを思ふやうな、沈黙考でもするやうな風をする。」何を思ひ廻らすのだらう。日常生活の唯だ中に突然起つた異常な混亂が、どんな思想の形、どんな蟹氣樓の形をとつて、彼れの複眼を通して映るのか。(昆蟲記)

かうした困難な問題を、如何にして解くべきか。吾々は直観によつてはじめて吾々自身を知ることが出来る。吾々が他人の頭蓋の下に起つてゐる所のものを推測するのは、吾々の自我に對する觀念によるにすぎぬ。今、昆蟲と吾々との間には、何んといふ外觀の相異があることか！吾々の構造と彼等の構造との類似は、何んと微かに、遠いことであるか！吾々は彼等の意識状態や動作の眞動機に就いて、空しく假定を案出することが出来るだけである。

されば、昆蟲が手術や仕事の上に發揮してゐるあの未知な、あの神秘的精力を、單にそれだけとして考察しなければならぬ。そして吾々はそれを、吾々が吾々の中に認むるやうな知能と比較することを以つて満足せねばならぬ。

両者が如何なる點に於て相異してゐるか。これを明確にするならば、兩者の類似點を徒らに探求するよりも、吾々は恐らく一層得る所が有るであらう。事實、昆蟲とその素晴らしい本能とを通して、無限の地平線——知能の領域よりも一層深い、一層廣い、一層多産な領域が現はれて来る。そしてフアブルが「凡ゆる本のうちでも最も不明瞭な本、吾々自身に關する本」を解くことに、幾らか吾々の手傳ひとなつて呉れるのは、それは正に或る哲人が云つたやうに「人間は智的になりながら、依然として本能的である」からだ。(Bergson — *l'Evolution créatrice*)

フアブルの著作は、この見地からすると、觀察と實驗との見積ることの出来ない寶である。それはまた、嘗てかうした魅力のある問題の研究へ齎らされた貢獻のうちで、最も豊富なものである。「知能の本質は省察し、意識するに在る。換言すれば、それは結果を原因に結びつけ、何故と何故

ならばとの連絡をとり、偶然な事や新奇な事情に對するに新たな行爲を以つてし、動作の連りに於て、或ひは繰り返へし、或ひは逆行することに在る。」

動物心理學の開祖は以上の如く定義せられた人間の智能と、進化論者の云ふ所に據れば、結局衝動的無意識、云はば先天的となる程、それ程遠い習慣によつて立派に調整せられてゐると云ふ、あの神経の傾向とを對照したのであつた。吾々が呼んで以つて本能となし、遺傳によつて心臓や肺のリズムと同じやうに、一種の恒久不變な自動性に凝結せられたと云はれるもの、極めて異常な發現をさへも司どつてゐる盲目的な機制を、彼れは讚歎せざるを得ない豊富な證據と、確實な論法とを以つて明らかにしたのであつた。(昆蟲記)

さうした豊富な材料のうちでも、最も暗示的な實例の中から、極めて示唆的な、そして典型的でもある彼れの實證の或るものを摘出してみよう。

彼れは定義することの出来ない本能を定義することも、また洞察することの出来ないその本質を突き止めることもしては居らぬ。然しながら、自然の秩序を確めることは、たとひ碎けない骨を碎かうとして無駄骨を折つたり、解けない謎の上に蒼ざめて時間を空費したりしなくとも、既に十分

感激に充ちた研究である。

たゞ此の場合、他處の事を持ちこんだり、觀察や實驗の結果を飛び超えたり、事實に吾々自身の推測を置き替へたり、眞實以上のことを云つたり、また不思議を誇張したりするやうなことは一切慎まなければならぬ。

さて此の精密な分析者に聽いてみよう。彼れの四千有餘頁に散らばつてゐる教訓は、本能とその無数の變異とに關して、哲學者の最も該博な研究や、その凡ゆる考察よりもより多く吾々に教へる所がある。

觀察者の心に取つて、本能の生まれるのを見るよりも、更にはらくさせられるものが他にあらうか。

豫め決定せられてゐたやうな、一定の瞬間になると、昆蟲は突如として或る不可抗力に動かされる。ファブルはそれを吾々に示してゐる。

さうした一定の瞬間に於て、彼等是否應なしに一種の神祕な、枉げることの出来ない命令に服従

する。「必要な時に、」彼等は修業することなしに、何づれも同じ動作をなし、盲目的に使命を果すのだ。

そして一度その瞬間が去ると、もう本能は永遠に消えて再び眼醒めることはない。「僅か二三日の遠ひで才能が變つて了ふ。そして若い時に出来た事も、年取つてからは二度と出来ないことがよくある。」(昆蟲記)

子守蜘蛛にあつては、「出廬の瞬間に或る本能がひよつこりと現はれる。二三時間経つと、それが同じ迅速さを以つて永久に消えて了ふ。それは即ち登攀の本能で、大人の蜘蛛には見られないものである。解放された若い蜘蛛は、自らさへが間もなくそれを忘れ、そして生涯を地べたの上に放浪しなければならぬ。それはかうなのだ。小さい子守蜘蛛どもは、母の家を立ち去つて遠い旅に上りたい希望が切なので、後ろへ落下傘となる細い糸を漂はせながら、突然熱心な登攀者となり、飛行家となる。旅が済むと、かうした巧智の跡かたはもうなくなつて了ふ。出し抜けにやつて来た登攀の本能は、やはり出し抜けに消え失せる。」(昆蟲記)

本能の偉大な史料編纂者は、左官蜜蜂 (*Chalcidoma*) の營巢に関する見事な實驗の中で、その色々な局面の分離出来ない連続、自動的な进出、一條の連鎖——全連なりが云はば動作の様式を構成する神経的放射の、その一つ／＼を司どつてゐる宿命的な、必然的な順序を愕くべき程明瞭に見せてゐる。

左官蜂はすつかり出来上つた巢を呈供せられても、矢張り左官の仕事を行つて行く。獨房に仔蟲の要求する一定量の蜜が既に這入つてゐても、彼れは依然として仕入れる。何んとなれば、そのいづれの場合に於ても、建築させる衝動なり、仕入れさせる衝動なりが、未だ消えてはゐないのだ。

然しながら、その反對に、蜜蜂が満たし終つた猪口の内容が、たとひすつかり空にせられても、彼れは再びその仕事を繰り返へしはしない。「仕入れが完了したので、彼れをして收穫せしめてゐた隠密の衝動は、もう働くことは出来ぬ。で、蜜蜂は蜜を蓄めることを止める。そして、そんな出来事にも拘はらず、彼れは空虚な獨房へ卵を産みつけて、そのまゝ未來の赤ちやんを喰べ物なしに置く。」(昆蟲記)

きごし、蜂 (Pallopera) に就いて、フアブルは吾々に極めて有益な、飽くことを知らない心理劇の一つを見せてゐる。

左官蜜蜂は獨房が食糧もなく空虚にせられてゐることが分らないのだが、きごし、蜂はまた、その子供が實驗者の手練手管によつて消滅されてゐることを認めることが出来ぬ。そして「彼れは尙ほも、最早此の世に存在してゐない赤ん坊のために、蜘蛛の倉入れを續けて行く。彼れは恰かも仔蟲の未來がそれに懸つてゐるかの如く、倦まず撓まず無駄な獵をやつて行く。彼れは、もう食物とはならない糧食を蓄へる。それどころではない。彼れは尙ほも錯誤を突き進めて、彼れの巢が取り拂はれてゐるにも拘はらず、それがあつた場所へ粗壁を塗り、想像の住居へ仕上げの鍍をかけ、そして虚無へ封をしたりする。」(昆蟲記)

「昆蟲がその習慣や、お定まりの仕事から一步も出ることの出来ない無力さ」を示すこれらの事實や、尙ほ他の事實から、フアブルは彼等に智能の存在しないことの、否むべからざる證據を引き出してゐる。

帶狀斑のある女郎蜘蛛は、その幾何學的な網の目の中で、偶然に千切られた一本の線さへも繕ふ

ことは出来ぬ。それにしても彼れは、毎晩々々、實に見上げた熟練さを以つて、さながら遊んでゐるかのやうにその網を織るではないか。

大くぢやくてふの毛蟲も、亦同じことを語つてゐる。繭を織ることに専心してゐる彼れは、それへ穴をあけられても修繕することは出来ぬ。そして、「彼れが確かに死ぬと決つてゐるにも拘はらず、否、寧ろ未來の蝶が死ぬと決つてゐるにも拘はらず、彼れは裂け目を縫ひ合さうともせず、平氣の平左で織つて行く。そして餘計なことに精を出しながら、その住居と住者とをひよつこりやつて來る盜人へ明け渡すやうな、此の不實な破れ目をば放つておく。」(昆蟲記)

こんな風に「斯く」の事が濟んだから、それを完成するため、今度は必然的に「斯く」の事が爲されなければならぬ。濟んだ事は濟んだ。再びやられはしない。それは恰度時計の針が逆戻りしないと同一やうなものだ……それはまた水の流れのやうなものである。坂を登つてその源へ還つて行きはしないぢやないか。昆蟲もその動作を繰り返へしはしない。それは必らず、それからそれと相次ぎ、そして相互の間は必然的な順序で宿命的にむすばれてゐる。で、次の動作は否でも應で

も、直ぐその前の動作の補充となる。それは恰度一と連なりの反響が、一つ／＼それからそれと喚び起される様なものだ……胃がその巧妙な化学を知らないと同じやうに、彼れは彼れの驚くべき才能を知らぬ。彼れは壁を塗る。彼れは織る。彼れは狩りをする。彼れは短剣を突き刺す。彼れは癖酔をかけもすれば消化もする。彼れはその武器の毒を分泌もすれば、殻の絹や、蜜窩の蠟をも分泌する。然しながら、彼れは目的と方法とに就いては、常に何んにも知りませぬ。」(昆蟲記)

さうしてみると、本能と知能とは二つの異なつたものである。そしてフアブルにとつては、前者が後者になるやうな過渡はない。

然しながら、全動物界に配布されてゐる、此の多様な活動力が養はれる泉は、何んと限りなく、豊富な、そして深いものであるか！それはまた吾々の奥底に於て、不知不識の間に、いや吾々の素晴らしい智能に反してさへも、儼然たる命令を發して、時にはこれを絶滅するか、若しくは沈黙せしめるのだ。

昆蟲は、その極めて立派な傑作を成就するために、「先輩の御講釋を必要としない」のであるが、

自發的に一躍最高の概念に達する天才の一瞥も、常に純理性の所産ではない。

動物の母性の崇高な論理に較べると、本能の退引ひきかきならぬ命令に智能のぶまな試みを置き替へようなどとする人間の母性の、躊躇、摸索、不確か、仕損ひ、それからこつびどい幻滅などの態ていたらくは如何だ！それは實際平生の道から外れると、動物にとつては凡てが闇である。然しながら、理性がその骨を折つてした演繹を「無意識者」の誤ることなき教智に對立せしめようとする時に、それは何んと弱々しく、覺束なく、不規則で、そして唸ることか！

それにしても吾々が無数の精巧な工業と、靈妙な藝術とを負ふてゐるところのものは、それは相互的に依據して一つ／＼の間が密接に結ばれる、あの行爲の連繫である。そしてフアブルにとつては、それが凡て萬能なる無意識の製作なのだ。

「母どもの平生の傑作、あの巢を見給へ。それは極めて多くの場合、種子の代りに卵を含む動物の實、胚子入りの玉手箱である。」

帯状斑のある女郎蜘蛛の卵が藏かくひ込まれてゐる種子の鞘は、「太陽に愛撫せられて破れる——恰度、熱し過ぎた石榴の皮のやうに。」

大戦の虱、ドルテシア (Dorthisia Characias) は、「袋鼠の袋のやうなものを後へ長くつけて、その身體の長さが三倍になる。そこへ彼れは卵を突込むのだ。そして若い奴等が其處で孵つて、矢張り其處から思ひ／＼に出て行く。」(昆蟲記)

一種の黒すぐり、生きた木の實のやうな櫛の臘脂蟲 (Kermès de Lyse) は、「黒檀の稜堡みたいな恰好に硬くなる。其處から或る日、移動することなしに無數の虱がわく。」シオヌス (Cionus) は、「(一種)の仔蟲が閉ぢ籠る薄皮の囊は、脱蛹の瞬間に鮮やかな正確さを持つた二つの半球に割れる。種子の散布が行はれなければならない時に、莢がはちけるのとそつくりその儘だ。」(昆蟲記)

それにしても、其處此處に、吾々が呼んで以つて意識となす所のものの未成物、何んか「漠然たる認識力」及び智能の目醒めのやうなものが垣間見られる。(昆蟲記)

昆蟲は乾燥と濕潤、蔽はれたものと露き出したもの、硬いものと軟らかいもの……との相異を認め、そして出来る丈け骨を折らないで住居を選むことが出来る。(昆蟲記)

一つ／＼の植物には、一種の縁によつて牽きつけられるそれ／＼の愛人がある。ラリヌス (Lari-

inus) は菊へ通ふ。蝶は葶草へ往く。ながべにはむし (Cynthia) は櫛へ通ふ。クリオセリス (Crioeria) 金龜子の一種は百合へ往く。「まめざうむしは豌豆と蠶豆としか知らぬ。ちよつきりむしは黒山楂子に現をぬかす。しぎむしはその櫛の實、若しくは榛の實しか知らぬ。」然しながら、玉茶へ往く粉蝶は金蓮花の葉の上をも好む。また、「山楂子の花總に酔ふ」はなむぐりは、薔薇の蜜にも矢張り陶然とする。

まるくま蜂は樹木の幹や古い梁の中へ、眞ん丸い廊下を穿つて子供等の宿とするのであるが、「自分で穿つたのではない出来合ひの廻廊をも利用することが出来る。」

カリコドマやアントフォラも、彼等の子孫の身を立ててやるためには、打ち棄てられた古巢の經濟的なことを知り抜いてゐる。で、機會がありさへすれば、彼等の先祖によつて穿たれた廻廊をその儘利用する。然しながら、さうはしても、到る處、あらゆる生き物を通じて、要するに凡てが力を儉約し、躍進を調整する生命の大法則に従つてゐる。

さうした所から、彼等の小さい魂が、經驗の作用によつて形づくられ、そして確定せられると結論すべきであるか。彼等が「最も適したもの」を認めるといふことは、即ち彼等が學び、比較し、

判断すると云ふことであるか。

左官蜜蜂は「街道の上で、乾いた埃を掻き集め、それに唾液を滲ませて固いセメントを作る。」然しながら、彼れは果して此の泥の硬くなることを豫見してゐるか。

「きごし蜂は、泥土を乾かしてその巢を作る。それは一滴の雨にも堪へないやうなものであるが、彼れはそれを隠匿かくまふために、人家の内を捜し求める。」それは判断の結果であるか。

黒山楂子のさう、むしは、その仔蟲が窒息しないやうに、空氣抜きのパイプを建てる。またスカラペ・サクレはその梨形の殻の細い頸の先へ、仔蟲が息つくことが出来るやうに、一種の濾過装置をしつらへる。更にまた、迷宮の蜘蛛 (Agelena labyrinthica) は、「姫蜂の探針から卵を護るために、その絹細工の中へ練土の胸壁を挟み込む。」一體彼等は、これを意識してやるのであるか。

クロト蜘蛛 (Clotho de Durand) の家には一つの戸、本當の戸がついてゐて「彼れは爪で引掻いてそれを開らき、一度外へ出て了ふと二つの扉をちよいと絹で引き寄せて、それを門で丁寧に閉ぢる。」此の家もまた、推理と論理との傑作であるか。(昆蟲記)

將たまた、彼等は何をやつても、その結果に就いては皆目知らないのだらうか。例へば、女郎蜘蛛

蜘蛛が良の絶妙な對數的螺旋を空間に描き出すのは、全く無意識の仕業であらうか。(昆蟲記)

まあ、だ、い、こ、こ、が、ね、を、見、て、み、給、へ。此の勇敢な糞食甲蟲が「偶然事に應ずる」これがファブルには理性の明瞭な特徴の一つを成すものである。ことの出来るのは、否定の出来ないことである。何んとなれば、ナイフの先きで以つて、彼れの巢の天井が切り開かれて、卵がむき出しにでもなると、彼れは直ちに修繕にとりかゝるのだ。「ナイフで掻き上げられた屑は、直ちに寄せ集められて、一つ／＼堅く附著くっけられる。間もなく瑕の跡は少しもなくなる。凡てがちゃんと元の通りにされる。」尙ほ見てみ給へ。何んといふ器用さを以つて、母だ、い、こ、こ、が、ね、が此の博物學者によつてひよいと與へられた、ちやんと準備せられた牛糞の小さい球を利用することが出来たことか。吾々が此の場合、尙ほもイリュジョンにかゝつてゐるのでないならば、此の糞食甲蟲に關する見事な研究の中でこそ、本能の限界に於ける知能の誕生——此の不思議の中の不思議を最もよく見ることが出来る!

然しながら、彼等の範圍は限られてゐる。ファブルはそれを十二分に示してゐる。そして彼れの埋葬むぼ蟲どもが、實に巧妙に事情へ適應することが出来て、困難な實驗にかけられても、旨く切り拔

けるのではあるが、他のあらゆるもの共と等しく、その種族に知られてゐる動作の範囲を越えず、そしてたゞ、彼等の本能の無意識な靈感に従つてゐるに過ぎないもの様である。(昆蟲記)

ファブルは單に觀察家であるのみならず、また胎生學者でもある。それが實によく現はれてゐる或る傑作の中で、彼れはオスミ(Osmia 蜜蜂の一種)の卵を以つて、あの無意識な靈智に關し、他の思ひもよらぬ地平線を吾々に展いて呉れる。

吾々は性の決定を司どる原因に就いて、今尙ほ摸索してゐる。それは實際、生物學がどうやら其處此處へ幾らかの光りを投げ、そして吾々は大凡の證據を幾らか手にし、それが牧養者によつて利用せられてもゐる。然しながら、それは殆んど云ふに足らない上に、何んと云ふ當外づれ、何んと云ふ不完全な推測の多いことか!

然しながら、オスミは吾々にわからないことを知つてゐる。彼れは生理學や解剖學に精通してゐる。そして、雄にしろ、雌にしろ、思ふ通りに餓鬼共を拵へることが出来るのだ。

此の眞鍮色の膚へ赤茶けた天鵞絨の毛をつけた美しい蜜蜂は、その後裔を茨の片端の窪み、葦の管、若しくは蝸牛の空殻の螺旋階段内へ住まい込ませるのであるが、吾々には想像しか出来ない恒久不變な一定の生殖の法則を知つてゐて、「斷じて誤ることはない。」

かうした驚くべき特權は、ひとりオスミのみならず、多くの蜜蜂に共通である。彼等にあつて雄と雌との發育は、まち／＼であるところから、未來の仔蟲のために、それ／＼大ききの異なる空間と、それ／＼量の異なる食物とがなければならぬ。大ききの優れてゐる雌には廣い部屋と、豊富な食糧。纖弱い雄には狭い獨房と、香臭い花粉と蜜との定食。」

所で、オスミがその卵の身を立ててやるために何處か住居を捜す時、彼れの出會す事情は多くの場合偶然なもので、勝手にその趣きを變へることは出来ぬ。そこで一つ／＼の仔蟲へ、それ相應の空間を與へるために、「彼れは住居の條件に據つて、雄の卵にしろ、雌の卵にしろ、自由自在に産み出すのだ。」

つちすがりの歴史と共に、實驗昆蟲學の最も立派な傑作たる此の非凡な研究の中で、ファブルは膜翅類にあつて、同時に性の連續の順序と配置とを司どるところの、あの寔に奇妙な法則の凡ゆる

詳細を、手に取つて見るやうに説明してゐる。

硝子の管をすげた手細工の巢の中で、彼れはオスミをして自然が欲するやうに、雌を最初に産ませないで、その反對に雄を以つて産卵を始めさせてゐる。蓋し、自然は昆虫に命じて、最初最も重要な性、即ち特に種族の永續を確保する性に専心せしめてゐるのだ。彼れは實驗臺や本や塚や、それから色々な道具のほとりにぶん／＼云つてゐる全詳細にさへも、その産卵の順序を完全に顛倒させてゐる。最後に彼れは、卵巢の中に入つてゐるオスミの卵には、未だ一定の性がないこと、また卵が將に輸卵管を出でんとするその瞬間に、はじめて「母の思召に依つて」決定的な、宿命的な、神祕な極印を受けることを見せてゐる。

然しながら、此の「見ることの出来ないものに關する明らかな概念」が、一體何處からオスミへ來るのであるか。これまた吾々にとつて、その隠された意味を發見して最後の言葉を知ることが、おいそれとは出來さうにもない本能の謎の一つである。(昆蟲記)

註一「近いうちに、自然科学雜誌へ、膜翅類の性の配り方に關する研究——といふ題目の論文を出すことになつてゐる。昆蟲は、雄卵若しくは雌卵を意の儘に産むと云ふことを示す研究である。それは一般法則

に關入らない、何んと云ふ奇妙な特權ではないか。昆蟲世界は別世界である。それが屢々吾々の最も堅固な觀念をさへも引つくりかへす。子供の性が如何にでもされる……なんて、吾々の胎生論にとつては、何んたる障礙であるか！……」(一八八四年十二月五日、ドウラクウルへ送つた手紙)

それで盡きてゐるか。否。この素晴らしい大家が案内して呉れる際限のない奇蹟的な世界を、未だ吾々は一周しては居らぬ。それが吾々に提供するあらゆる光景を盡さなければならぬならば、私は何時になつたら終へることか。

更に一段下つて、もつと下級な生き物、眼に見えない顕微鏡蟲のところへ行つてみよう。色々な傾向、飛躍、思考、努力、意志、「色々な權謀術數、色々な未曾有の戰術」を、吾々は其處に見出すことが出来る。

黒い色の、碌でもない虱、生きた點、此のは、*ハム*、*メウ*、類に屬するシタリスの仔蟲は、孤獨な生活をする蜜蜂、アントフォラの寄生蟲である。冬の間、彼れらは辛抱強く、日あたりのよい崖の廻廊の入口で、未だ粘土の搖籃に閉ぢ籠つてゐる若い蜜蜂の脱蛹を待つてゐる。雌よりも少しく早く孵るアントフォラの雄が、いよいよ入口の廊下へ現はれて來る。と、頑丈な爪を以つて武装した虱ども

が、うよ／＼しながら往つたり來たり、すかさず彼れの毛衣へすがり着いて、遍歴のまに／＼到る所へついで行く。然し彼等は間もなく自分の過ちを悟る。即ち生きた點みたいな此の虱どもは、アントフォラの雄が終日野を駆けずり廻つて花の蜜を漁り歩き、その上、何時でも寝るのはきまつて外なので、自分達の目的には少しも役立つて呉れないことが分るので。然しながら、アントフォラが戀女へ云ひ寄る瞬間が来る。婚禮の時が来る。その時眼にも見えないやうな黒い蟲けらどもは、得たり賢しとばかり、さうした逢曳きを利用して雌へ鞍替へをする。「さうしてみると、これらの矮人に一種の經驗がある。」(また、智能の閃きもある——と此處で堪らなく附け加へたいではないか！)

今度はアントフォラの雌の毛衣へ獅噛みついて、シタリスの蛆蟲は其處に身を潜め、そして獨房が整理されてゐる廻廊の奥まで彼女に運んで行つて貰ふ。それから彼女は「産卵の正確な瞬間を窺つて、アントフォラの卵の上へ坐りこみ、そして蜜の表面へ降りて行く。それはアントフォラの未來の息子に取つて代つて、その食糧と家とをせしめようためである。」

「もう一つのゼラチン質の小さい點、二つの「生命の影」、それでゐて左官蜜蜂の掠奪者仲間である小蜂、即ちルウコスピス (Leucospin) の仔蟲は、此の左官蜂の獨房には一人前の食物しか無いことを知つてゐる。其處へ這入るが早い、此の「名もない形」はぐる／＼駆け廻る。數日間も動き廻る。「彼れはそは／＼しながら前後左右上下を隈なく捜す。」彼れは此の新らしい住居を一週し、「何んか目的を辿つてゐるかのやうに、胸を躍らしながら眞暗な中を探し歩く。」此の「活氣盛んな小さい球、」此の猛り狂ふ原子はなにを欲してゐるのだらうか。彼れは何處か未踏の隅つこにでも、他の仔蟲——やつつけなければならぬ競争者があやしないかと、それを點検してゐるのだ！これを以つて見ると、才能と創意の豊富さを以つて吾々を驚嘆せしむるものは、必ずしも美しい昆蟲——標本の誇りをなすやうな昆蟲ではない。それは實に多くの場合、極めて慎ましやかなもの、極めて下級なもの、不可見の境に彷徨ふものどもである！

然らば本能とは何んであるか。また理性とは何んであるか。吾々は、生命が如何に多種多様であるか、氣紛ぐれであるか、此のプロテ (Prote) 妻を自由自在に變へることの出來た神——神話) が如何に猾くつて手に負へないか、そして其處には單に二種あるのみでなく、實に無數の似もつかないも

のがある」(エマアソン)ことを知るならば、如何にして生命のあらゆる發現の盡きざる目錄を作ることが出来ようか。そしてまた、何故狭隘な分類の中へ凡ゆる種と未知の變種とを閉ぢ込めて、一方本能と、他方知能との、さうした二様式しか無いなどと云ふべきであるか。否、寧ろそれは到る所、生物の中にあつて働きかけ、豫見の出来ない形式と無数の假裝との下に、際限なき度合を取ることの出来る、常に同じものではないか。

それは實際本能は、個人的には範圍が酷く限られて、單純と複雑と、若しくは多い少いを區別することが出来ないかも知れぬ。例へば、蠅螂の巧妙な痲醉術師たるタクキテス(Tachyte manticide)は、その仔蟲があらゆる直翅類を無差別に頂戴するにも拘はらず、彼れの専門外なるばつたを痲痺することは出来ぬ。また同じ種の中でもそれ／＼族によつて、甚だ相異のある腕前の完全さは、事實に於て甚だしく限られてゐる。

然しながら、擴がりに於て、それは何んといふ豊富さ、何んといふ多産、何んといふ力であるか！ また、これらの散らばつてゐる無数の無意識な靈感が、どれだけあらゆる人智に先立つてゐることか！ 恐らく人智の極めて高い翱翔さへも、その根柢に於て本能作用——此の「凡てが據つ

て以つて動き、凡てが據つて以つて生きてゐる所の普遍智」の反映に過ぎないものである。(昆蟲記)はなだか蜂(Bombex)へ唇を語る所のものは——彼れの仔蟲が食物を平げて了つて、新しい走を要求してゐる時刻を彼れに教へる所のものは、また、み、むしに季節や寒氣の豫防をなさしめる所のものは、それは母性の本能である。行列毛蟲の晴雨測定術は、その正確なる點に於て、吾々の極めて完備せる測候所のそれにも優つてゐる。

漆食の屑や、若しくは何んか他の小さい塊りを以つて、その網へお、も、しをつける人家の蜘蛛(Enaria domestica, Lin.)は、靜力學、及び均衡の法則の本能を持つてゐる。

大かみきり(Cerambyx nilis)の仔蟲は椋の木を厚みを通ふてゆく時に、闇を通してその行く手を導く羅針盤として、自由な擴がりの感じ——林をひたして草を縁としてゐる大氣の豫感を持つてゐる。

螢は生餌をゆつくりと平げるために、クロロホルムやコカインの不思議よりも先きに、痲醉の秘訣を心得てゐる。

泡ふきむしは、チユバルカイン(Tubalcain 火を起す術を發明した人)が革囊を以つて爐の火を起す

工夫をした前に、「既に輪を發明してゐた。またパン製造が原始文明と共に起るに先だつて、だいがねは既に醗酵の神祕を知つてゐた。(昆蟲記)

蜜蜂の巢や胡蜂の巢の素晴らしい幾何の問題は、「力の經濟」の一つの特殊な場合に過ぎぬ。そして幾何の觀念は、シジプス (Sisyphus 金龜子の一種) が土手の上を轉るがす牛糞の世界や蝸牛の殻の中に到るまで、實に全自然の到る所に見出される。

それ故に、本能は化學者の色々な機具にも、將たまた「諸大家のメス」にもかゝらないのだ。

體形を吟味せよ。擴大鏡のレンズの下に器官を緩くりと點檢せよ。趨性 (Tropisme) を組合せよ。反射運動を起させよ。翅翰を調査せよ。翅脈や指の數を勘定せよ。點を數へ上げよ。一本の條だつて、一本の毛だつて忘れるな。口器の一つ／＼を比較せよ、測定せよ。範圍を設けよ。部類を作れ……然しながら昆蟲の習性を確然と知ることの出来るやうな、たつた一つの詳細さへも、あらゆるさうした構造に見出すことは出来なからう。少しばかりの些細な相異などは如何でもよいではないか！「隣り合つてゐる二種の間を、越ゆることの出来ないやうに截然と分つ特徴は、解剖學的相異

なんかの中よりも、寧ろ心的相異の中に於てこそ判然と看取せられるのである。本能は體形を支配する。道具は労働者を作りはしない。」そして、たとひこれらの構造の一つ／＼が、寔によく順應せられてゐるやうに見えても、それ自らの中には理由、乃至目的が含まれては居らぬ。

それはまた、傾向を産むあの能力が、實に普遍的で、全自然の中に擴まつてゐるところから、その全般を見渡すことが今の所不可能な所以である。それは、あんなにも多く本能の觀察をしてから、屢々その法則を纏め、その綜合を公式に表はすやうに切願せられたフアブル自身の意見だつた。彼れは何時もの平靜さを以つて、常に斯う答へたのである——「私が幾つかの砂粒を引掻き廻したからつて、太平洋の深さが分るものか。」

されば、本能の本質に就いて如何なる意見が吐かれようと、昆蟲の常にすることは、彼等の器官の眼に見ゆる外形に、云はば結びつけられては居らぬ。そして彼等の動作は、彼等のものとなる道具を必然的に豫想しはしない。

有機體、とくに植物にあつては、その物質的事情に於ける感知出来ないやうな變易さへが、時としてその特徴を轉向せしめ、そして新らしい傾向を生ぜしめるに足ることは、誰しもよく知つてゐる。それにしても物理的變化が——それは常に無數に存在してゐながら、極めて鋭い眼にも止まらなかつたほどさゝやかであるにしても、甚だしく似もつかない能力の出現を決定するに足りると云ふことは、フアブルと共に吾々の感嘆せざるを得ない所である。いろ／＼な説明の出来ない伎倆、豫想外な習慣、思ひもよらぬ物理的傾向、極めて珍奇な工業等が、彼方此方で事實上同一な器官を以て行はれてゐる。同じ道具は何にでも等しく役に立つ。たゞ、それらを多種多様な目的に適應せしめることの出来るのは、それは才能だけである。

アンテデウム (Antidium 蜜蜂の一種) には異なる二つの工業がある。「綿をフェルトにしたり、有毛植物の柔かい絨毛を梳いたりするものどもは、樹脂を捏ねては細かい砂利を混ぜる連中と、同じ肢、同じ部分々々からなつてゐる同じ大顎を持つてゐる。」(昆蟲記)

註一 それはまた「解剖學が直接に生理學を説明すると思ふたのは、凡ゆる解剖學派の誤謬、乃至イリニョヨンである」と考へてゐたクロオド・ベルナルによつて、屢々發表せられた意見でもある。膜翅類研

究の大家の一人、ポルドオの博學な昆蟲學者ベレエは、勞働者は結局道具を作るに到るし、彼れ自らは大顎を一寸見さへすれば、その持主の職業がよく分るなどと云つてはゐるが、それにしても彼れの意見は矢張り同じであつた。彼れはフアブルへかういふ奇妙な手紙を書いてゐる。

「……樹脂の捏ね手の大顎が、綿の職人のそれと、常に全く變つてゐるといふことは、何が何でも頗る眞實であります。綿の職人は嘗て四本の丈夫な大きい齒しか持つてゐなかつたのではありません、彼れは何時でも澤山の小齒を持つて居りました。前者の大顎は、磨り減ると、うね／＼になるか、若しくは眞直になるか、乃至はその傾向を持つてゐます。毛を梳く者の大顎は、たとひその小さい齒が幾らか鈍くなるやうな時でさへも、依然として甚だ明瞭に澤山のぎざぎざがついてゐます。それに樹脂の捏ね手の大顎は大きく強くて、尠くも磨り減つてからは、それはほんとうの匙のやうであります。毛を梳くもの大顎は、狭くてその外面は凹んで居ります……大顎を一寸見さへすれば、本人の職業が分ると私は申しました。私は今尙ほ左様申します。そればかりではなく、私がかうした大顎の二型を知らなかつた前に、既に全體の恰好だけによつて、職業の二種類をそれ／＼二つの範疇に、二つの異なる函の中へ分け居つたと云ふことも附け加へ度く思ひます……そして、未だ專業が實際に私へ知れてゐない者どもも、事實に於て、私が彼等に豫想するやうなものを持つてゐるに違ひないと、私は斷言するに躊躇しません。若しかしたら、何時かあなたに私の豫想を確める機會がお有りかも知れません。何んとなれば、これらの種の或るものは、あなたの地方のものですから……要するに、一つ／＼の營業組合には、それぞれ特殊な道具があります。それをあなたは正確でないと思はれたのです。

然しながら、私は二つの工業を説明するに、二つの道具を以つてしたことに對して、何うしても辯解したいと思ひます。それは常に私が信じて來た所のものと、全然反對なのです……道具が労働者を作るなどと云ふことは、それは單に觀察と相容れないばかりでなく、それはまた、進化思想の反對でもあります。だからこそラマルクは、それは實際あんなにも攻撃せられ、あんなにも嘲弄せられはしましたが、さすがに必要が器官を生ずると云つたのでした。今日私どもは、種の習慣を出でて新しい方向へ或る器官が屢く用ひられると、それが此の器官を變化させるに到ると信じて居ります。日常だんの觀察が、これを實證して居ります。そこから、遂にはその器官が著しく變化すると考へられるのです。然しながら、さうした變化も必然的ではありません。と云つても、それには大して異常なことも、大して曖昧なことも、若しくは斯く／＼の哲學説と抵觸すると云ふやうなことも、全くないと私は思ひます……」(一八九〇年十二月三十日、ボルドオにて。ペレエからフアブルへ。)

黒山椋子のさう、むしは、「此の木の實の堅い核を吹嘴を以つて彫刻する。恰好が酷似してゐる彼れと同僚は、同じ吹嘴を使つて葡萄の葉や、白楊の葉をシガアのやうに卷く。」

葉切り蜂 (Megachile)、此の薔薇の蜜蜂の道具は少しも彼れの工業に適應してはゐない。「それにも拘はらず、完全に圓く截られる葉の斷片は、コンパスで量つたも同じやうな正確さを持つてゐる。」

Les symphytes viv. parod. pour l'industrie ?
Le fableur de Picannivache. Un coq-fableur devrai-
ti gromer ce qu'il dit. Peut-être met-on le poivre au feu (fig. 3)
l'écritoire pour l'écriture, l'écrit pour l'écriture, l'écrit pour
l'écriture, l'écrit pour l'écriture, l'écrit pour l'écriture
origines ou d'origine pour

J. M. F. (1892)

フタツノ筆蹟

まるくま蜂は、木、若しくは古い梁の中に廻廊を穿つために、他のものどもにあつては、粘土へ噛みつく鶴嘴となつてゐるのと、全く同じ道具」を用ひる。また、子守蜘蛛は犠牲をあんなにも巧妙に手術するに用ひる「繊細な武器」——あの調整の鈎を以つて、矢張り土を掘り、石を起し、穿ち、突き、引搔くのである。

工業や才能と同じやうに、習性も解剖學によつて支配されはせぬ。

同じやうな構造の二種のかみきりは、それ／＼全く異なる胃の傾向を持つてゐる。「一つは排他的に糞を食し、他は山楂子、若しくは莢莖を食する。」

「蠶螂の貪食症、戦闘性、カルナヴァリスムは何處から來るのであるか。またエンブサ(Embrya)の節食、平和主義は何處から來るのであるか。構造が殆んど同一であつてみれば、必要、本能、及び習性なども當然同一でありさうなものではないか。」

これと同じやうに、黒さ、そりは、同僚のラングドツクの白さ、そりの習性が見せるやうな、頗る興味のある特徴を少しも見せてはゐないやうだ。(發表せられない觀察)

これによつて見れば、構造は處世術について何んにも語りはしない。器官は職分を説明しては居らぬ。専門家をして擴大鏡や、顯微鏡の上で睡氣を催させて置け。彼等は或る科、若しくは或る屬、否、たゞ一個のものに關して、緩くりと澤山の詳細を蒐めるかも知れぬ。彼等は、極めて巧妙な調査を、堆く積み上げ、二つ三つの些細な相異を明確にするために、それさへ徹底的に究はめる見込みもなしに、幾千萬の頁を書きなぐるかも知れぬ。——その癖、最も美しいものは見逃がして了ふ！

昆蟲が、これを最後にその肢を硬はばらせる時に、彼れの小さい魂の祕密は、それを活氣づけ、それを生かしてゐた凡ての感情と共に、永遠に消えて了ふ。死のなかに凝結するところのものは、最早や生命であつたところのものを語ることは出來ぬ。これが即ち天才の特權であるところの直覺を以つて、プロヴァンスの詩人が次のやうな朗らかな詩句の中に表してゐる思想である。

Oh ! l'eau de sèn qu'èné l'escaupre

Furnant la mort, cresson de saupre

La vertu de l'abîme e Ion secret du méu !

Mirville

おとー 阿呆らしい メスをもつて
死をほじくつて そして蜜蜂の徳
また蜜の配密も 分るなどと思ふのは

九

進化論

一體碌でもない、惨めな蛆蟲が、如何にしてその愕くべき智識を獲得したか。「彼れの習性、彼れの傾向、彼れの工業は、時間の限りなき途上に於て、それからそれと相繼ぐ経験によつて得られた無限に小さいものの整数であるか。」

かうした言葉を以つて、今、フアブルは進化論の問題を掲げる。

太初以來地球の表面に限りなく相繼ぎ、常に入り代つて來た種族の間の連絡を辿ることは困難であるにしても、あらゆる生物が相互に密接な關係を持つてゐることは確かである。そして、今日の體形が如何にして舊體形から出て來たかを説明しようとする所の、壯大にして詩的な見解に満ちた素晴らしい自然觀——あの多産な進化論の假定は、無数の事實に對して尤もらしい、寔に有利な説

明を與へ、多くのものはこれによつて尠くも以前の如く不可解ではなくなつてゐる。

さもなくば、かくも複雑な、かくも絶妙な多くの本能が、如何にして突然「國の函」から跳び出すことが出来たのか、想像することだに出来ないのである。

然しながら、ダアキン説が多くの事實に對して空想的な説明を與へようとしたことも、また疑ひを容れないことである。また、ファブルは何ものをも想像することを欲せず、單に事實を記録してゐることも明々白々なことである。可能の世界へ彷徨ひ行くよりも、彼れはむしろ實在を固執することを好む。そして他一切に關しては簡單に「解らない！」と答へるのだ。幾何やその他の嚴正科學に養はれた此の探求的な、實證的な、嚴格な、精密な、そして獨立自尊の精神は、嘗て「それに近い」とか、「それらしい」とか、若しくは偽りの光りを以つて満足したことはなく、ひたすら假定の權威に疑ひを挟むのであつた。

且つまた、燥急な結論の前に常に安全柵だつた彼れのがつしりした常識は、科學の限界と、普遍化するためには「觀察と實驗との骨の折れる途上に於て、」どれだけの事實を蒐集しなければなら

ないかと云ふことを、餘りによく知つてゐた。特に生命には吾々の精神も突き止める事の出来ない幾多の祕密があると云ふことや、「一個の蚊の最後の言葉を知る前に、人智は世界の記録から抹殺せられるであらう」といふことを豫感してゐた。

さうしたところから、彼れは官僚學者間に胡散臭く思はれた。彼れは異端、殆んど反逆者のやうに見做された。何んとなれば、巧妙なる進化論がその珍奇の輝きのなかに、到る所心酔的となつてゐる時に當り、此の學說の牴觸する越え難き困難の或るものを、彼れは大膽にもまさ／＼と見せたのだ。

諸大家の言葉も討究することなしには受け容れない此の謹慎家の裡に、當時未だ、一人として未來人を看破することの出来るものは無かつた。左様、未來人！ 何んとなれば進化論を攻撃しながらも、ファブルは時代遅れでないのみか、尠くも動物心理學の領域では革新家、眞の先驅者の才能を現はしてゐたからである。

それはまた、常にあんなにも直接な、あんなにも個人的な彼れの觀察が、心意の所産にかゝる幻

術的公式に依つて断定せられてゐたものの反對を、屢々彼れに現示してゐたためである。進化論者によつて考へ出された巧妙なメカニスムに、彼れは反對の議論を對立せしめはしなかつた。彼れは残酷な事實、自明の證據、極めて確實な、拒否することの出来ない實例を以つて、これに對立させたのである。彼れは彼等へかう云つた。

「一體、或る毛蟲がひり／＼させるものを塗りつけてゐるのは、彼等の敵を背向けさせるためであるか。然しながら、慕光蟲の仔蟲は椋の行列毛蟲を食つてゐるが、それで一向平氣ではないか。鱧節蟲もさうである。松の行列毛蟲の死骸を平氣の平左で食つてゐる。」

また、はねひげ蠅に關聯して、彼れが擬態論を散々にやつつけてゐる堂々たる立證を見給へ。進化論によると、或る昆蟲は他のものとの類似をいふことにして、こつそり寄生蟲となつて忍びこみ、そして彼等害して生活するのださうな。はねひげ蠅の場合も即ちそれで、黄色と茶褐色との條を横につけたその着物が、どうにかかうにか彼れを胡蜂に似せてゐると云ふのだ。「たとひそれが自分の爲めではなくとも、尠くも家族のために寄生蟲となつて胡蜂の所へ這入り込まなければならな

いので、彼れは術策を弄して犠牲の着物を引つかけるのである。」それが擬態の極めて奇妙な、極めて顯著な實例の一つであるといふことだ。そして十分調査もしない幾多の博物學者は、此の場合に於てこそ進化論の一大勝利を祝賀することが出来るかと考へた。

一體は、はねひげ蠅がどんなことをやつてゐるか。それは實際、彼れは少しの不安もなしに、胡蜂の巢の中へその卵を撒いてゐる。然しながら、これを精密に觀察して見ると、彼れは蜂團の敵ではなくて、その貴重な補助者であることが分つてゐる。彼れの蛆蟲どもは、こつそりと身を潜めるところか、「凡ての異人が立ち所に殺戮せられ、芥溜めへおつぱり出されるにも拘はらず、蜜蠟の上を往つたり來たり、大手を振つて闊歩することが出来る。」それは「彼等が胡蜂の巢から死人を片附けたり、その仔蟲から消化の滓をとつてやつたりして、實際此の城市の衛生に氣を配つてゐる」からである。此の合宿所の一つ／＼の部屋へ、前身を次ぎ／＼に突込んで、「彼等は仔蟲に大小便をさしてやる。仔蟲は幽閉せられてゐる所から、どうにもそれを自由にすることが出来ないのだ。」要するに、はねひげ蠅の蛆蟲どもは、胡蜂の仔蟲共の面倒を見てやらうと云ふ小さい乳母である。「彼等は胡蜂の子供等のうんこを拭つてやる。」

何んといふ驚くべき結論であるか！「流行の學說」に對する、何んと云ふ思ひがけない、面喰らはせの返答であるか！

それにしてもフアブルは、その詩的な天性と熱烈な想像力とを以つて、あらゆる動物を結びつけてゐる宏大な關係の複雑紛糾を、既に天晴れ見透してゐたやうに思はれる。然しながら、彼れの著作の堅實さを證するものは、それは即ちあらゆる理論、あらゆる主義、及びあらゆる學說等が、そこから各々證左や論據を汲み取ることが出来るからである。

而かも、彼れ自身は何んらの主張も、何んらの理論も、何んらの學說も持つてゐないことを誇りとしてゐるが、それは幾らか黨派心の暗示によるのではあるまいか。そして進化論に對する彼れの批評も、彼れ自身が創造の進化的歩みへ大なる貢獻をなしただけに、時にはむしろ極端に走つてゐるのではなからうか。

第一、ラマルクがあれほど力説した無數の外的事情の大いなる役目、即ち環境の否定出来ない影響を、彼れは決して否認しはしない。が、さうした因子の役目も彼れの眼から見れば、自然の經濟

に於て單に附屬的なものであり、飽くまで第二義的なものであるに過ぎぬ。尠くも進化なるものその全體としても、また詳細としても同様に特徴づけてゐる確然たるあの方向、乃至靈妙なる調和に至つては、さうした因子の所爲と解釋することは出来なからう。

普及と教育とを目的とした素晴らしい教科書の一つの中で、彼れはダアキンが考へてゐたやうな淘汰——この「崇高な魔法使ひ」によつて行はれた變化を、丁寧懇切に枚擧してゐる。彼れは、チリ (Chili) の山の上では一個の有毒な礫でもない球根である馬鈴薯の變態を語つてゐる。また、太平洋の斷崖の上では一個の野草に過ぎず、莖は高く、いやに緑な葉がまばらに亂雑についてゐて、其味はひり／＼し、臭ひも強烈だつた「玉菜の變態を物語つてゐる。彼れは「その昔、人に知られぬ惨めな芝草」だつた小麦を想ひ起してゐる。最初の梨の木は「澁い、厭らしい實のなる、針だらけな、全く仕末に終へない灌木」だつたと云ふ。沼のほとりに繁茂する野生のせるり (Cochin) は、「根元まで青くて硬く、そして厭な味がする。」それが段々と軟らかになり、甘味がついて白くなり、そして最後に「毒を注がなくなる。」

此の上もない正確さを以つて、此の偉大なる生物學者は、吝な土壤が動物なり植物なりに、不十分な養分しか供給しなくなると、何處までその大きさが變化するか、どれ程小さくなるものか、これをも實によく觀たのであつた。同じ問題に専心してゐた他の科學者と何等の交渉もなく、また彼等が小さい哺乳動物に實驗を行つて、そして體軀の矮小なるは多くの場合、生理學的缺乏に起因することを證明した結果についても何等知ることなしに、彼等は昆蟲學の見地から彼等の結論を確證し、明確にしたのであつた。(昆蟲記)

事實に於て、彼等は殆んど讀書せず、自然を唯一の師となした。そして豫め斯く／＼の主題に關して爲されてゐる研究から、何等かの刺戟を得たことは絶對になかつた。自分以外の何人にも頼らないで、自然のままの事實へ肉薄した彼等は、書籍から得られる智識などは事實に較べると、實に一抹の煙のやうなものに過ぎないと考へた。それに科學者にしろ文學者にしろ、彼れが殆んど他人に負ふところのないことは、ちぐはぐな書物しか載つてゐない彼れの貧弱な書架を見さへすれば、直ちに領づかれることである。

眞の博物學者・哲學者として、彼れはまた、尠くも歐洲の昆蟲世界に於ては、一般法則の例外をなしてゐる若干の奇異な變則を明らかにした。彼れがさうした解剖學上の奇妙な問題をかゝげたのは、それは單に昆蟲學者の好奇心や氣晴らしのためではない。それは寧ろ、否、特に進化論者のデアキン精神に對してである。

例へばスカラベ・サクレが何故に不具に生れ、そして生涯不具となつてゐるか。換言すれば、何故彼れの前肢に指が一本もないか。

「果して附屬器の形の變化が、凡て或る習慣、或る特殊な本能、若しくは生活條件に於ける或る變化を語るものに過ぎないならば、然らば進化論たるもの、宜しくかうした不具の理由を何んとか辯明すべきである。何んとなれば、要するにこれらの動物も、他の凡ての動物と同じ立案に基づいて、全く同じ附屬器を授けられるからである。」

せんちこがねの後肢は、「大人にあつては完全に發育してゐるが、仔蟲にあつては萎縮して手足の切れ残りみたいなものになつてゐる。」

種族、その移住、その變化等に關する一般史は、さうした或ひは一時的だつたり、或ひは決定的だつたりする異様な不具を、何時かは必ず明瞭にするであらう。或ひはまた何處か遠い國に埋もれてゐるかもしれない未發見の典型に邂逅でもするならば、それが説明せられるかも知れぬ。(昆蟲記)

また、シタリスとは、いんめうとのあゝした嘘のやうな幾度もの變態は、胎生學や種の進化の歴史にとつて、何んと云ふ評價を絶した研究資料であることか！ 此の場合ファブルは動物學者の間に伍して、その驚くべき局面を示してゐる。あの過變態の問題こそは、實に科學的探究の極めて立派な實例の一つである。それは四半世紀の間、占術に近い明敏さを以つて研究を續けられたものであつた。そして彼れはこれを以つて、大多數の昆蟲が困難な狭い路を潜り抜け、切り抜け、そして解放の仕事を成就するために着ける假りの衣——あの二度の過渡體形の既に豊富な領域を、一層豊富にしたのである。(昆蟲記)

思ひも寄らない奸策を用ひて、これらの甲蟲の仔蟲どもは、アントフォラの獨房内へ這入り込む。そして若蟲狀態に達するまでに四回の脱皮を行ふ。包皮以外に、内部構造をば變へないやうな、單

に外的なこれらの變形は、それ〴〵環境と食物との變化につれて起る。構造はその都度「大人でもするやうに、完全に」新しい生活様式に適應せられる。そして蟲けらは目明きから盲目となつたり、肢を失くしてはやがてこれを見出したり、その細りした身體がビール腹はつてになつたり、硬かつたのが軟らかになつたり、最初鋭かつた大顎が次には匙のやうに窪んだり……一つ〴〵の體形の變化が、常にその蟲けらの生活狀態に於ける新しい變化を動機としてゐる。

その度毎に異つた職分に役立つために、全く似もつかなくなる器官のかうした相繼ぐ出現——四重の幼蟲生活のかうした不思議な進化、それを何んと説明すべきか。

かうした眼の變化、かうした幾重にもなつてゐる袋のやうな包皮、かうした多様な變形——それらを司どつてゐる理由、意義、高い法則は一體何んであるか。

如何なる過去の適應によつて、シタリスはそれ〴〵の年齢に對して或る太古の遠い遺傳を見せるやうな、かうした發育の異常な色々の局面をそれからそれと獲得したのであるか。(昆蟲記)

尙ほ、如何に多くの論據を、進化論は彼れの著書から汲み取ることが出来ようか！ また如何に

多くの説明を彼れ自らが、不知不識の間にデアキンの哲學へ供給してゐることか！デアキンは彼れへ送つた或る手紙の中で、次の如く云つてゐる。「若しも私が本能の進化に就いて書くならば、私はあなたの呈供して居られる事實の或るものを、有益に借用することが出来るでせう。」(一八八八年一月三十一日、デアキンからファブルへ) また、「狡智が傳はる」といふ考へを、彼れは洩らしてゐるではないか。即ち彼れは沼の海賊なる龍蟲（つちすがり）の残忍な仕打ちのなかに、石蠶（いしご）が鞘から追ひ出されても、再びそれを作る能力の動機があるやうに思ふ。「此の海賊の襲撃をまくために、石蠶は大急ぎでその鞘をおつぼり出して、すうつと底の方へ沈んで行き、さつさと引越しをするものなんだ。必要は産業の母である。」つちすがりは殆んどすべて、甲蟲へのみ喰つてかゝる。とは云へ、盛装のつちすがり（Ceroeris ornata F.）は、膜翅類を以つて仔蟲を養ふ。またセロコ（Ceroconia）は、はんめう類の中でも奇妙奇天烈な法則によつて蜜の代りに肉を食べる。迷宮の蜘蛛は姫蜂によつてその家族が襲はれないやうに、巢の一層々々の間へ砂の壁を挟む。そしてファブルは、其處に進化したつある本能があるのではないかと自問してゐる。

また吾々自身の構造は、最も完全な、最も高いものではあるが、其處に此の深い観察者は缺陷を見出して驚き怪んでゐる。一體ほんとうに缺陷があるのであるか。下等動物の間に於て、あんなにも立派に證明されてゐるところの、あの神祕な未知の感覺だけに就いてみても、果して吾々が創造の極致であり無上の歸趨であるならば、何故それを受け繼がなかつたのか——さう彼れは訊ねてゐる。

然しながら、ベルグソンが奨めるやうに、若しも吾々が吾々の直觀を洗煉するならば、恐らく吾々の奥底に眠つてゐるに過ぎないさうした不思議な能力を、或ひは目醒すことが出来なからうか。例へば——人間と動物とは深淵を以つて判然と分かれた二つの異なる心世界であるところから、その一方から他方へ嚴密に結論することは出来ないにしても——赤蟻（あかあ）、はなだか蜂（はなだか）、つちすがり（つちすがり）、鼈甲蜂（かまがし）、左官蜂（ひだり）、その他實に多くのものをして誤ることのない確かさと、信じることの出来ないやうな正確さを以つて方向を決定せしめるやうな、あゝした定義することの出来ない感覺が、旅行家等の云ふところによれば、サモイエドにあつても多少鋭敏になつてゐるらしいのである。彼等には、氷の山の間を蜿蜒つて彷徨ふに拘はらず、その深い霧の中でさへ方向を誤らない不思議な能力がある。自然に接近してゐて、その遙かに遠い祖先以來、絶えず荒野の無限の靜寂を聴いてゐ

る他の民族にも、やはりさうした感覚がある。

註一 Samoyedes 白海からエニセ河に到るまで、北氷洋に沿うて氷に蔽はれた高原に住む遊牧の民族。

(譯者)

更にまた「生命を人爲的に改造し、」隣接する種の親類關係の中に後裔の證據と完全な連絡とを見るところの進化論者は、フアブルの著作を通して、生餌の未だ不確な點を刺すつちすがりの近親——とつくり、蜂やひめどろ、蜂の原始的な手術のなかに、個々ばらばらな本能ではなくて、既に方法を完成しようと試みつつある構成中の或る種の——一言にして云へば、やがてあな蜂やじが蜂の妙技となつて發揮されるあの驚くべき能力の出現を其處に見ずにはゐないであらう。

たとひかうした麻醉術の大家達は、あんなにも素晴らしい巧妙さを獲得してゐるにしても、事實に於て、決して仕損じることがない譯ではない。毒が適宜な點へ注ぎ込まれないで、あな蜂はそのために盲探しをし、へまな手術の仕方をし、當てずつぼうに短剣を突き立てたりする。そして時によると蟋蟀をやり損こなつて、此奴が甦へり、肢を突張つてぐる／＼廻り、そして歩き出さうとす

るやうなこともないではない。

ところが博物學者のうちでも極めて實證的をフアブルは、斯う訊ねる。都合のよかつた偶然の行爲を利用してから、彼等は先輩と接觸し、「實例を模倣することに依つて」改良され、そして彼れの經驗は確定し、それが遺傳によつて傳へられ、やがて種族の中に固定されるやうになつたのだ——と、斯う諸君は考へるのか。(昆蟲記)

そんな風だと寔に結構だ！ そんな風だと、彼等の生活がぐつと理解の出来るものとなつて、一層人の心を唆り、一層麗はしく、そしてそこから一層史詩的になる！

然しながら、蜂がその繭をやぶつて外へ出る時に、彼れの師匠は何處にゐる？ 先輩どもは夙うに姿を掻き消してゐるではないか。さうしてみると、實物教育などと云ふことが如何して出来るのか。「思ふやうに世界を造る」諸君——さうした諸君の返答はかうだ。疑ひもなく、彼等には、今日もう師匠はない。然しながら、地球の出來た最初の頃へ想ひを馳せて見よ。さすがにリュクレエスが既に書いてゐるやうに、何もかも新らしい世界には、未だ嚴寒も酷暑もなかつたのだ。永遠

の春が地球を包んでゐた。そして昆蟲は今日のやうに、秋の最初の寒氣に見舞はれて死んで了ふやうなことはなかつたので、相繼ぐ二代は共々に生活してゐた。そして、次の代は思ふ存分實物教育を受けることが出来たのだ……

胡蜂の城市に生き残つてゐる連中が、冬が近づくと如何なるか。これを鐘形の鐵網の下で見ると、再びフアブルの實驗室へ這入つて行かう。

フアブルは觀察をするために、胡蜂どもを一定不變の溫度の氣持ちよい場所へかくまつてゐる。ところが「退引ならぬ時」が來て、永遠性を授かつてゐたかのやうな生命の資本が盡きて了ふと、此の胡蜂どもは幸福とあらゆる配慮にも拘はらず、矢張り死んで了ふ。これと云つて眠につくやうな原因もなしに、何んらの病氣が忍び込んでゐると云ふでもなしに、また何んらの出來事があると云ふでもなしに、彼等の間に死ぬべき運命が勃發する。「突然、胡蜂どもは、恰かも雷にでも撃たれたかのやうに落つちて、少時お腹を動かし、肢をじたばたさせ、最後にちつと動かなくなる。恰度、彈機ばねの解けきつた機械か何んかのやうだ。」それに、此の法則は一般的である。「昆蟲は生れながらにして父も母もない孤兒である。但し、社會的生活を營む昆蟲と、それから老壽を樂んで

死しぬ糞食甲蟲とは別である。」(昆蟲記)

且つまた昆蟲は、彼等を働かせる動機に就いて全く無意識であるが、此のことだけに依つても彼等は經驗の教へを利用して、狭い範圍から踏み出し、そして彼等の習慣を革新するなど云ふことは、とても不可能であることを、フアブルは飽くまでも實證してゐる。昆蟲の世界には「丁稚奉公もなければ師匠もない。」各自がめい／＼「内なる聲」に導かれてゐる。みんなそれ／＼の仕事の遂行を勵んで、隣人がどんなことをやらうが氣にかけないのみか、自分自身のやつてゐることさへも考へはしない。例へば對數的螺旋の發明者たる女郎蜘蛛は、「地球の當初に於て既に菊石が眞珠母の宮殿の中で實現してゐる本體」のやうなもので、仕事に脊を向けてゐても「それは獨りで運んで行く。それほど、機械の装置がよく出來てゐるのである。」そして、若しも不幸にしてそれを考へるならば、彼れは斷じて成功しはしなからう!

ダアキンはフアブルの巨大な著作の殆んど十分の一しか知らなかつた。彼れは最初の自然科學雜

誌 (Annales des sciences naturelles) の中で、つちすがりとはんめう類との習性の、あの想像で築き上

げられた様な物語を読んだのであつた。最後に、彼は「昆蟲記」の第一巻が現はれるのを見た。そして左官蜜蜂の方向感に関する見事な研究によつて、何よりも極度に興味を惹かれたのであつた。もう少し長生きをさせて、その驚くべき續きを全部読ませたいものだつた。然しながら、第一巻だけでも既に彼の好奇心を刺戟し、そして彼れをしてその哲學に疑心を生ぜしめるには餘りあるものだつた。徹頭徹尾、傾向と本能とが徐々に獲得せられたものであると云ふ思想に立つた彼れの哲學は、當然其處へ突き當るのではなかつたらうか。

あんなにも明瞭に説明せられてから——而かも何んと云ふ高い見解を以つて！——種の起原と動物體形の連絡とは、若しも本能の起原の聖堂が永遠に開かるべからざるものであつたならば、それは中途半端に立ち止まることにはならなかつたらうか。

ダアキンがフアブルと奇妙な通信を取り交はし始めたのは、フアブルが未だオランヂュを去らなかつたうちである。そしてフアブルがセリニヤンへ引込んでからも、それが尙ほ二年間ばかり繼續せられた。此の通信は、優れた進化論者がフアブルの驚くべき觀察に依つて、既に如何なる點まで

興味を唆られてゐたかを語つてゐる。

他方フアブルも、研究に對する熱烈な興味、完全な忠實さ、及び眞理に對する渴望等が、ダアキンの手紙のなかに溢れてゐるやうに感ぜられた所から、彼れとの論議に對して特殊な興味を覺えたもののやうである。ダアキンは彼れへ斯う書き送つてゐる。「ヨオロッパ中で、私程あなたの研究を讚嘆するものはなからうと思ひます。」フアブルもまた、心から彼れに愛著し、彼れを一層よく理解するために、同時に彼れへの返答を一層正確なものにするために、一生懸命英語を勉強しだした。そして表面は敵ではあるが、相互に限りなく敬愛し合つた此の偉大な精神の二人が、而かもかうした主題に關して取り交はし始めた通信こそは、實際素晴らしく興味を覺えさせる出來事となるべきものだつた。

註一 公けにされない手紙。一八八〇年一月。

「拜啓、昆蟲記を御惠送下されて、寔に嬉しく存じます。或る意味で私は斯うした贈物を戴く資格を持つてゐるのです。何んとなれば、ヨオロッパ中で、私程あなたの御研究を眞に讚嘆するものはないと思ひますから……」

不幸にして、死が間もなく二人の間へ割り込んだ。そしてドウン (Down) の隠者が一八八二年に事切れた時、セリニヤンの隠者は此の偉大な亡霊に對して、心からの敬意を表した。その後、於ても彼れが此の偉人を追想したのを私は幾度び聞いたことか！

ポルドオで研究し、観察し、特に描寫し、解剖し、標本を作つてゐたベレエが、ダアキンの最も熱烈な門人の一人となつて、熱心にフアブルを説服しようと努めた。彼れはかう書いてゐる。

「ほんとうを云へば、説明の出来ない事柄が随分澤山あります。しかしながら、科學は出來上つては居りません。何故、進化論が今の今から無力であると宣告せられなければならないのでせうか。」彼れは特にフアブルのやうな科學者が、既に進化論の味方となつてゐないことを遺憾に思ふ。「進化論は必然的に神を否定しはしません。寧ろ、種の、起原の終りに現はれてゐるダアキンを見てご覧なさい。進化論は世界を以つてヘツケルの所謂骨董館に過ぎないものとするかはりに、生命が生れて成長し、そして不斷に變化するところの、常に潑刺たる實驗場と云つた風な、遙かに偉大な世界觀を與へてゐるやうに私には思はれます。若しも森羅萬象の創造者によつて、例へば星界を支配し

てゐるのと同じやうな、恒久不變な進展の法則と共に、あらゆる生命の芽が太初の原因質の中へ編められてゐるとするならば、事は進化論者の云ふやうに經過するであらう。そして結果は正に、あなたがある程の洞察と鋭敏さを以つて確證せられたところのものと、寸分違はないものとなるでせう。何んとか斯んな風に妥協の道はないものでせうか。さうした方法のあることを、私はどれ程望んでゐることとせう！ 若しも有るとすれば、どれ程私は嬉しく思ふこととせうか！」(一八八四年十一月五日、ポルドオにて。公けにせられない手紙)

然しながら、既に變がついて了つた。そしてフアブルは、もうこれから先きひつきりなしに、進化論の大きな輝かしい風船球をすばませて、その空虚さをすつかり發いてやるために、彼れの針を幾度びとなく突き立てる。さうした所から、彼れの著作のこれまた獨創的な一面となつてゐる、あした劇しい、熱の籠つた論鋒が出て來たのである。時には論理の驚くべき力を以つて、また時には刺すやうな皮肉の調子を以つて、彼れは「徹底的に詮索する勇氣を持たないものの柔かい枕」を揺り動かさうとする。そんな風に、彼れが「此の冒險的な綜合、此の自稱哲學的な堂々たる演繹」を痛烈に批評するのも、彼れ自身が自己の證明の絶對的確實性に對していやが上にも堅固な信念を

持ち、また事實を幾度びとなく繰り返へして見た後でなければ、断定しないからである。

註一 一八八三年三月三十日、ドゥヴイヤリオへの手紙。

註二 種といふ觀念は、細微有機體の領域で、パストウルの根本觀念の一つでもあつた。「種の變形といふ觀念は、實に譯もなく採用せられる。それは恐らく嚴密な實驗なしに済まされるからであらう。」

それ故に彼れは議論を好まず、朝夕の新聞にも冷淡で、批評や反對を避け、彼れを名ざしての攻撃にも曾て應じたことがなく、常に自分の研究に關する論争は一切やる氣はなかつた。そして彼れの研究が熟して發表に適すると思はれる迄は、彼れは努めて靜寂の中に埋もれてゐるのであつた。

彼れはダアキンの死んだ翌日あたりに、その友ドゥヴイヤリオへかう書いてゐる。

「……贊否の如何に拘はらず、私の書いたものに對する批評には決して返答しないことを以つて、私は原則としてゐる。私は喝采せられようが罵倒せられようが、棧敷にはちつとも氣を取られないで、私自身の道を進んで行く。眞理の探求が私の唯一の心懸りである。若しも私の觀察の結果に不滿なものがあるならば、若しもさうした人の懐かしむ理論が、そのために打撃を蒙るならば、然らばその人自身がやつて見て、果して事實が私の述べた所とは別様に語るかどうかを確かめて見るが

よい。私の問題は、論争によつて解決せられはしない。辛抱強い研究のみが、それを少しは解いて呉れる……」(一八八三年五月十二日、ドゥヴイヤリオへの手紙)

そして十七年経つてから、彼れは弟へかう書いてゐる。

「……新聞が私のことをかれこれ云つたつて、私は何んのそのだ。まあ、私自身が私の仕事に満足してゐれば、それで十分なのさ……」(一九〇〇年弟への手紙)

實際、彼れは何んな手紙を受け取つても、さつと眼を通すぐらゐなもので、褒められてもたつた一言お禮を云つてやるでなく、第一生活が浪費せられるさうした暇つぶしの手紙を避けるのであつた。

「活版刷り、若しくは手記の讒辭を送つて呉れる誰れ彼れへ返事を出すために、朝の時間をちよん切らなければならぬ時には、私は實際むしやくしやして來る。こんなことも注意しないと時間がなくて、一段と重要な研究が出來なからう。」

「最良の友」なる彼れの親愛なるフレデリック(弟)さへも、矢張りそんな取扱ひをされた。そしてアンリ(ファアル)は手紙を書かないことの云ひ譯けとして、カルバントラスに於ても、アジャシオ

に於ても、常に同じ理由しか持つてゐなかつた。それは無限の勞苦、猛烈な仕事、極端な骨折りなど云ふことであつて、「彼れはそれに壓倒せられ、多くの場合、勇氣は有り餘るのだが、力と時とが足りないのであつた。」

註一 弟への手紙。

「私は横着を決めこんでゐるのではない……紙やインキが無いのでもない。私はなか／＼の儉約家であつてみれば、そんなものに事缺きはしない。だが、暇がないのだ……お前はまた、私が返事を出さないのは、何んか氣まづい思ひでもしてゐるのではないか——なんかんと思つてゐる！ だが、懐しいせつかちな弟よ。想つてもご覽。數週間此の方といふもの、教授試験に出された圓錐形に關するうんざりする問題を、私は何時までもたどつてゐる。こんな執拗さつたらありはせぬ。そして頭を突つ込んだが最後、手紙なんぞ彼方へおいで。返事なんぞおさらばだ。つまり、何もかもおととい來いだ。」（一八四八年十一月二十七日、カルバントラスにて）

「尤もだ。私が音沙汰しないので、お前が怒つたり當り散らしたりするのは、七通も尤もだ。そして心苦しくてゐながら、實際私みたいに手紙を書かないものもないものだ。私に手紙一本書かせようとするのは、私を拷問にかけようとするやうなものだ。それはお前にもよく分つてゐるではないか……だが、私がお前を馬鹿にしてゐる、私がお前を思つてゐない、私がお前を無視する——なんて、これはまた、

何うしてお前がさう思つたり云つたりするのか、私の唯一の友のお前がさ。……仕事が多過ぎて、多くの場合、勇氣はあり餘つてゐるのだが、力と時とが足らんのだ。どうか、私の無音を咎めないで呉れ。」（一八五一年六月九日、アジャシオにて）

さりながら、起原の問題を避けながらも、彼れの鋭い精神は、進化しつつある新種の起原を「現場で取つ掴まへ」すにはゐなかつた。そして彼れの觀察は、控目ではあるが近年の偶然變異説の上に、特異な光りを投げてゐる。

まぐそむし(Orthopagus)の若蟲は、「構造がその情熱の一瞬に於て生じた角や拍車の不思議な道具——成蟲となつては消滅する華美な甲冑」を見せてゐる。

つ、むし(Orticellus)の若蟲も同様に、「その古着とともに脱落する儂ない一本の角」を飾りとしてゐる。

また、「糞食甲蟲(Bovier)は生き物の年代記に新らしいのであるから——彼れも遅れ走せにやつて來た連中の一人であるのだから——地層も彼れに就ては何等語つて呉れないのだから、あの完成する前に失くなつて了ふ角仕掛けは、それが果して何んか昔の想ひ出でないとするならば、それは

未來に對する約束、新らしい器官の徐々たる仕上げ、世紀の世紀が堅めて常備の甲冑とする極めて遅々たる試みであるかも知れぬ。そんな風だと未來は如何にして造られるか、それを現在が語るものなんだ。」

これこそ種の變化、盲目的な、偶然な、同時に黙々たる眞の創造である。それは生命が絶えずやつてゐる無數の試みの一つであつて、今の所、單に偶然の所産に過ぎないのだが、何時かは適當な事情によつて未來の化身の中に固定せられるものなのだ。

こんな風にして、幾百億萬の不確定な生物は、最初の細胞——あの小宇宙のたゞ中に於て絶えず粗描されてゐる。そしてファブルが進化の法則の有機的な神祕を垣間見たのは、實に此處である。彼れはダアキンに依つてあんなにも華々しく採用せられたライブニッツの大原理、即ち變化は相繼ぐ適應の結果、色々な度と色々なニュアンスとを經、幾多の微かな變異を通して行はれ、自然には絶対に飛躍がないといふことを認容しない。彼れに依るとその反對に、生命は急激にして氣紛れな飛躍に依つて、突然の「破顔」に依つて、不規則な歩みに依つて、屢々突如として或る形から次の

形へ移つて行く。そしてファブルが、かうした自發の神祕な變態の最初の輪郭が現はれるのを見たのは、それは卵の中に於てであつた。無數の小さい事情が、見えない變化、隱秘の素因を浮き彫りにして、遂にはその生物に新らしい奇蹟を生む新らしい方法が現はれる。

さうして見ると、種は同時に、同一瞬間に、それ／＼特種な傾向、性質、及び消滅しない先天的な能力などとともに、それ／＼新らしい有機體を持ちこむ凡ゆるものの全體から生ずるものであらう。「それは一つ／＼判然と異なる型を以つて鑄られ、そして世紀の齒も立たないやうな、多くのメダルの全體みたいなものである。」

それにしても、彼れは矢張り、進歩の連続をも肯定してゐる。彼れはより良い、もつと寛仁な未來——一層調和のとれた、若しくはもつと殘酷でない法則によつて支配せられる、一層完全な人間性を信じてゐる。

何んと云ふ深い理解と高潔な情熱とを以つて、彼れは子守蜘蛛の子供等に關する見事な觀察の中で、さうした未來を推測してゐることか！ 此の蜘蛛の子供等は幾週間も、幾ヶ月もの間、絶対に

飲まず食はず、それかと云つて何處にも榮養物の保存があるでもなく、その儘生き續けることが出来るのだ。

吾々に知られてゐる動物の活動力の源泉は、食物から来るエネルギーだけである。植物はその養分を地中や空中から吸ひ取つてゐる。そして太陽の光線は、植物をして單に炭素を同化せしめる媒介者となるに過ぎぬ。動物は植物から、生活に不可欠な要素を借りてゐる。若しくは他の動物の肉や血を攝つて自分の肉や血となしてゐる。

ところで、若い子守蜘蛛どもは「母の脊の上にちつと動かないでゐるのではない。母ちゃんの脊から落つこちると、急いで彼等は起き上がり、さつさと肢を傳はつて攀ぢ上る。彼等は努力する。それからちやんと元の場へ著くと、みんなが一塊りになつてしつかりと均衡を保たなければならぬ。事實に於て、彼等には完全な安息といふものはない。然らば小さい子守蜘蛛へ精力を與へる食物は何んであるか。活動に費やされる熱は何處から来るか。」

ファブルは、太陽以外にその源泉を見ないので。「若しも天氣がよいならば、子守蜘蛛は毎日赤ん坊どもをおんぶして、その井戸のほとりへ蹲くまり、長い間日向ぼつこをやつてゐる。母ちゃん

の脊中へ乗つかつた赤ん坊どもは、其處で何んとも云へない気持ちで伸びをし、飽くまで日光を浴び、動力を蓄へ、エネルギーに染み、そしてあらゆる生命の源たる太陽からの放射熱を、直接運動に變へる。」

さ、そりも矢張りそんな風に「太陽の發散物、若しくは世界の魂である熱、電氣、光りなどのやうな、身邊に存在する他のエネルギー」を直接に取つて運動に變へ、そして幾ヶ月間といふもの何等の食物をもとらずに生存することが出来る。

若しかしたら、大空に於ける無数の世界の間には、「太陽に依つて盲目な餓ゑが癒やされる」やうな、吾々には見えない或る遊星が、何處かで一定の星の周圍を廻つてゐるのではなからうか。

人間にとつて動物性の食物が必要であるといふ殘忍な事實は、常に彼れを苦しめてゐた。されば彼れの心優しい哲學は、かの高貴な精神の人々によつて懷抱された理想——「齒がもう感性のある生物を噬むことはなく、」否、「もう果實の肉をさへも嚙まない」やうな、また「互に相食みもせず、他を殺して自ら生きるやうなこともなく、皆んな太陽を榮養として生活し、もう争闘も、戦争も、勞働もなく、あらゆる心配から解放せられ、あらゆる必要に對して確保せられる」やうな、さうし

た完全な人間社會の幻の中に慰安を求めてゐる！

斯んな風に、彼れは極めて微々たる生き物の中にも、最も宏大な見晴らしを垣間見てゐる。極めて忌はしい昆蟲の身體も、突然或る此の世のものとも思はれない祕密となつて、人間の靈の暗い一角を照らし、若しくはそれをして天空を透視せしめる。

そして、たとひ彼れの著作が進化論に反對であるにしても、それは結局同じ道德的結論となつてゐる。即ち、全創造は小止みなく、徐々として進歩への途を登つて行く。

10

道德の幻影

熟練した時計屋のやうなファブルは、一つ／＼動物の知能の發條を外づしてみせた。彼れはどんな風に色々な運動が調節し、どんな風に相互に噛み合ふかを見せた。然しながら、それは未だ動物の小さい魂の一面に過ぎぬ。今度はその他面、道德的方面、感情の領域を調べて見よう。此の問題は本能のそれと混合してゐる。そして恐らくそれは、根本に於て唯だ一つの根原的な、他の一面に過ぎないものである。

争闘を終ると、昆蟲は喜びの色を見せる。時としては勝利に欣喜雀躍するものやうである。

「針でぶつ／＼突き刺された地蠶よちやちは、地べたで歪んだり扭れたりする。とその傍で、蜂は地を踏み、いろんな身振りをし、翅を打ち合はせ、翻筋斗かたまたまをし、勝鬨を擧げ、そして嬉しさに無我夢中になる。

左官蜜蜂は所有權の感じを高度に持つてゐる。彼れにあつては權利が力に先き立つてゐる。そして「結局、侵入者は何時でも追ひ拂はれる。」(昆蟲記)

然しながら、吾々が呼んで以て獻身、戀著、愛情などとするやうなものが、何んか昆蟲にも見出されるだらうか。實際、さう思はせるやうな事實もないではない。だが、早急な結論をしてはならぬ。

もう一度、ファブルの庭へ出てみよう。そして、母の務めに没頭してゐる蟹蜘蛛 (Thomisus) を觀察して見ようではないか。此の小さい蜘蛛は、「その巢の上へ腹這ひになつて、もう動きもせずひたすら衰へて行く。が、これを最後と囁んで、彼れの家族へ戸を開けてやるために、すつかり窠れてはゐるが、尙も執拗に生きてゐる。絹の天井の下では、子供の群れが待ち兼ねてゐながらも、自分等の力ではどうにも脱出が出来ないでゐる。それを感じて彼れは囊へ孔を開け、出口の天窓を作つてやる。此の義務が果されると、彼れは巢に縋りついたらまゝ、靜かに死んで行く。」

みのむしは一種の無意識な必要に迫られて、「巢にゐる彼れの子供等を身を以つて護り、住居の入口へ坐り込んで、そのまゝ死んで了ふ。そして死んでも尙ほ且つ家族に忠實で、彼れはその場で干からびる。」

實際、かうした用心や、母らしい愛情の現はれも、多くの場合に於て快樂と、それから一般に昆蟲を驅つて、ひたすら本能の宿命的な傾向に従はせるところの、あの盲目な衝動との外に、何んらの動機がないことを、ファブルは手のつけやうもない論理を以つて、吾々に示して呉れる。

第一、多くの種にあつて、母性の形式が極めて單純なものとなつてゐる。

粉蝶はその卵を玉菜の葉の上へ産みつけるだけだ。そして「子供等は、食物や宿を自分手で見つけなければならぬ。」

ながべにはむし (Cynipid) は矢車菊の複花弁の上から、「その卵を彼方此方へ當てすつばうに振り撒き、てんで身の上を決めてやらうともしないで、ぞんざいに一つ／＼地べたへ落つことす。」

蠃類の卵は、恰度種子か何んかのやうに、地中へ植ゑこまれて芽をふく。

然しながら、一寸子守蜘蛛の前へ立ち止つて見よう。此の母性愛の驚くべきモデルに就いて、ファブルは吾々に篤と考へさせるのだ。「彼れは思ひをこめて、はら／＼しながらその卵を抱く。後

肢を井戸側へ陥ん張つて、彼れは胚子で膨らんだ白い囊を井戸口の上へ擡げてゐる。永い數週間と云ふもの、毎日々々半日の間、彼れはそれを太陽に當てる。生命を與へる光りへ萬遍なく向けるために、彼れはそれをそうつと返へしてはまた返へす。小鳥はその卵を孵へすために、それを胸の絨毛で包む。心臓の暖器へ押しつける。子守蜘蛛はその卵を大空の爐の前でひつくり返へす。彼れの孵化器は太陽である。」(昆蟲記)

これにも優れた犠牲があるだらうか。これよりも大なる献身、忘我があるだらうか。だが、何んと云ふ空しい外觀であるか！ 試みに、此の愛しい囊へ何んか詰らないものを置き代へて見よ。蜘蛛は矢張り「戀々としてコルクの球、絲球、若しくは紙屑を丸めたものを、さもく大事な卵が這入つた囊か何んかのやうに引きずりまはる。」それは恰度、雌鶏が瞞着の犠牲となつて、その巢へ入れて置かれる石卵を熱心に抱き、そして幾週間もの間、食を忘れるのと同じことである。

子供等が巢の中からひよつこりと現はれる。と、親蜘蛛は彼等を脊中へ乗つけて獵に出かける。彼れは危険に際して子供等を護る。然しながら、彼れは自分の子供等を認知して、他人の子供等と區別することは出来ぬ。

だ、い、こ、く、こ、が、ね、や、さ、そ、り、な、ど、も、矢張り盲目目である。そして「彼等の母性愛は殆んど植物のそれを出でては居らぬ。植物は少しも愛情、乃至道德感を有しないが、それでもその種子に對しては、何んとも云ひやうのない濃やかな世話を焼く。」

且つまた、労働への刺戟と云つても、一種の無意識な快樂に過ぎぬ。き、ご、し、蜂が「その容へ獵獸肉を充たすことを無上の樂しみとする時、つちすがりがその種族の未來を託した地下の聖堂へ銜をかける時、兩者の何づれも「未來の子供等を豫見することは出来ぬ。彼等の複眼は未來永劫それを見ることは出来ぬ。そして彼等の仕事の目的は、彼等にとつて隠されてゐる。」

こんな風に、彼等のみならず、凡てのものにあつて、道德的生活は到る所、常に一個の幻影に過ぎぬ。

然しながら、だ、い、こ、く、こ、が、ね、と、せ、ん、ち、こ、が、ね、とは、二人して家庭を作つて鳥の先驅をなし、哺乳の序曲をなしてゐる。そして「昆蟲記」のあの堂々たる建物は、ミノタウル (Minotaur 金龜子の一種) の驚くべき歴史を以つて冠せられてゐる。その習性が、想像も出来ないやうな理想美なのだ。

地下の深い聖堂の中で——一つの窖の奥底で、二匹の糞食甲蟲が働いてゐる。それは夫婦のミノ
タウルで、一度結婚すると彼等は互に相認知し、互に相手を見つけ出して、最早や別れることは
なく、そして「一夫一婦の生活の道德美」と、「家庭の極めて涙ぐましい面影、此の上もない神聖な群
れ」とを實現してゐる。雄は伴侶と一緒に埋もれ、何時までも彼女に忠實で、「何やかやと手を貸し、
そして未來のために貯蓄する。「きつい登攀にもめげず、母には軽い仕事をさして置いて、高い垂
直な廻廊をえんやらやつと運搬するやうな極めて難儀な仕事をば自分で引き受ける。彼れは自らを
忘れ、春の陶然たる歡喜にも氣を惹かれないで、せつせと糧食を仕入れに往つたり來たりする。そ
れにしても少しは近傍を眺めたり、同僚と一緒に一杯引つかけたり、近所の奴等を窘めたりするの
も愉快なことではないか。然しながら、彼れはそんなことをやりはせぬ。彼れは脇見もせず、ひ
たすら子供等への食物を蓄める。それから赤ん坊どものために、凡ての準備がちゃんと出來上り、
糧食もこれでよいと云ふことになる、無性矢鱈に身體を使つたお蔭で、へとくになつて了ふ。
そしてもうこれがお終ひと分ると、彼れは住居を立ち去つて、何處かの蔭へ死に行く。それは死
骸を以つて、棲家を穢さないためである。」

「他方、母親もいつかな氣を家事から外らしはしない。そして赤ん坊どもを連れて戶外へ登つて來
る。と、赤ん坊どもは思ひくりに散らばつて行く。さうなると、もう何んにもする事はないので、
此の健氣なお主婦さんも死んでゆく。」(昆蟲記)

ぶら／＼彷徨ひ歩く金龜子、若しくは感心なシジフス (Sisyphus) にさへ較べても、此のミノ
タウルは遙かに優等な素質を持つてゐるやうではないか。

果して吾々の奥底には、一層高貴な何ものかがあるであらうか。家庭の人として、義務や責任を
一層よく理解した父があるであらうか。こんな非の打ち所のない道德性が何處にあるであらうか。
こんな立派な、こんな麗はしい實例が、何處を探せば見つかるであらうか。

「生命は糞食甲蟲の體內に於ても、將たまた人間の體內に於ても、到る所同一なものではないか。
そして昆蟲のそれを點検することは、やがて吾々のそれを點検することではないか。」

かうした特殊な美德を、ミノタウルは何處から享けてゐるか。如何にして彼れが純本能の翼に乗
つて、かくも高く昇ることが出來たか。「自然は到る所、謎のやうな詩に過ぎぬ。それは恰度、蔽
はれて判然しない繪のやうなもので、吾々の思索を働かせるやうに、種々様々な薄明を隠見さして

ある。」——斯うモンテエニユ (Montaigne 1533—1592 フランスの思想家) も云つてゐるが、若しも吾々が此の事實を十二分に知るでないならば、あんなにも崇高な實例を、如何にして説明することが出来るか。

さうは云ふものの、大多数のものには、それ／＼の本能の傾向に従ひ、「それ／＼の奔放な憧憬」を充たす以外、何んら行爲の規準はないのである。そしてこれらの小さい自然力の盲目的な働き、その習性の残忍さ、及び、若しも吾々人間の公式を他の世界へも持ち込むことが出来るならば、吾々が呼んで以つて彼等の無道徳となすかもしれない所のもの、即ち彼等の同類相噬性などを、フアブルにもまして判然と浮き彫りにして見せた人はない。

「歩行蟲どもにあつては、同族のたゞの一人だつて不具になつたもの前に立ち止まりはしない。たゞの一人だつて彼れを救はうとするものはない。時として通りすがりのものが駈けつけて、此の病人を食つて了ふ。」

胡蜂の共和國の中で、「望みがないと分つた仔蟲どもは、情け容赦もあらばこそ、彼等の獨房から

引きずり出され、巢の外へおつぱり出される。病氣に罹つたが最後、身體不隨の者どもは、凡て直ちに片づけられる。」冬になると、仔蟲どもは惨殺せられる。そして胡蜂の城市は全部、たゞもう目もあてられない悲惨な光景を呈する。

然しながら、すべての生は完全である。そして直接目的を實現しながら、同時に窮極目的に結びつけられる行爲は、凡て善である。若しも蜜蜂の巢にその「魂」があるならば、胡蜂の巢にもその「法則」がある。そしてその住者等の行爲は、たとひフアブルには恐ろしいものに見えるにしても、これまた自然をして「憐れみを知らない野蠻な乳母」たらしめるところの、あの一般法則の或る要求に對する服従に過ぎぬ。

均 整

しかもかうした歴然たる残忍さは、自然に於ける昆蟲の役目の一つが、特に「生命の滓」を徹底的に消滅せしめ、そして最後にこれを變態せしめるに在ることを吾々に示してゐる。

凡てがそれ／＼攝理的な衛生の任務を帯びてゐる。

「野原に於ける小さい衛生掛りの第一人者」なる埋葬蟲しほむしは、死骸を埋葬して其處へ子孫の身を立ててやる。二三時間の内には土龍、溝鼠、青大將のやうな、何んか大きな奴さへが地中へ埋められて、影も形も見えなくなつて了ふ。

まぐそむしは土地を淨める。「彼れは汚物を粉微塵にして、大地の汚點を拭ひ取る。」着物は衣蛾のために失せ、土龍は蛆のために、青大將は蠶節蟲のために無くなつて了ふ。或るものは骨を片づけ、他のものは鞆帶を取り拂ふ。云ふにも足りない甲蟲——どろこがねは、狐の棄てた兎の毛を

掃除することを以つて、時效にかゝらない使命としてゐる。

その他、何づれも件の如し。

此の場合、構造が職務を説明してゐる。

はなむぐりの幼蟲の腸は、「ほんたうの粉碎機であつて、植物性のものを腐蝕土に變へる。一と月の内に、彼れは自分の最初の容積の數千倍に當るものを消化する。」また金龜子の腸は素晴らしい長さに伸びて、「その多くの腕り廻りの中で、排泄物の最後の原子までも吸ひ盡す。既に羊は巧みに植物質を分離してゐる。無類な粉碎機の此の蟲は、それを粉末にする。擴大鏡を以つてしても、纖維一本見つかるとやうな、たゞの一とこぼれだつて残しはしないのだ。」

かうした使命を果すために、昆蟲は恰度よい瞬間にやつて來て、そして仲間を驅り集める。「いま、蠅の腹の中には、二萬の胚子が入つてゐる。生まれるや否や、この二萬の蛆は仕事にとりかゝる。こんな所から、一頭の馬、若しくは獅子の死骸を食ひ上げるには、蠅三匹で澤山だ、とリンネも云つたのだ。」

小麦だけを見ても、たつた一匹のさう、即ちこゝさう——此の麥の虱は、一千内外の卵を産む。其處からそれだけの幼蟲が現はれて、それ／＼穀粒をぼり／＼やつて行く。

凡てのものにあつて、生まるるもの數は、第一に途方もなくなつてゐる。何んとなれば、眼につかないものも、名のないものも、極めて吾々に有害なものも、若しくは吾々にとつて極めて貴重な、極めて有益なものも、凡てが一般生存の中で、それ／＼の有用さ、それ／＼の役目——永遠の創造の中に等しく必然的な存在の理由を持つてゐるからである。そしてそれは、彼等の仕業が吾々の爲めになつてもならないでもだ。

豊饒な大地の上に孵へる胚子は、凡てたゞ生まれるといふことによつて生存權を獲得する。普遍的な母——此の寛大な自然は、あらゆる生き物に對して無差別に、その多産な胸を開く。そして、凡てが凡ゆる方面から驅けつけては、生の饗宴に列らなつて、その實を分つ。

凡てはそれ／＼の地位が決められてゐる。いづれもめい／＼の仕事を持つてゐる。或るものには花、他のものには根、更に他のものには葉。葡萄にはその毛蟲と甲蟲がある。苜蓿にはその蛾と小

蝨とがある。毒にはその蠅。榛にはその蛆蟲。

人間は否でも應でも彼等に忍従しなければならぬ。彼等へ吹つかける戦争も、多くの場合無駄骨である。吾々が總がよりで宇宙を攻撃し、天を乗り越えても何うなるものか。「吾々が太陽や星を量つても駄目である。」吾々のあらゆる智識も、一個の蚊の繁殖を前にしては、ぶつ／＼云ひながらも引き退る外はない！ 濕氣も、乾燥も、寒氣も、否、嚴寒さへも、これを如何ともすることは出来ぬ。そして卵、幼蟲、それらの一見極めて繊弱な構造も、遙かに成蟲以上のきつい生命を持つてゐる。フアブルがこれを實證してゐる——温度を突然十度も下げて見る。どうだ！ せんちこがねの卵、こふきこがね若しくははなむぐりの幼蟲が、さうした温度の低下にも平然として拮抗するではないか。小さい氷の塊りか何んかのやうに、縮んで硬ばる。だが、死ぬのではない。春になると、恰度鰻蟲、擔輪蟲、若しくは熊蟲などのやうに復活する。そして、既に頗る複雑な構造を持つてゐて、そしてこんな風に凝つて硬くなつた生き物の中に、生命が鈍つてはゐながらも依然として存在し、それが單に中止せられるに過ぎない事實は、なか／＼信じ難い程である！

それから突然、害蟲共も寄生蟲に食はれたり、若しくは多くの場合、何故、また如何にして事切

れるのか分らないが、皆んな姿を掻き消して了ふ。

實際、若しもそうした多産に對して何んらの手段が無いとするならば、その結果、世界はどうなるであらうか、そこで一つ／＼の種には、過剰を緩和して均衡を維持するために、恰度よい時期にやつて来るそれ／＼の競争者がある。そして今フアブルは、慄然たらしめるやうな哲學を以つて、そうした抑壓を司どる驚くべき作用を吾々に發いて見せる。

凡てはそれ／＼の敵を持つてゐる。その敵は、彼れ、若しくは彼れの後裔を害して以て自己を生かす。そして此の敵そのものも、やがては更に小さいものの餌食となる。「死人の王」たる蛆にさへも、寄生するものがある。彼れが死人の上を統べ、腐つた肉の汁に酔ふてゐる間に、云ふにも足らない或る羽蟲が、「彼れの皮へ眼にも止まらない傷をつけて、その恐るべき卵を注ぎ込んでやる。と、やがて其處から幼蟲が現れて、今日啖ふところのものを、明日啖はれるものとする。」

他を滅亡せしめないで存続するものはない。到る所、極めて小さいものどもにあつてさへも、「殘忍な活動、巧妙な追剥ぎ強盜の仕業、」瘳猛な鑿殺が行はれてゐる。その凡ての上を宏大な無意識が

統御してゐる。そして最後の結果は均衡の恢復である。(昆蟲記)

そして斯くくの災禍を消滅させようといふ希望は、たゞ一つ、かうした敵對、吾々の敵の敵の上に築かれなくてはならぬ。殆んど眼にも見えない小さな蜂、あのあをむしこねかばち (Microgaster glomeratus) は、玉菜の青蟲を絶滅する任に當つてゐる。てんとうむしは木虱に對して猛烈な戰爭をしかける。じが蜂は生れながらにして衣蛾の殺戮者である。砂糖大根を栽培する地方に於ける此の蛾の害と來ては、屢々國庫を危険に曝らす程である。どろひめ蜂は紫花苜蓿のさうむしのすさまじい繁殖を喰ひ止めることを以つて、その本能的使命となしてゐる。彼れはその後裔を育てるために、此のさうむしの幼蟲二十四匹内外もなければならぬ。そしてたつた一匹のはなだか蜂の繁殖には、六十匹近くのうし蠅が必要なのだ!

到る所、力に打ち勝つために術策が企たくまれる。有りと有らゆる巢のほとりには、寄生蟲が隙を窺つてゐる。「搖籃の中の子供等を殺戮する此の残忍な奴等は、その戸口に待伏せして好機を窺つてゐる。やがて彼等は他人を斃して自分の家族を打ち立てる。……寄つてもつけないやうな要塞の

中にさへ、敵がうまく忍び込んでそれく驚くべき戰術を實行する。犠牲の住居や繭を以つて、侵入者は自らの住居、自らの繭とする。そして翌年、此家の主人を食ひ平らげた居直り強盜が、主人顔してのこく地中から現はれて來る。」

「蟬が産卵に没頭してゐる間に、云ふにも足らない蠅が、その卵を絶滅させる仕事にとりかゝる。此の矮人の平氣な大膽さをば、何んと説明したらいいか。奴は一步々巨人の跡をつけ、時には數匹一緒になつて、足をかけられた丈けでも潰されて了ふ様な、その巨人の殆んど爪の下になつてゐる。然しながら、勿論蟬は彼れへ手をつけてはならぬ。と云ふのは、此の蠅も何んかに必要なのだ。さうでもないならば、奴なんか夙うの昔に無くなつてゐる筈ではないか。」(昆蟲記)

こんな風にして、アブルは此の點でもバストウルと一致してゐる。バストウルは極微な世界に於て、矢張り同様の敵對、同様の命懸けな競争、同様の満干小止みなき永遠の運動、消えては再び現はれて、絶えず破壊せられる均衡を恢復するために、常に進む生命の渦卷きを吾々に見せてゐるのだ。

そして生命の全體が、到る所、常に殆んど變りのないのは、かうした釣合ひに依るものである。事實、かくの如きは自然の經濟であつて、到る所、森羅萬象の宏大な組立ての中に隠秘の關係、不可思議な合致が存在し、そして支離滅裂なものはなく、凡てが相繼ぎ、凡てがよく秩序づけられてゐる。匿されたる凡ての調和が、相接し、相混じてゐる。

テレピン樹の木虱に就いてみると、「住民が成熟すると、没食子も亦成熟する。それほど此の木と此の蟲けらとは唇を共にしてゐる。」そして、だ蜂の不倶戴天の敵、あの春の縁起のよくない蠅は、恰度此の蜜蜂が、害の敷地を求めて彷徨ひ出すその瞬間に解へる。

アントラックス (Anthrax 長吻 蠅の一種) の幼蟲の作り話のやうな歴史も、かうした不可解な合致の極めて暗示的な一實例を供給して呉れる。(昆蟲記)

アントラックスは、左官蜜蜂の巢の表面へ卵を撒く黒い蠅である。恰度その卵が撒かれる時に、「左官蜜蜂の仔蟲は絹の繭の中に休んでゐる。」

「アントラックスの蛆蟲は、焼けつくやうな太陽の下に於て此の世に解へる。彼れの搖籃はさらさらした石の表面である。やつと固まりかけた蛋白質の細い絲のやうな彼れを此の世に迎へるものは、どつ／＼した礦物なのだ。然しながら、幸福はその底に在る。そして今、生々した蛋白質の原子みたいな奴が、石に食つてかゝる。根氣よく彼れは孔を探る。もぐり込む。匍ひ進む。後退りする。そして幾度びとなくそれを繰り返す。萌ゆる種子の幼根だつて、土壤のすが／＼しい深みへ降つて行くために、漆喰の塊りの中へもぐり込む此奴以上に執拗でありはせぬ。如何なる靈感が、彼れをその食物に向つて奮進させるのか。彼れを岩の底へ導くのか。如何なる羅針盤が、彼れの方向を決定するか。害が何處にあつて、何が入つてゐるか——これに就いて彼れは何を知つてゐるか。無地の豊饒に就いて、根は何を知つてゐるか。やはり無。それにしても二つながら、榮養物のある點へ向つて行く……アントラックスの胚子なる赤ちやんは、殆んど擴大鏡でも分らない様な、ほんに見えるか見えないかの原子みtainものであるが、やつと蜜蜂の搖籃の中へ到着する。そして奴は此の巨大な乳母へ乗つかつて、それが表皮となるまで吸ひ潤らして行く。奴の口は一種の吸盤で、鈎もなく、顎もなく、極めて小さい傷口さへつけることは出来ぬ。そこで、彼れは吸る。食ひはせぬ。彼れの攻撃は、詰り接吻だ。」

實際、彼れは驚くべき技術を實行してゐる。「それは絶えず新鮮な肉が食へるやうに、食事の終りに到るまで、殺さないで患者を食つて行くところの、あの美事な技術の變つたものである。アントラックスの食事が續く十五日間、蜜蜂の幼蟲の外観は依然として生肉のそれである。最後にその中味は全部、一種の吸収によつて赤ちやんの身體の中へ文字通りに移される。そして犠牲は次第に窄んで、最後の一滴まで涸らされる。然しながら、最後に到るまで、一個の皮に過ぎなくなつても腐敗に抵抗するために、依然としてそれ相應の生命を保存する。この皮を水へ浸して息を吹き込むと、それが風船球のやうに膨れて、再び幼蟲の體形をつくりとなる。吹き込まれる息の出口と云ふものは、何處にもありはしないのだ。」

ところが如何だ。アントラックスの蛆蟲は、恰度左官蜜蜂の幼蟲が變態に先き立つ昏睡状態に陥いつて、全く無感覺となり、やがて一個の蜜蜂とされるために——成蟲を作り出すためには何時でもさうであるやうに、何時でも蟲の中味が先づ生命に依つて全部液化せられるやうに——これも分解しても、たまたました液體に溶ける、その時期にやつて來るではないか。(昆蟲記)

こんな風に此處でもまた、やはり唇が一致してゐる。

然しながら、ファブルが吾々をして「無意識者」の靈妙な、そして不可解な叡智を最も嘆賞せしめるのは、恐らくシタリスの幼蟲の、あの有名な奇譚の中に於てである。

シタリスと云ふ一小甲蟲の微々たる生命を條件づけるために、如何なる事件の驚くべき連なり、如何なる事情の不可解な複雑さが必要であるか。その要點を摘んで見よう。

第一に、此の顯微鏡蟲は爪を投かつてゐねばならぬ。それ無しには或る期間、彼れが寄生生活をしなければならぬアントフォラの毛衣へ、どうしても附著することが出來ないではないか。

彼れは外を遍歴してゐる間に、雄蜜蜂から雌蜜蜂へ鞍替へをしなければならぬ。でもなければ、彼れの運命がぶつ切り途切れて了ふではないか。

彼れは恰度よい瞬間に卵へ乗つかるやうに、その好機を逸してはならぬ。

此の卵の容積は、彼れの最初の體形が續く間、それに釣合つた定量となるやうに、ちゃんと決つてゐなければならぬ。

最後に蜜蜂によつて蓄められる蜜の量が、彼れの幼蟲生活のその後の全經過を支へるに足るもの

でなければならぬ。

たつた一つの環でも断絶してみる。全シタリス族は最早やお了ひであらう。

一つ／＼の種にそれ／＼の法則があるのは——せんちこがねが腐つた葉にも満足しないではないが、それにしても不淨に忠實であるのは——つちすがり、あな蜂、じが蜂などのやうな狩人蜂が、仔蟲はどんな生餌でも無差別に頂戴するに拘はらず、それでもたゞ一種の生餌しか攻撃しないのは、實に或る高級な經濟法則に依るもので、その深い理由は多くの場合、吾々には分らない。若しくはあらゆる吾々の學説を超越してゐる。

こんな風に、凡てのものは永遠の必要によつて生まれ、また連絡をつけられてゐる。環が環に食ひ入つてゐる。そして生命は、本質によつて結びつけられて、調和を條件とするところの連帶的な、一つ／＼の力の全體に過ぎぬ。

そして生物の全體系は、此の偉大な博物學者の著作を通して、宏大無邊の有機體——一種の宏大な心理學的装置のやうに見える。そしてそのあらゆる部分は、相互に依屬して、人體のあらゆる細

胞のやうに密接に、相互に制肘し合つてゐる。

或る魔訶不思議な原因が、普遍的連絡の中に宏大な世界のあらゆる部分を満たし、また浸してゐる。絶えず溢れて動く生命の凡ての發現は、即ち、その反響、その放射に過ぎぬ。

矛 盾

ふしだか蜂若しくは蟹蜘蛛によつて、「労働の聖い悦びの最中に」虐殺せられる蜜蜂は、既に善良なフアブルを殆んど堪へ難きまでに不安ならしめてゐた。「何故、のらくらものを養ふために、或るものは骨を折らなければならないか。何故、搾取者に衣食を缺かさせないために、或るものは搾取せられなければならないか。」

人間には動物性の食物が要るといふことさへも、彼れは不快に思ふてゐた。

それにしても、彼れは今、一見途徹もなく不道德と思はれるやうな、他の事實を吾々に見せて呉れる。それは蟲けらの間に於ける戀の或る形式と、蜘蛛、百足、それから蠃螂などの結婚に關する淺ましい事實である。

いぶきぎすは「生殖の奇癖」の犠牲となつて、たゞ一回戀の奴やつことなるだけである。が、彼れはい

きなり心底までも疲れ、からつぽになり、ぐつたりとし、精も根も盡き果てて四足が不随となり、腰も立たなくなつて、ばら／＼の機械人形か何んかのやうになる。そして幾許も経ないうちに、「愛しさを餘つて食ひ殺す奇怪な姪婦の情人のやうに、それなり斃れて了ふ。」

さ、その雌は雄をぼり／＼やる。「すつかり無くなつて了ふ——尾つぽを除いては！」
蜘蛛の雌は情人の肉が何よりも好きだ。

雌蟋蟀は急に人が悪くなる。「彼女はだしぬけに、これまで熱心にセレナードを歌つて呉れた男を殴る。彼女は彼れの翅を引裂き、彼れのヴァイオリンを打ち毀し、此の奏樂師を二口三口やつつけさへもする。」

エフィツピゲラ (Ephippigera 螽蟴類の一種) の雌は「亭主のお腹へ穴を開け、そして彼れを食つて了ふ。」

然しながら、斯うした結婚悲劇の怖ろしさも、蟻螂の雌の飽くことを知らない發情、奇怪な交尾、畜生らしい姪亂などには及びもつかぬ。「此の残忍なお化けと來た日には、抱擁に飽くことを知らず、そして身を任かせる瞬間に、亭主の脳味噌をしやぶるのだ。」(昆蟲記)

雄が時として一片の切れ端となりながら、尙ほも仕上げないその仕事を續行してゐる間に、雌の蟻螂は彼れを頻りに食つて行く。——さうした光景をファブルは、幾度となく思ひ耽つた。それが彼れの永い生涯から得た、最も異常な幻の一つであるかのやうに、絶えず彼れの心に付き纏ふてゐた。

かうした異常な矛盾、かうした怖ろしい食慾は、果して何處から來るのであるか。

ファブルは遙かに遠い時の中へ、地質學の深い闇の中へ、吾々を連れて行く。そして彼れは、かうした残忍な仕業の中に、「隔世遺傳の面影」、古い血の消えやらぬ狂ほしさを見るを躊躇せぬ。そして彼れはこれに對する意味深長な、巧妙な説明を與へる。

螽蟴、蟋蟀、百足などは、非常に古い世界、既に消滅した動物誌の最後の代表者、邪な、奔放な本能が猛威を逞しうしてゐた時代の所産である。その頃混沌たる創造は、「その組織力の初めの試みをなしながら、」あらしの輪郭を作つてゐた。また鰐魚の住む廣い湖や、大洪水以前の沼に近い第二期の素晴らしい森林の中で、原始の直翅類——「今日のその漠然たる祖先が、若氣の放縱な發

情を肆にしてゐた。」しかもプロヴァンスは、未だ晴れやかな小鳥の囀りもなき棕櫚、異様な羊齒、及び高い石松などに深く蔽はれて居つたのだ。

生命がその試みをやつてゐた當時の奇怪な状態には、勿論それ相應な、異常な生理學的必要がある。獨り雌のみが幅を利かして雄は僅かにその缺くべからざる助力の故に存在を認められ、否、許されてゐるに過ぎぬ。然しながら、雄も亦或る隠れた窮極目的に役立つてゐる。彼れの肉體は、尠くもその幾分は生殖行爲に必要な要素の「一」卵巢に是非ともなければならぬ刺戟物か何んかのやうなものである。

かう云ふのがファブルにとつて、あゝした慘酷な法則の止み難い生理學的法則の理由である。これ故に雄の戀は、殆んど自殺に相當するものである。雌に嚙まれる雄の歩行蟲は、何んとか逃げようとはするが防禦しはしない。「彼れは反抗して自分を食ふ女房をちよつくら食つてやる氣には、どうしてもなれないもの様である。」さ、その雄も矢張り「その短剣を用ひるやうなことはなく、そのまゝお神さんに食はれる。」また、蠶螂の戀に焦れた雄は、「てんで、手抗ひもしないで、ぼつりぼつり食はれる。」

何んと云ふ奇妙な道德だ！ 然しながら、その根柢となつてゐる構造の奇異よりも奇妙なものではない。何んと云ふ不思議な世界であることか！ 然しながら、恐らく或る遠い太陽がまだ／＼幾つもこんな世界を照らしてゐることであらう！

然しながら、かうした怖ろしい生き物どもは、ファブルにとつて陰慘な思ひの種である。若しも凡てが或る「理性」から來るものならば、若しも事物の神々しい調和が到る所、或る「無上の論理」を證するものならば、それでは此の場合、さうした理性さうした論理の優秀さと無上の叡智とが、何處を捜せば見出されるのか。

宇宙の秩序に人の想像するやうな完全さがあるともせず、また、自然をトルストイのやうに「善と美との最も直接的表現」とも考へず、彼れは寧ろこれを、或る隠れたる神の試みる粗描と見るだけである。左様、その神は隠れてはゐるが、極めて手近かにあつて、そして永遠に森羅萬象の中に住まひ、絶えず試しては練磨しようとする神なのだ。

註一「人の心にある凡ての惡は、自然と接觸すれば消滅するであらう。自然は美と善との最も直接的な現はれ

なのだ。」(トルストイ著「侵入」)

あらゆる鉅の隅さへ通つて行く此の神の不思議の、何んか秘密を彼れは不斷に窺つてゐるところから、「それがたとひ吾々の不完全な五感には分らなくとも、」極めて小さい昆虫さへが、その眼にも見えないやうな動作の中で、彼れには「遍在智」の幾分を現はして見せるのだ。

上から見下ろすと、疑ひもなく、何んと云ふ靈妙な不思議であることか！ 然しながら、その反對を考察して見よ。何んと云ふ自家撞着であることか！ 何んと云ふ甚だしき矛盾であることか！ 何んといふ貧弱な、傷ましい手段であることか！ そしてファブルは、その純真な信仰にも拘はらず「お腹」の因果が神の計畫の中へ入つてゐることを怪訝に思ひ、同時に「無意識者」が好んで爲す所の、あゝした残忍な組合せに對して、心申いたく不満を感じずにはゐないのだ。何故あゝした隠れたドラマ、何故あゝした緩慢な殺戮が行はれるのか。神はそれ程手荒でない方法に依つて、生命の維持を確保することが出来なかつたのか。そしてまた、何故「善の毒」なる悪が、恰も永遠の寄生蟲か何んかのやうに、到る所、生命の源にさへ這入り込んでゐるのか。

註一 *Aubrey Proustengalo, La Bise.*

一三

調和

啖ふものと啖はれるものと、搾取するものと搾取せられるものと——凡てが無際限のロンドを踊つてゐる此の宿命的な循環の中に、吾々は一條の光線を認めることが出来なからうか。そして「悪」も出来かゝつてゐる「善」ではなからうか。

さて、事實に就いて見てみよう。

生餌は單に虐殺者にとつて、豫定の犠牲であるばかりではない。それは闘はうともせず、逃げようともせず、また、避くべからざるものを避けようともしないのだ。そして一種の忍従によつて、それは進んで吾れと吾が身を犠牲に供してゐると云つてもよい！

どんな不可抗の傾向に促進せられて、蜜蜂は怖るべき敵——ふしだか蜂の前に罷り出るのであるか。毒蜘蛛タランチュールは、不謹慎にも自分の害に押しかけて來る鼈甲蜂を、譯もなくやつつけ

ればやつつけられるではないか。然るに彼れは、その毒を含んだ鉤をてんで使用しようもしないのだ。蠍螂を前にしたば、つたの服従も、矢張り絶対的である。そして此の蠍螂自身は、その征服者たるタキテスに對して、矢張りさうなのだ。

元氣旺盛な歩行蟲は、その女房にお尻を咬まれても防禦せず、振り向きもせず、此の攻撃者に對抗しはしない。「其所へ幾つかの雄がひよつこりやつて来て、ちよいと立ち止り——直きおいらの番も來らあ——と獨語するものやうにして行きすぎる。彼れは黙つて齧られてゐる。逃げようたつて逃げられなくなつて了ふ。皮が撓む。傷口は大きくなる。臟腑はお主婦さんのために根こぎにされる。彼女は頭を亭主のお腹へ突込んで、中を空つぽにする。雄は何うしても跳ね起きて、自分を啖ふ女房を食つてやる氣にはなれないものらしい。」

人殺しどもの身體は、屢々犠牲のそれよりも遙かに小さい。或る蜘蛛の如きは、人間さへも咬まれるとたゞでは濟まないが、鼈甲蜂には一たまりもなく殺されて了ふ。が、他の昆蟲にとつては怖るべき敵であつて、自分よりも遙かに強壯な膜翅類を捕獲する——かう正確で綿密なヘルトンも云つてゐる。

註一 Charles Ferton 1856—1921、膜翅類を専門に研究した傑出せるフランスの昆蟲學者。(譯者)

これと同じやうに、自分自身のためでなくとも、少なくとも子供等のために戦々兢兢たるべきもの共も、彼等を待ち伏せする敵をまくためには何んにもしないのだ。葉切蜂やくだ蜂は、彼等の子供等を絶滅しようとして、「直ぐ眼の前で陰險な策略を運らしてゐる」強盜の、無にも等しい蠅に對しては無關心である。それにしても彼等は、そんな奴なんか、彼等の大顎を以つて打ち碎き、彼等の短劍を以て刺し殺すことなんざ、行らうと思へば出来ることではないか。はなだか蜂はその家族の滅亡を企らむやどり、蠅の前にあつて、恐怖の念に堪へず、たゞしく泣きながら黙つて了ふではないか。さそりにあつてはそれどころではない。「犠牲が犠牲司をむりやりに祭壇へ引つばつて行く。」

一種の盲目的なデテルミニズムが、彼等の間を引きつけてゐる。それは一定の軌道をたどりながら、吾々の自由意志のイリュウジョンへ、ちよいと明りを授げるところの衛星を支配するデテルミニズムと同じやうに宿命的である。如何に努力をしても、人間も矢張り多くの場合、宿命によつて定められた道を遁れることは出来ぬ。凡の闘争も何んの甲斐はない。彼れは「避くべからざるも

の」を避けることは出来ぬ。

果して一つ／＼の生物が宇宙を建築した「最高の技師」の計畫に於て、その必要な一部を構成してゐると云ふだけで存在してゐるものならば、何故或るものは生殺與奪の權を有し、同時に他のものは犠牲の苦しい義務を帯びてゐるか。

その兩者の何づれもが本能的に、殺戮の陰慘な法則に従つてゐるのではなくて、一種の得も云はれない至高の犠牲の法則——高級な集團的興味に對する、何んか服従の無意識な觀念に従つてゐるのではなからうか。

或る教養の高い人に依つて、偶然フアブルへ暗示せられた斯うした慰安を與へるに足る假定は、彼れの心を魅したのである。その朝彼れの顔は平生よりも晴れ／＼しいやうに私には思はれた。他にこれと確定した説明がないところから、それはフアブルにとつて、かうした透視の出来ない苦しい問題に對する、一條の蒼白な光りのやうなものではなかつたか。尠くも彼れは、吾々の眼前到る處、あの「至上智」が陰慘な宇宙のなかへ、恐らく必要な、實に多くの苦惱を撒いて以つて、吾々

をして己れに歸らしめ、吾々をして更に多くの愛、更に多くの憐愍、更に多くの安心を懐かしめようとしてゐるのであると了解するやうに見えた。

それに、彼れの著作は凡て明らかに、また本質に於て宗教的ではないか。そして自然に對する趣味とともに、彼れは吾々をして「神に對する趣味、尠くも神々しいものに對する感じを持たせようとしたのではないか。動物世界を單なる細胞の結果となした進化論と闘つて——人智には永久に分らないやうな、あゝした凡ての不思議を吾々に現はして見せて——最後に、吾々の起原に關する測り知るべからざる問題の中へ、吾々を何うにも逃れられないやうに深く突き込んで、そして神祕に對する門——人類の宗教が常に潑刺たる力を汲みとる「神々しい未知」に對する門を開いて呉れたのだ。

それにしても、彼れの有神論的宇宙觀を斯く／＼のテーマに限らうとするならば、彼れの思想を小さくし、彼れ自身をさへも不具者にするであらう。

何んとなれば、彼れが自然のなかに認め、そして讃仰する所のものは、到る所、物質現象に現は

されてゐる偉大な「永遠の力」に外ならないからである。

さうした所から、彼れは全生涯を通じて、あらゆる迷信から超越し、單に科學に對する深い無知のみならず、又神々しい「至上智」に對する甚だしき無理解をも意味する教理や奇蹟に對して、全く無關心なのであつた。彼れが苟も跪くのは、地上若しくは草の中に於て、あらゆる秩序の源泉——あの「力」を一層接近して讚美するためである。凡ての生き物に内在な直觀的智識は、蟲けらの恒久不變な小さい魂の中にあつてさへも、此の力の素晴らしい無代價の賜物なのだ。彼れが熱意を以つて聖體を拜領する祭式は、「襪襪を纏ふた貴族のやうな、磨り切れた股引を着けた法王のやうな、神よりも堂々たるぼろ／＼の種播く人が、復活祭の日に爛として輝く僧正よりも莊嚴に大地を祝福する」所の、恐ろしくも壯麗な彌撒である。

註一 *Ouberto Prouvençalo, le Semeur.* フアブルの此の詩は、ユゴーのあんなにも賞讃された詩よりも、

その美しくさと云ひ、その靈感の大きさと云ひ、遙かに優つたものである。

彼れは其處であらゆる生き物——「かはらひわ、かなりや、のじこ、ほほじろなどの可愛い詠歌隊」が、創生の第五日目に聲と羽とを與へて呉れたものを讀へて、「それ／＼聖歌をきさんで」歌ひ

轉づつてゐるなかに——「美しい花が、それ／＼金の香爐からやんはりと漂はす」妙へなる香の薫りのなかに、彼れは彼れの理想を見出してゐる。

さうした所から、彼れは彼れのあらゆる蟲けら、彼れの犬、彼れのおとなしい龜、「膨れてぬらぬらす慕」とさへも兄弟のやうに睦まじくする。夕べ、庭をそよろ歩きする時など、彼れは好んでアルマの「哲學者」である此の慕のどんよりした眼を、「星の明かりを頼つて」つく／＼見たりする。凡ては一つの聖い仕事を遂行してゐるし、人間をはじめ一枚の葉を嚼んだり、若しくは砂の中へ隠れ所を穿つだけの名もない蟲けらに至るまで、凡てが「不死不滅の同じ滴りに潤ほされてゐる」とを、彼れは信じて疑はないのだ。

註一 *Ouberto Prouvençalo, le Crapaud.*

註二 「人間に對しては云はずもがな、あなたは昆蟲に對しても決して亂暴をせられない方だと思はれます。(一八八〇年一月三日、ダアキンからフアブルへ送つた手紙)

そして、彼れは研究の悦びを常に凡ての上に置くところから、死後の報償として望むことは、ただ天に請ふて彼れの研究と努力との生活を、未來永劫彼等の間に於て繼續すると云ふことだけであ

一四

自然の再現

實證科學の領域に於ては、事實を蒐め、それを記録し、探究の結果を飾りのない方式に表はした所が、未だ必ずしも能事了つたものではない。疑ひもなく、凡ての根本的發見は、他の力を借りなくとも、それ自身で立派に立つことが出来る。例へば、發明家が藝術家の高さにまで登つたとしても、それが何んの役に立つか。「公理は明晰でさへあれば十分である。そして眞理は井戸の底から裸のまゝで出て来る。」

然しながら、描寫の仕方、表現の仕方なども、いざ説明して傳へる段になると、やつぱり眞理の一部を爲すのである。それを弱く云ひ表はすと、屢々それに累を及ぼし、その價值を減じ、時としてはそれを裏切ることさへもある。言葉には、云はんと欲する所を適切に語るものと、然らざるものがある。「言葉にはそれ／＼の人相があつて、どんより曇つたのもあれば、美しいのも、色

彩に富んだのもある。恰度、繪の灰色な背景に、ちよい／＼光りを撒く筆致みたいなものである。或る特殊な云ひ廻しは、しつくり絞つた表現となつて、事柄をより判然と浮び出させる。そして、若しも生き物の肖像をうまく描き、彼等の特徴をありのまゝに生き／＼と表現し、彼等の世界の光景を輝かし、想像の眼を醒ませ、物質を浸して思想に反映してゐる神祕な魂を忠實に通解しようとするならば、その人は記憶の中から——即ち豊富な讀書や、想像や、心やなどの中から適當な調子、語法の凡ゆるしなやかさ、及び凡ゆる必要な言葉を巧みに汲み出すことが出来なければならぬ。

その時藝術家の素質が現はれて、あらゆるばら／＼の断片を整理し、それらを纏め、それらに生氣を吹き込み、そして眞理を甦へらせる。

そしてファブルが興味を喚び、情熱を起させるところのものは、決して彼れの陳述する事實のみではない。それは同時に事實を明瞭にする論證の運びや、行く／＼それを説明して論證せられたる眞理を尙ほ一層明確にし、尙ほ一層顯著にするところの實驗である。

然しながら、彼れの仕事の仕方たるや、何んといふ奇妙なものであるか！ 彼れの構想の仕方た

るや、何んといふ不思議なものであるか！ たとひ彼れの精神は思想に充ち／＼てゐるにしても、若しもその場にちつとしてゐて、いざ書かうといふ人の普通にやる改まつた態度を執るならば、彼れには何うしてもそれを表現することは不可能である。坐つて動かす、足をそのまゝ休め、ペンを手に持ち、そして白紙と睨めつくらすのでは、あらゆる彼れの才能が直ちに麻痺するやうに彼れには思はれるのだ。當初に於て、彼れは動く必要がある。そして動き廻らなければ、彼れは「思想を狩る」ことが出来ぬ。彼れは活動の中に熱情を恢復し、再び靈感の源を見出すのである。

彼れは情熱なしに観察したことがないやうに、感激なしに書くことも出来ぬ。そして眞理を熱烈に愛すればこそ、彼れはあらゆるその美と輝きとを示さざるを得ないのだ。

彼れはサアカスの木馬のやうに、實驗室の大きな卓子のぐるりを、所謂「熊の眞似をして」ぐるぐる廻り始める。それが遂ひに板瓦を磨り減らして、三十年間絶えず堂々めぐりをした同圓の小徑を、其處へ消すべくもなくつけるに至つたのである。

パイプをふかしながら「髓を減らして」歩いてゐる間に、彼れは陶然となり、熱して来る。彼れは工風を凝らす。彼れは腦の中で未來の文章を「鐵敷かたしきにかける。」何んとなれば、形式が洗煉せ

られ、完全にせられると、益々實際と合致して思想もそれだけ正確になるのだ。そして詞がやがて顛へ生き、びく／＼し、そして書くものが贅物、お化け、空虚な幻まぼろしのやうなものではなく、實に忠實な反響、眞面目な翻譯、仕上つた解説——一言にして云へば自然と合致する眞の藝術品となるのである。

註一 *Oubrate Proust, le Maréchal.*

その時はじめて彼れは、インキで汚れ、ナイフの痕がつき、恰度一錢瓶のインキ壺と、帳面を開いて置かれるだけの「みすばらしい小さな胡桃の卓子の前に腰を下ろす。此の小さい机の上で以前勞苦と冥想とによつて、彼れは最初の學位を贏ち得たのであつた。

さうして「ペンをインキに浸すばかりではなく、また魂の眞赤な血にも浸して、「先づ黒い布表紙の罫が入つた普通の帳面へ、彼れは書き始める。彼れは毎日、毎時間、時々刻々の觀察や、實驗の結果、彼れの考へなどを書きつける。相互に照し合ひ、相互に補充し合ふ材料が段々と堆うたかくなる。そして結局、本が出来るのだ。

註一 *Oubrate Proust, le Maréchal.*

さうして嵩ばつた帳面は、既に手蹟の規則正しさや、屢々完全な最初の迸りの鮮かさなどの點に於て、寔に驚くべきものである。それは實際其處此處に同じ事柄が幾度びも続けざまに書き替へられて、その度びに力強い線を以つて抹殺せられてはゐるにしても、頁全體、否、幾頁も幾頁もが只の一つも改削されてゐないこともある。蠅の足跡と思はれるやうな、非常に繊細な文字は後年益々細かくなつて、これを判讀するためには擴大鏡でもなければならぬ程である。

それにしてもこれらの帳面は、未だ最後の原稿とはならぬ。フアブルはそれをたゞのバラ／＼の紙に改めて寫しながら、絶えず訂正し、辛抱強く文體を工風し、その著作に磨きをかける。さう云つても随分多くの文章は、始めから仕上つてゐて、そのまゝ少しも手を入れられることなしに取り入れられる。

註一 一度び活版屋へ渡すと、彼れは二度と讀むことは好まなかつた。彼れの出版者の云ふ所によると、彼れは少しも大膽に校正に手を入れず、直ぐ送り返へしてよこすのであつた。

吾々の國語のあらゆる技巧に長けた、近代文學の最大魔術師 (*Anatole France*) が、或る日フアブ

ルとその著作のことに觸れて、彼れは少しも文學者ではないと云ふ意見を私の前で漏らしたことがある。フアブルは偉大なる博物學者、感嘆すべき科學者、非凡な觀察者であるかも知れぬ。が、彼れはどんな點から見ても、格に合つた文章家ではないと云ふのが、此の魔術師の意見だつた。

然しながら、彼れと同じやうに、同時代の人々から「憐れな言葉」と判斷せられながら、随分多くの人々は、單に想像に富み、且つ巧みに生かすことが出来たと云ふ事によつて、今日尙ほ吾々を魅してゐるのではないか！

註一 此の點に關しては *Sainte-Beuve* 著 *Port-Royal, livre II, chap. XIX* 参照。

本當を云へば、あらゆる文學的手法などには全く無關心で、たゞ文體と思想とを一致せしめようと専心してゐるフアブルは、決して文士らしい文句の製造者ではない。彼れの著書の中には、藝術家らしい描き振りは影も形もない。而かも彼れをして斯くまで吾々に有りがたいものと思はせるのは、それは單に彼れの感じ方、ものの云ひ方である。

彼れにあつて吾々を動かすところのものは、それは語調、單純さ、細やかさ、節度、明瞭、それから屢々平凡であり、しだらなく、俗つぽくて、何んでもないことを云つたりしてはゐるが、然し

ながら、實に生々して、時には血の滲み出る程人間らしい、あんなにも純眞なあらゆる頁の正しい均衡などである！それが吾々を惹きつける磁石なのだ。そして、ラ・フォンテエヌ以來、これに比すべきものは未だ曾て無かつたのである。

彼れは科學を解放した。「野蠻な術語」の蔭に隠れる専門學者の智識、「小さい色眼鏡を透してしか世界を見ることのない」人々の「方言」、さうした人達が極めて詰らない詳細へも大袈裟に與へてゐる重大さ、分類の狹隘さ學說の混沌さ——要するに高慢ちきで、それでゐて統一のない一切の科學を、彼れは容赦なく攻撃し、擲論し、そして彼れ自らこれを興味あり、親しみよいものとすることに努めた。

さうした所から此の偉大な科學者は、あの「侮辱のやうな、」若しくは神降^{かみぞり}のやうな、或る科學の記録を「變挺な魔法書」としてゐる専門語の「ざらざらした子音」などを斥けて、そしてあんなにも熱心に一般人のやうに語らうとし、「純朴なイマアジュに富んだ名稱、日常ふだんの名前、何んか昆蟲の仕事の正確な意味を直接に傳へるやうな、若しくはその特徴を徹底的に教へるか、尠くも

憶測の餘地なからしめるやうな民間の生き／＼した言葉」を用ひるのである。

單に昔のフランス語から借りて來るところの、非常に適切な、非常に有效な、寔に魅力のある言葉が無数にあるのだが、彼れはそれを棄てることゝも無用なことで、殆んど不便を醸すやうに考へてゐる。此の點では吾々の偉大なジュシウ (Bernard Jussieu 1699—1777 有名なフランスの植物學者) もさうだつた。彼れは植物の分類の中で、テオフラスト、ヴィルヂイル、及びリンネなどが草木に與へた古い通俗な名前を、努めて保存したのであつた。

かうした所から、彼れは彼れのルウエルグ言葉に忠實で、サン・レオンの老人達の話によると、殆んど四十年後に其處へ家を賣り拂ふためにやつて來た時、彼れは尙ほそれをすらくと話してゐたと云ふことである。

プロヴァンス言葉、此の華かな方言、意味が豊富で響がよく、そして非常に暗示的な上に甚だ色彩に富み、云はんとする所を適確に云ふ點では屢々フランス語も及ばない程な此の素晴らしい言葉を、彼れがあんなにも愛したのは矢張りさうした理由によるものである。當時唱道され出したOC

語 (ロワール地方の方言) の特徴を保存しようとする云ふ運動に注意を拂つたフアブルは、特にルマニエユの作品を読んで此の方言を學んだ。此の作家の親しみのあるお構ひなしの文體が、ミストラルの堂々たる云ひ方よりは、寧ろ彼れに適するものであつた。勿論、彼れはカランダル (Calendal ミストラルの作) をも好んで讀み、その敘情力には感嘆してゐた。間もなくフランス語そのもののやうに親しみのあるものとなつた此の古い言葉から、彼れは彼れの文體の或る癖、或る新らしい言葉づかひ、それから彼れの純朴な手法や、彼れの文章の調子なども幾らか借り取つてゐる。それが彼れの骨身にまでも滲み込んだので、彼れはそれが吾々の國語とならないのを遺憾にさへ思ふた。そして私は嘗てOC語復興運動に加はつてゐる女が、戀のそゞろ歩きなどに黒い被衣かみぎを長く引いてゐるのを見たことがあるが、恰度さう云ふ風にフアブルは魂の中に、ミュレ (Murét, Toulouse 市から遠くないガロンヌ河上の町) 戦争の喪を黙々として帯びてゐた。此處で破壊者フラン人の進撃に會つて、將に吾々の文明にとつて代らんとした光輝あるアルヴィジョワ文化が亡んだのである。

註一 Joseph Roumanille, 1818—1891. プロヴァンスの詩人。OC語復興運動首唱者の一人。

然しながら、それが易々とも、のになつたわけではない。試みに昆蟲記の始めの巻と後の巻との隔たりを測つて見よ。最初文體は幾らか優柔不斷なところがある。そして、極めて大きな文學美が彼れの物語の中に持ち込まれたのは、經歷が進むにつれて徐々にせられたものである。彼れの最も健實な、最もよく表現せられた頁は、彼れが老境に這入つてから書いたものである。しかも、其處には少しも老衰の跡が見えないのみか、形式の完全さは「昆蟲記」の後の巻に於て、恐らく材料そのものの豊富さよりも更に著しく現はれてゐる。

そして、彼れの精細な記録が、何んと云ふ浮き彫りを心眼へ刻みつけることか！それが記憶の中に、何んと確しかり植つけられることか！

たとひきごし蜂を見たことがないにしても、「胡蜂らしい着物や、長い絲の先にぶら下がつてゐる蒸溜壺みたいなお腹」によつて、わけもなく此の蜂を思ひ浮べることが出来る。また、きごし蜂の母がその巢を築くために、泥の中から一と塊りを掘り取つてゐる瞬間に、ぱちりと撮つた早撮り寫眞の筆致は、何んたる巧妙さであるか！「氣さくなお主婦かみさんは、汚れないやうにちゃんとはしよつ

て、翅をぶる／＼させ、肢を高く起し、黒いお腹をその黄色な腹柄の端に立て、そして泥のびかひかする表面を掘ふては大顎の先を以つて掻き取つてゐる。」

彼れはまた、牛馬の血を榮養としてゐるうし蠅を、次のやうに美しくスケッチしてゐる。

「色々な種類のうし蠅が、私の傘の絹の圓天井へ避難をして、びんと張られた布のあつちこつちへちつとくつついてゐる。暑熱がやり切れないやうな時には、彼等はきまりきつて私の伴れとなつて呉れる。幾時間もちつと動かないでゐる時には、私は徒然のまゝに、傘の圓天井で紅玉のやうに輝いてゐる彼等の金色した大きな眼を見るのが好きだ。天井の或る一點が、あまりに暑くなつて、彼等が幾らか場所を變へなければならぬやうな時には、私はよく彼等の壯重な歩みを跟けて見

る。」(昆蟲記)

吾々は「小さく囁んで行く」ところの、「錐を突込む」檜しのの實のしきむしの、凡ゆる仕種しよどを辿つて見るやうに思ふ。ファブルは極めて細かなエピソード、屢々仕事最中に此の勞働者を驚かす出來事をさへ吾々に見せる。即ち此の蟲は、その長い吻を檜しのの實に深く突込んだまゝ、その足が突然滑ることがある。そんな時には此の不幸な奴は、どうにも吻を引つて抜くことが出來ず、支への面から

遠く、だらりと真直に空中へぶら下がるのだ。(昆蟲記)

「葉のすべくする表面へ、爪のある肢を以つて巧みに均衡を保つてゐる」白楊のさうむしなどは、實際手にとるやうに見える。吾々は彼れの方法の凡ゆる詳細や、彼れの仕事の順序などをまざくと見る。此の昆蟲が莖へ錐を突き立てると、葉が撓んで垂直に垂れる。「莖の汁を一部潤らすと、それが云はば麻痺せられて半死の状態となり、一層しなやかになつて取り扱ひ易くなる。」それから巻き方のことになつて、「此の職人は馬鹿落ち着きに落ち着いて、緩くりとそのシガーを巻く。それがお終ひに、傷つけられて脰形になつた葉の柄の端に、ぶらりと垂れ下がる。」(昆蟲記)

昆蟲の習性の描寫に巧みなフアブルは、眞の藝術家のやうに、色々な適切な言葉を見出して、麗はしい卵——「仙女の食器棚から掠めてでも來たやうな」、半透明の雪花石膏の小さい鉢、琥珀かニツケルの微妙な玉手箱、輝かしい眞珠、此の脆い藝術品を描寫してゐる。

彼れは「まるく」と肥つた赤子、纖弱い小蟲が眠つてゐる不可思議な寢室をちよいと開いて見る。母が一口のご馳走を持つて、若しくは餌袋を蜜で膨らまして巢へ歸つて來ると、ふつくらした仔蟲

どもは、「口を大きく開いて頭を徐かに揺する。」

怖ろしい春の蠅に家を毀されて、子供は失くなつて了ひ、顧みられることもなく、たつた一人途方に暮れるくだ蜂の母は、「弱々しくくづ折れて、毛は抜け、寒れ、襤褸でもひつかけたやうな様をして、心配氣にその邑を彷徨ひ歩く。と、灰色の小さい蜥蜴が、其處らでもう彼れを待ち構へてゐる」——さうした寢に泪ぐましい一幅の圖に、何んと云ふ憐み、何んといふ優しみ、何んといふ鋭い感じが籠つてゐることか！(昆蟲記)

愈々冬の寒さが近づいた時の胡蜂の巢の悲劇は、敘事詩の最後の一節である。始め、其處には何んかしら不安が漂ふてゐる。「一種の冷たさ、一種の不安さが此の城市を蔽ふてゐる。」將に起らんとする不幸——大團圓がもう豫感せられる。間もなく荒々しい騒ぎが持ち上がる。乳母どもは突然何んか精神錯亂にでも罹つたかのやうに、狂狂しく、猛々しく、そはくして來て、赤ん坊どもを増むやうになる。「働蜂どもは仔蟲を悉く引き出し、巢の外へおつ放り出し、それから愈々破壊の大詰となる。「不具なものや、瀕死の状態に在るものどもは、蛆、むかで、介殼蟲などによつて

四肢を断ち切られ、空ろにせられ、すつかりばらばらにせられ、そしてカタコムの中へ堆く積まれる。」と、最後に衣蛾がやつて来て、「住居そのものに打つてかかり、凡ゆる段階の床や天井を齧つては崩潰せしめ、遂ひには凡てが幾撮みかの埃と、幾枚かのぼろ／＼な灰色の紙みたいなものとなつて了ふ。」(昆蟲記)

何んといふ鮮かな表現を用ひて、彼れは昆蟲の相貌のぎよつとするやうな特徴を、判然と傳へてゐることか！

「七ヶ月の間、夜臺、子供等をふんぶしてうろつき廻るボヘミヤン」——それは子守蜘蛛、黒い腹のタランチュール、野原のでつかい蜘蛛である。

消化の滓を舐みか何んかのやうに後へ残しながら、椋の老木の中を齧つて行く大かみきりの仔蟲——それは「道を食ひながら辿り行く一片の腸」である。

さそりは「厭らしい鈍馬。」此奴のものになつてゐない頭やぶつちりちよん切られた顔が、此の一言の中に縮圖されてゐる。

「粗末な着物をつけて、赤手拭で頬かぶりをし、うまい時刻を待ち構へてゐる強盗」——それはやどり、蠅である。「此の大膽な蠅」は日向の砂地に蹲んでゐて、はなだか蜂かふしだか蜂の歸り路を要撃し、彼等をやつつけて自分の子供等の身を立ててやるのだ。

ラングドツクのあな蜂 (Sphex Languedocien) は、葡萄の葉の上に腹這ひになつて、暑さに酔ひ、いゝ氣持になつて跳ね廻る。「彼れは肢の先を以つてその休み場を速かに叩き、そして木の葉の上に沛然と注ぎかゝる大雨の音のやうな——太鼓の轟のやうな音を起させる。」

かうした實に正確な、實に生き／＼した描寫は、實際人を酔はせずには措かぬ。さうは云つても、彼れの精神が至難な解剖學の面倒な、極めて綿密な描寫には適しないと思ふてはならぬ。

凡ての科學と同じやうに、昆蟲學にもそれ／＼乾燥無味な方面——面倒な骨の折れる努力が必要である。それにしてもシタリスの隠秘な、かよわい仔蟲の複雑な變態、さう、むしの産卵の祕密、それからいぶきぎすや蟬の樂器の巧妙な構造などを、彼れは何んといふ興味と、何んといふ光りとを以つて、巧みに説明してゐることか！何んといふ熟練さを以つて、彼れは蟋蟀の歌を説明してゐ

ることか！ その自在鉤みたいな弓の百五十の長さ／＼が、四つのチンパンを頼はして、或ひはきい／＼云ふ音を和らげ、或ひは朗吟歌を遠くへ響かせるのだ。(昆蟲記)

そして、動物の體形によつて暗示せられるイマアヂユの或るものは、實によく調和がとれ、實に美しいので、彼れの或る描寫の如きは藝術家に刺戟を與へ、若しくは寶石彫刻、七寶焼き、寶石細工などの裝飾術に思ひがけない暗示を與へることが出来るかも知れぬ。

古物を何時までも寫したり、若しくは生氣のない文書に靈感を求めたりするかはりに、吾々を誘つてゐながら未だ曾て用ひられたことのない、従つて獨創的な、寔に興味ある多くの事物に對して、何故ちよいと注意を向けようとはしないのか。心を責苦にかけて、貧弱な、熱のない、ぶまな組合はせを苦心慘澹の結果、やつと考へ出してみたところが、結局何んの役に立つ？ 自然が吾々の眼前へ、深い論理を持つた、そして未だ精密に點檢せられたことのない、その生ける不思議の無盡藏な寶石筐を、それ自身が開いて見せてゐるではないか。

果して蜜蜂が「空間と材料との最も經濟な形の問題で、その六角柱をもつて凡ゆる幾何學者に先んじてゐる」ならば——果して女郎蜘蛛と蝸牛とが靈妙な「對數的螺旋」を發明したものならば——

——果してとつくり、蜂の作品が卓越せるものならば——果して凡てが「一として免れることなき一種の美學に感興を唆られて、何をするにも先づ美を心懸けてゐる」ものならば、それなら生命と競争をして、豫見の出来ない典型をも創造する人間の藝術は、徒らに摸倣や回想に止まらないで、「無意識者」によつて惜し氣なく供給せられてゐる自然美を利用し、これを變へて理想的イマアヂユとなすべきではないか。

近代藝術は特に明敏な日本人の後に對して、既にさうした方面へ進んでゐる。

タランチュールが伸ばした肢の先で、その卵の眞白な囊を太陽に當ててゐる——その靈妙な幻よりの、若しくはオントファグス・タウルス (Orthopagus taurus 馬糞蟲の一種) の透明な若蟲が、「野牛のやうな廣い鼻面と大きい角を持ち、一片の水晶へでも刻まれたかのやうである」——その繊細な彫刻よりも、更に優れて美しい對象を、何んか貴重な材料へ象つた藝術家が果して有るであらうか。(昆蟲記)

殆んど超肉體的な優美さをもつたエルガアト (Ergast かみきりの一種) の若蟲は、「半透明な象牙細工のやうである。そして眞白な被衣を着て胸に腕を十字に組んだ様は、丁度聖體を拜領する乙女

のやうで、宿命に對する神秘的安心の生きた象徴である。」(昆蟲記)——さうかと思ふと、スカラベ・サクレの若蟲などは、更にく神秘的である。それは最初「半透明な琥珀のミイラ、そして和尚さんのやうな姿勢をして、麻の紐で支へられてゐる。けれども間もなくその黄玉の地の上へ頭や肢や胸などが、黒ずんだ赤味を帯びて來て、若蟲は次第に變形し、そして大僧正の緋衣の赤さと、祭司の白衣の白とを兼ねた、あゝした莊嚴な着物を著ける。」(昆蟲記)——凡てさうした中から、何んといふ豊富な、未だ曾て發見せられたことのない主題を、藝術家が見出すことが出來ようか。

他方に於て、つゝの蟲の滑稽な仔蟲には、脊中にどえらい瘤がある。また、エンブサ(Empsa)の腹端は鱗狀になつて錫杖のやうにまくれ上り、そして四本の長い竹馬に身體をもたげ、向う面は尖つて、鬚は鈎のやうに曲り、大きな眼は飛び出して、頭には奇妙なシャツポを被つてゐる。こんなにも滑稽な、こんなにも變挺なものを、これまで創造的進化が他に拵へたことはない——さうした幻想的な、さうした不氣味な輪郭よりも更に不思議な漫畫が、どんなカロオによつて想像せられたことがあるか。(昆蟲記)

註一 Jacques Callot 1592—1635 フランメの有名な彫刻家にして畫家。

昆蟲の詩

フアブルは描寫や肖像畫に於て、それは實際單純で正確、そして生れながらの純朴さに満ち充ちてゐる。彼れはまた言葉を巧みに操つて、その觀察する微細な生き物の小止みなき活動に適切ならしめることが出来る。それにしても、彼等を活氣づけてゐる感情——彼等の戀、彼等の鬭争、彼等の權謀術策、及び彼等の食食——、要するに到る所、創造に伴ふ無限のドラマを傳へる段になると、彼れの文體は一層高き水準に達し、色彩に輝き、イマアヂユを以つて豊富になる。

特に此の點に於いて、未だ殆んど探檢せられてゐない如何なる地平線、如何なる深い盡きざる材料を、科學が詩に提供し得るかをフアブルは吾々に示してゐる。

昆蟲記に導かれるまゝに、凡てが神祕と驚異とである不思議な園生の中を、彼れに従いて行つてみよう。

げに脱蛹こそは感動的な出来事ではないか。ファブルは彼れの研究した凡ての生き物の歴史に於いて、さすがに此の出来事へ多くの頁を献げずにはゐなかつた。何んとなれば、凡ての生き物にとつて「光りへの到着はどれらい仕事」であるからだ。

いよいよ一陽來復した。春を告げる野の蟋蟀の呼び聲につれて、それ／＼若蟲の中、若しくは蛹の中に眠つてゐた胚子どもは、彼等の束縛を断ち切つた。何んと云ふ忙しさ、何んと云ふ巧妙さを以つて、彼等は生地の間を出で、襪襟を脱ぎ、地中の殻を破り、蠟の仕切りを破壊し、土壤を穿ち、若しくは絹の牢獄から脱出することか！

椿の椿象 (Pentatoma griseum) の卵は、構造から云つても、論理から云つても、美術の傑作である。そして此の函の封を破つて、自由に駆け回り廻るために、彼れは何んといふ不思議な廻し鎖、「何んといふ奇妙な金具を發明することか！

食蟲椿象 (Reduvius) はその玉手箱を開くために、彼れの家を爆發させる。

幾日かの間、ばつたは「頸を以つて土壤の堅さと闘ひ、石と取組合ひをする。身體を搦ちつたり

縋ちつたりして以つて、彼れは大地のさらさらした子宮を脱け出で、彼れの古い外被を打ち破り、變形し、明りの中に眼を開き、そして始めてびよ／＼跳び廻る。」

しぎむしの蛆蟲は、身體を伸ばして、彼れの榛の實の天窓へ頭を突き入れる。それから身體中の液體を徐ろに頭蓋へ押し込めやつて、そして身體を細くしておいて、やつと狭い風抜きから脱け出す。

松のけむしてふ (Bombyx du Pin) は「額へダイヤモンドの針をつけ、それから翅を擴げ、毛飾りを開き、毛衣を膨らます。が、暗い夜を待つて始めて動き出し、その晩のうちに交尾をし、そして翌日死んで了ふ。」

「一個のさゝやかな蠅を地中から登り出でしめるために、」何んといふ奇妙な發明、何んといふ機械、何んといふ組合はせがなされることか！

アントラックスはそのセメントの天井を貫くために、鑿孔器、錐、鋸、鉤などをつける。「それから、薄氣味の悪い眞黒な蠅は、未だ生の實驗場の濡れり濡れりたまま現はれて、ぶる／＼顫ふその肢を踏みしめ、翅を乾かし、具足を脱ぎ、そして飛んで行く。」

砂地の深みに埋葬せられてゐた青蠅は甦へつて底から出て来るために、「小樽のやうなその柩を破裂させ、」それから吾れと吾れが頭蓋を打ち砕く。即ち彼れの頭はかつきり二つに割れるのだ。そして奇妙な肉隆がその中に現はれては見えなくなり、さうかと思ふとまた現はれ、膨らんだり窄んだり、這入つたり出たり、びく／＼動いたり、さうして砂を突き碎き、だん／＼に崩し、少しづつ押し除け、やつとこのことで赤ん坊がカタコムの底から現はれて来る。(昆蟲記)

若い蜘蛛どもは自由の身となつて、空間を征服し、そして廣い世界へ散らばつて行くために、窠に奇妙な飛行法を用ひる。「彼等は藪の天邊へ達して絲を漂はす。と、風がそれを受けとつて、彼等を吊したまゝ運んで行く。一つ／＼が絲杉の緑の背景の上に、光りの點のやうにきら／＼と輝く。それは出發者の小止みなき噴水である。さながら太陽に抱擁せられて散らばる種子のやうに、原子の彈丸のやうに、一と房の煙火のやうに——凡てが突き進み、突き登つて行く……何んといふ輝かしい出發であるか！何んといふ出世であるか！航空の絲へ掴まつて、小さい蟲が神々の間へ登つて行く……」(昆蟲記)

然しながら、たとひ凡てに聲がかかるにしても、皆に皆が選ばれはせぬ。「地中深く、普遍的生命のさら／＼した子宮の中に於て、どれだけのものが撃つては撃たれ、大なる危険を冒しながら道を辿つてゐることか！そして一粒の砂に阻まれて、どれだけのものが途中で斃れることか！」更にまた、祭典の毛衣を着けて創造の歡喜へ参加することが許される前に、極めて緩慢な變態の故に、長い間地中の闇の中に生息してゐなければならぬものもある。

そんな風に、蟬は土壤を出でてこの世に——太陽の前へ現はれる前に、暗い幾年の間、闇の中にゐなければならぬ。大地の懷を出でる瞬間に、泥にまみれた幼蟲は「溝浚ひのやうである。」彼の眼は白く曇り、藪睨みで物は見えぬ。それから「彼れは細い莖か何んかへ吊るさつて、脊中を割り、角質の羊皮紙よりもから／＼なその殻を脱ぎ、そして蟬となる。それは最初、草の淺緑を帯びてゐる。」最後に「火の雨に狂喜して、彼れは終日柔らかい樹皮の甘い汁を吸り、夕べになつて光りと熱とに飽滿し、はじめてその音を止める。「收穫の莊嚴なシンフォニーの一部をなす」彼の歌は、たゞ夫れ「彼れの生の悦び」を告げるのだ。幾年もを地中に於てすごした蟬が、太陽に

抱かれて光りの世を楽しむのは、僅かに一と月を出でぬ。「かくも當然な、かくも儚ない福祉を祝ふために、たとひ如何に狂ほしく小さいシンバルを鳴らしても、これで十分と云ふことはないであらう！」(昆蟲記)

そして凡てが夏の日の静けさのなかで、思ひ／＼に幸福の音を立ててゐる。それは彼等の魂の陶醉である。それは彼等の祈り、讚美、「一ばいなお腹を抱へて脊中をお日様に當てた生存の甘味」の表現である。云ふにも足らないばつたさへが、その悦びを表はすために腹を擦り、肢を上げたり下げたり、翅鞘をぎい／＼軋らせたり、そしてその音に酔ふては「光りと影とにつれて、」彼れの折り返しを始めたり、また突然止めたりする。凡てはそれ／＼の或ひは高い、或ひは幽かなリズムを持つてゐる。太陽に愛撫せられる耕地の音楽、藪の音楽——楽しい生の波は或ひは高まり、或ひは沈む。

彼等はお互ひにからかひ、お互ひに悪戯し合ふ。生きることの狂ほしい忙しさの中で、彼等は互

ひに知り合ふ前にさへも、小止みなく交尾する。何んとなれば、「戀は蟲けらの唯一の楽しみなのだ。」而かも「愛は死である。」

躰へるか躰へらないうちに、「未だ解脱のきつい仕事に埃だらけとなつてゐるあかすぢ、蜂の囀は、」雄にとつつかまつて眼を拭ふ暇さへもなく。

一年有餘も地中で眠つてから、生家の殻を脱げ出すか出さないうちに、シタリスは生れたその場の日向で戀の二三分を味ひ、そして死んで了ふ。

生命は不意に現はれ、輝き、少時し形を採り、燃え、燦めき、そして流れて行く——闇二つの間の小さい閃めき！

無限の妖精が、さはめく森を充たしてゐる。夜となく晝となく、一片の茨のほとりで、古い垣の蔭で、崖の傾斜の上で、厚い藪の中で、靈妙な繪巻物が限りなく展開せられてゐる。

「昆蟲は婚禮のために姿を變へる。そして一つ／＼の種には、それ／＼燃ゆる思ひを明かす儀式がある。」此の偉大な博物學者は、彼等の婚禮と華燭の典の芽出度い記録——彼等の爲種や戀の約束

のカマスウトラ(Kamsouta)、さうしたものを書きたいと思ふたことがある。此の素晴らしいテーマに關して、彼れは何んと云ふ精緻さを以つて、同時に何んと云ふ控目を以つて、尠くもちよいちよいと試みてゐることか！ 科學的詳細はたゞの一つも省略せられず、それでゐて何んにも厭氣を唆ることはない。吾等の偉大な昆蟲學者は、此の悦樂の明るい園生の中に於ても、彼れの會話の中でと同じやうに、どんなむくつけき言葉でも云ふを恐れないが、少しでも猥りがましいことは避ける。何んにせ、底の心は極めて純潔で、常に甚だ控目である。

小石の麓に於て、み、み、みは「彼女の園からバルコンへ現はれて、愛くしむ太陽の光線の中に無類な絨毛の柔かさにくるまつて横たはる。」彼女は婚禮のために「ふつくらしした毛衣を着けて、黒天鵝絨のマントを引つかけた優しい蛾」のやつて來るのを待つてゐる。然しながら、「若しも彼れがなか／＼やつて來ないならば、彼女はどうにもやり切れなくなつて、自分からその飾り立てた未來の夫に會ひに行く。」

悦樂の抑へ切れないさうした力に驅られて、蟋蟀も彼れの懐かしい音を立ち去る。

繻子よりも輝かしい黒の袍衣

腰のあたりには緋色の飾帶

「あらん限りの美装をした」彼れは、「黄昏の覺束ない光りを頼りに」叢を横ぎつて、遠く戀人の住居迄行く。今、彼れはやつと「玄關先の砂を撒かれた廣場へ」着いた。然しながら、場所はもう他の戀の奴に占められてゐる。と見るや、「二人の戀仇はすつくと立ち上がつて、頭蓋を咬み合ふ。」そして結局、弱い奴が追ひ拂はれる。「勝利者は凱歌を一齣くま歌つて奴を辱しめる。」此の幸福なジャンピオンは、花ですつかり碧くなつたアフライランテニス(Aphylanthus)の茂みの中へ隠れてゐる別嬪の前で、或ひは反り身になつたりして意氣揚々たる様をする。「彼れは指でぐいりと觸角を引き寄せて、それを大顎の下で縮めらせる。赤い條と拍車をつけた長い肢とを以つて、彼れはじれつたさに地團太を踏む。宙を蹴る……だが、思ひ迫つて聲は出ぬ……」(昆蟲記)

秦皮カニシキの葉蔭でカンタリデス (Cantarides はんめうの一種) の色男は、彼れの戀女をびしやりくと鞭つ。と、彼女は頭を胸元へ縮め込んで小ぢやくなる。彼れは彼女を拳骨で突き、腹を以つて擲りつけ、「彼女の土へ戀の嵐を降らす。」それから腕を十字に組んで、彼れはしばし身動きもせず、ちつとしてぶる／＼顫へる。最後に、彼れは別嬪の觸角を掴んで、否應なしに頭を起させる。さうした様は、「意氣揚々と鞍に跨つて、兩手に手綱をとつた騎士かなんかのやうである。」(昆蟲記)

オスミ (Osia 蜜蜂の一種) の雌は、「戀に焦れた雄どもの云ひ寄りに對して、幾度か大顎をからりからりと速かに開いたり閉ぢたりする。と、色男どもは尻込みをする。そして彼等も恐らく威嚴を保たうとするのだらう、めい／＼その大顎を操つて、怖ろしい聲め面をする。それから別嬪はお屋敷へお這入りになる。すると戀の奴どもは、再び入口へやつて來て佇む。雌がまた現はれる。そして顎を變にまた動かすと、雄どももまた引退つて、盛んにその缺を操縦する。何んといふ奇妙な意中の明かし方であるか、オスミのそれは！ 威嚇でもするやうに、大顎を虚空で打ち合したりして、戀の奴どもはお互に咬み合はうとするものやうである。それは戀の翰當か何んかで、田舎者が振り上

げる拳骨を思はせる。」こんな風に、彼等は婚禮に先き立つて、色々婦人に對する慇懃さを示す。それはラブレエ (François Robelais 十六世紀のフランスの作家) の語つてゐる大昔しの婚約の仕方を思はせる。當時、吾こそと思ふ者どもは、お互に威嚇しあつたり、心ゆくばかり拳骨で擲り合つたりしたのであつた。(昆蟲記)

重々しい大氣の中で、嵐の雲間を漏れる朧ろな月の光りを頼りに、近眼な蒼白いさそり——此の不恰好な頭のいやらしい怪物は、乾燥した岡の上へ、「その異様な姿を現はす。そして二人一組みとなつて腕を伸ばし、手に手をとつて尻つぽを渦形に巻き、ラウンドの茂みを通してちよ／＼彷徨ひ歩るく。彼等の至福、彼等の恍惚、それを何んと云はう。とても人間の言葉では云ひ表はすことが出来ぬ！……」(昆蟲記)

それにしても、螢は情人を導くために、「満月からこぼれ落ちた火の粉のやうな」その明かりを灯す。が、「間もなく光りは弱つて用心深い燈心の明かりとなつて了ふ。」然るにその邊りでは、仕事

に遅れた無数の夜の蟲けらどもが、それ／＼の祝婚歌を歌つてゐる。(昆蟲記)

怖ろしい淫亂が凡ゆる生き物を咬つて、全自然を搖がす普遍的な發情の中におびき込む。しま、蠅などは、ぐづ／＼して居られないと云ふので、「澤山の餓鬼どもを」産卵する代りに分娩する。そして此の餓鬼どもは生れるが早いか死骸の上へ仕事に出掛ける。ルウコスピス (Lourcospis 小蜂の一種) は頭を切り離され、肢も翅も挽ぎ取られ、厭らしい胴體ばかりとなつて、今を最後の苦悶をしながらも、その腹は依然として跳り、動き、びく／＼し、そして開かうとする。産卵嚢は勃起してその使命を果たさない限り、いつかな此のまゝ死なうとはしない。

然しながら、彼等の楽しい時期は間もなく過ぎて、やがて悲劇が戀愛に取つて代る。

何がどうあつても、先づ生きなければならぬ。そして「胃の腑が世を支配する。」

大地を満たす凡ての生き物は、不斷に闘争してゐる。そして或るものは他のものを犠牲にして、はじめて生存してゐる。

他方、次代のものが光りを見得るためには、現代のものが古いものどもの保身に氣を配らなければならぬ。「他の事なんぞ、どうにでもなれ。子供等だけは榮えなければならぬ！」だからお腹のためにのみ生息する未來の仔蟲どものために——此の「生肉喰ひの小さい餓鬼ども」のために、容の底へ生餌が入れられなければならぬ。

餓ゑと母性との外に、尙ほ「戦闘によつて世を統べる」戀がある。

斯くの如きはフアブルに依つて描寫せられた「生存競争」の要素である。然しながら、彼れは自ら觀察し、自ら目撃した所のものを描寫するに止まつて、更に餘念はなかつたのだ。また斯くの如きは、彼れが著作の中へ撒き散らしてゐる壯大な戦闘のありふれたテエマである。そして如何なるサアセスも、如何なる闘技場も、こんなにはら／＼するやうな闘争を見せはせぬ。如何なる森林もその叢の中へ、こんなにぞく／＼するやうな葛藤を宿しては居らぬ。

「いづれもそれ／＼の戦術、攻撃の仕方、殺し方を持つてゐる。」

あな蜂が蟋蟀を動けなくする術策、つちすがりがクレオヌス (Cleonus やうむしの一種) を捕へ、

それを適当な場所に抑へつけ、さうして置いて緩くりと、確かに手術を施す術策——それは凡て、何んと云ふ「凝つた、巧みな、古代力技場の闘士でもしさうな」術策であることか！

一方、緩慢な死に方をさせるところの、かうした癡醉術師がゐるかと思ふと、他方、それにも劣らない正確さを以つて、犠牲をたゞと突き、しかも何んらの瘡痕をもつけないで、その場で即座に殺して了ふやうな「殺人にかけては眞の玄人」もゐる。

赤い大きな花の咲くこじあふひの上で「繻子の着物を着た綺麗な小さい蟹蜘蛛は、こつそりと飼養蜜蜂を狙つてゐて、いきなりその頸を啜へて殺す。かと思ふと、これまた刑吏であるふしだか蜂も、矢張り彼れの頭を狙つて顎の下の高くもなく低くもないところ——「きつちり首の細い接目へ」その盟を突き刺す。何んとなれば、蟹蜘蛛もふしだか蜂も、小さい神経の塊りが、脳か何んかのやうに集中してゐる此の一點を除いては、他に「侵し得る弱點」、甲冑の瑕、「生命の中心」のないことをちやんと知つてゐるからである。

尙ほ蜘蛛のやうに、生餌に毒を注射するものもある。「接吻か何んかのやうな」彼等の繊細にして微妙な咬傷は、それが身體の何處へつけられようと「殆んど即座に失神させる。」例へば、毛むくじやらのでつかいまるはな蜂は、たちちやかうさうの茂つてゐる野原を遍歴してゐる中に、毒蜘蛛タランテールの眼が窘の底に寶石か何んかのやうに光つてゐるなかへ、何んと云ふことなしに迷ひ込むことがある。奴、孔へ這入つたと思ふが早いか、彼れは鋭いさわめきを響かせる。「本當の死の歌だ。」そして直ちに森閑となる。「瞬く暇に、不幸な奴は綺麗に死んぢやつて、吻はだらりと下がり、肢はぐつたりとなつて了つたのだ……がら、がら、蛇に咬まれたつて、こんなに突然動けなくなりはせぬ。」

此の怖ろしい蜘蛛は「そのお城の銃眼へ倚りかゝつて、重々しい腹を陽に當てながら、どんな幽かな響にも耳を欝てゐて、それが蠅であらうが蜻蛉であらうが、通りすがるものへ跳びかゝる。そして、いきなり犠牲を縊つてその温い血を啜り、その死骸をしやぶる。」

彼れをしてその牙城を出でしめるには、鼈甲蜂の凡ゆる巧妙な戦術が必要である。肉薄戦、殘忍な、悲壯な、眞に叙事詩的な決闘——そして此の翅を持つた昆虫の敏捷さと大膽さが、結局怖る

べき怪物とその毒を含んだ短剣とを征服するのだ。(昆蟲記)

死は到る所にある。

どんな樹皮の襲にも、どんな葉蔭にも、殺すための怖ろしい武器を持つて四方八方を窺つてゐる狩人が潜んでゐる。そして鉤、短剣、蠟、齒、ピンセット、釘抜き、鋸などに見舞はれないものはない。

象牙の額を持つたいぶきぎすは、芝草の中をびよこし、跳びながら、「その大顎の下でばつたの頭をぼり／＼齧る。」

或る残忍な幼蟲——草蜻蛉(Chrysopa vulgaris)の仔蟲は、木虱の腹を掻き開き、彼等の皮を以つて戦衣を作る。「それは恰度ユウロン(Huron 北米の土着民)が、腰のまわりへ敵の髪の毛を巻きつけたやうなものである。」

情け容赦のない食ひしんぼうの歩行蟲は、毛蟲のぐるりをうろつき廻る。

「毛むくぢやらかな皮が引き裂かれる。中味が溢れて腸の流れをなす。それは食物のために緑色となつてゐる。襲はれたものどもは、伸びたり縮んだり、尻を以つて抵抗し、肢を以つて獅噛みつき、唾を吐いたり咬みついたりする。禾だ傷を蒙らないものは、地中へ遁れ込むために、無我夢中で鶴嘴を振ふ。が、たゞの一匹だつて成功するものはない。やつと半身地中に這入り込んだかと思ふと、忽ち歩行蟲が駆けつけて彼れを引き出し、立ち所ろに腹を引つ裂いて了ふ。」

「月の光りで織られたやうな」網の真ん中で——粘り着く不實な良の真ん中で、若しくは遠く青葉の小屋の中に身をひそめて、女郎蜘蛛はその生餌を待ち構へ、今か／＼と頻りに窺つてゐる。怖るべきもんくま蜂でさへも、枝から枝と飛んで来て、その粘り着く網へ引つかゝるならば、「其奴はじたばたし、何んとか切り抜けようとはするが、とても駄目。網は劇しく震へ、今にも大綱から千切れやしないかと思はれる。が、間髪を容れず、蜘蛛は跳び出し、大膽にも闘入者へまつしぐらに駆けつける。そしていきなり二本の後肢が絹の經帷子を編んで、ぐる／＼生餌を包んで了ふ……強壯な猛獸と闘はなければならなかつた古への投網闘技者は、肩へ疊んだ網を掛けて闘技場へ現はれた。

猛獸が跳びかゝる。人間は捷しこく身を交はして、彼れを網で巻きつける。三叉の鋒が、打ち敷かれた猛獸の息の根を止める。」それと同じやうに、女郎蜘蛛はひつきりなしに網を投げ懸ける。そして、眞白な經帷子の下に動きがなくなると、その時、蜘蛛は此の縛られたものへ近寄つて、その毒を含んだ鈎は闘技者の三叉の鋒の役目をなす。(昆蟲記)

お祈り螳螂——此の悪魔にでも憑かれたやうな生き物は、昆蟲のうちでも頭を何方へでも向けて見ることの出来る唯一人である。「彼れの珠數でも爪ぐつてゐるやうな、殊勝な様子の子の蔭には、残忍な習性が隠されてゐる。」此奴は幾時間もくの間、びくともせず、ぢつと待ち伏せしてゐる。でつかいばつたでも差しかゝつてみる。彼れはそれを目で跟け、そつと葉の間に滑り込み、そして出し抜けに其奴の前へすつくと立ちはだかる。「それから、彼れはお化けのやうな身構へをして、生餌を怖ろしさに竦まして了ふ。彼れの翅鞘は開らき、翅はありつたけ擴がり、そして大きな兜の飾りのやうに脊中へ起ち上る。一種の吐息みたいな音がする。不意討ちを喰つた青大將の息吹のやうである。引つ搔く肢は大きく開らき、大の字なりに突き出だされ、そして眼状斑の飾りのある脇の

下を露はに見せる。此の飾りは孔雀の尻つぼのそれを眞似たやうなもので、當時には隠されてゐる具足の一部である。それは戦闘のために威猛高となつて、怖ろしい様子をする瞬間にのみ現はされる。」それから「二つの摺鍬が投げられ、その齒が突き立ち、二つの鋸が閉ぢ合はされ、最後に犠牲の可憐な奴がぎゆつと締めつけられる。」(昆蟲記)

寸時も休止することはない。日が暮れる。怖ろしい戦闘が尙ほも闇の中で續けられる。残忍な咬み合ひ、情け容赦もない決闘が夏の夜に充ちる。

「物語のヴァンピールのやうな、奇怪な吻を持つて豌豆の褐色を帯びたかめむし——此の食蟲椿象は、先づ犠牲を麻痺して置いて、それから徹底的にその汁を吸ひ潤らす。

流れのほとりの草のうへで、螢は「蝸牛を麻酔させて感覺を無くさすために、彼れに毒を注射する。」これまた、食ふ前に生餌を動けなくする巧妙な手術の一であつて、ファブルの發見にかゝるものである。

終日日向で無上の悦びを歌つてから、夜、蟬は橄欖樹や高いプラタマヌの中で眠る。「然しながら

ら、耳をつんざく短い苦悶の叫びが、突如として響き渡る。それは蝨蟻によつて安靜を襲はれた蟬の遺瀨ない悲鳴である。此の熱心な夜の狩人は、彼れに跳びかゝり、横腹を襲ひ、そして腹の中味を食り喰ふのだ。」

斯くの如きは花の中で、藁の蔭で、小暗い枝の纏れの中で、太陽に明るく照らされた原の中で、また耕地の埃の上などで、絶え間なく展開される陰惨な叙事詩である。斯くの如きは野の深い平和の中に、慌たゞしい春の花盛りの蔭に、また眞夏の壯麗の中に、自然が常に見せる光景である。かうした殺害、かうした殺戮は、靜寂な無言の世界の中で行はれてゐる。それにしても

虎の怒りと獅子の叫びとが 深く

これらの小宇宙の中で轟いてゐる

それが「想像の耳」に聞えるではないか。

さうして見ると、吾等のユゴーは、實に驚くべきほど適切なこれらの詩句を、あゝしたぞく／＼する祕密の摘發に適用しようとしたのであるか。詩的傳説の云ふやうに、果して彼れが偉大な觀察者へ「昆蟲のホーム」¹と云ふ、實に相應しい稱號を與へたのであるか。

或ひはさうかも知れぬ。但しフアブル自身は、それを裏づけるやうな證據も記憶も持つてはゐない。然しながら、此の傳説を尊重しようではないか。何んのことはない、それは單に魅力があるからだ。それはまた、要するにフアブルの麗はしい一特質を正確に云ひ現はしてゐるからだ。

野を舞臺とする小さい役者どもが、入り代はり立ち代はり、或ひは好機を窺ひ、或ひは偶然のまにまに相次いで現はれる——此の無限の場面を持つたドラマの中では、極めて微々たるものが大立物となつてゐる。

恰度人間喜劇のやうに、これにも紫の衣をつけ、刺繡を輝やかし、「高い羽飾り」をつけ、そして揚々と歩いてゐる恵まれた生れのものがある。さうかと思ふと、燦爛たる金色の着物を纏ひ、デヤ

マン、黄玉、青玉などのやうな、美々しい光りに輝く寶石を飾り立てた、威風堂々たる「のらくらの金持ち」もゐる。然しながら、さうは着飾つたり威張つたりしてゐても、實際さうした連中の「脳味噌と来た日には、厚ぼつたくて重々しく、想像力もなければ創意もなく、さうかと云つて他に能があるでもなく、」そして仕事と云へば、薔薇か何んかの花の中で太陽を飲むか、若しくは何處か葉蔭へぐつすり寝こんで酔を醒ます位なものだ。

これに反して、せつせと勞働するものどもは、なか／＼人眼には立たぬ。而かも多くの場合、最も隠れたるものは、最も興味の深いものである。せつば詰つた赤貧がさうしたものを教育して仕上げるのだ。で、彼等は「發明の見附けもの」や、思ひも寄らない才能や、人に知られない工業や、詰り無数の不思議な思ひがけない職業を行ふやうになつてゐる。そして「これらの小さい生き物は、石の下で、茨の中で、枯葉の蔭で、人には振り向きもされないのだが、詩の材料として、さうした生き物のたつた一匹の詳細な歴史に及ぶものがあるか。」宇宙の宏大なシンフォニーに、獨創的な、若しくは叙事詩的な調子を加へるものは、特にさうしたものどもである。

さりながら、死も亦その詩を有つてゐる。その陰惨な領域にも矢張り素晴らしい教訓が含まれてゐる。そして臭氣紛々たる一片の腐肉さへも、ファブルにとつては神曲の奏せられる「神殿」となつてゐる。

蟻——此の「一心不亂な流賊は眞先きに駆けつけて、ぼり／＼缺き始める。」

「麝香の香ひを放ち、觸角の端へ赤い總をつけてゐる」くろしでむしは、「非凡な鍊金術師」である。

「赤い血の色をした眼、屠殺者らしいきつい眼光」を持つたしま蠅——あの肉の灰色な蠅。「黒玉のやうな、黒檀を磨いたやうな身體」を持つたるりゑんまむし。「光つて小刻みに歩く」蜚蠊。

「喪の大きい、黒い翅鞘をつけた」ひらたしでむし。「腹が鹿の子まだらな」かつをぶしむし。ほつそりしたはねかくし。——死骸にたかる凡ての蟲けら、よつてたかつて死人を片づける凡ての連中は、「血膿に酔ひ、腐つた肉を滅多切りに切り刻み、溶けた汁を吸り、質を變へ、そして此の世から害毒を除く。」

更にしま蠅の仔蟲、俗に云ふ蛆には「奇妙な食ひ方」があつて、寔によく滲み込む一種のペプシンを使用し、以つて物質を分解し、液化することをファブルは綿密に説明してゐる。そして此の蠅

がその卵を撒きつけるために、特に粘膜、目尻、鼻孔の入口、口元、生々しい傷口等を叡智を以つて選ぶのは、即ち此の不思議な溶解劑が表皮には效能が無いからである。

何んと云ふ洞察を以つて、彼れの獨創的思索は「新らたにするために凡てを一と度び溶解する埒の働き」を分析し、そして腐敗から「高い教訓」を引き出して見せてゐることか。

一六

類型の人々

昆蟲學がジャン・アンリ・ファブルの手に依つて、如何なものになつたかは、以上見て來た通りである。創造の宏大無邊な詩には、未だ曾て彼れの如く親しみのある、彼れの如く明るい通解者はなかつた。

たゞ一人、他の大陸に於て同じ情熱に燃えた人がある。それは「アメリカの鳥」の熱烈な歴史家、オウデユボン (Audubon 1780—1851 米國の鳥類學者) である。彼れも亦オハイオ州の片田舎、ヘンダアンソンと云ふ一小村に閉ぢ籠つてゐた。そして新世界の曠漠たる寂寥の中へ、動物生活の傑作を観察に行く時でもなければ、彼れは村を出ることはなかつた。さうした遙かに遠い旅へ持つて行つたものと云へば、僅かばかりの着代へ、スケッチ用の紙、日記帳、銃、「何よりも自然に對する情

熱に燃ゆる心」位なものだつた！

彼れも亦、心底から博物學者である。

「動物に關して、世紀から世紀へと集積せられて來た無數の寓話や没趣味な作り話」を、そのまゝ繰り返して何んら怪しむ所もない編纂者等に對して、矢張り侮辱の念に充ち満ちてゐた彼れは、自らの眼を以つて、若しくは擴大鏡の力を借りて、同時に新世界の裝飾でもあり名物でもある素晴らしい動物を、それ／＼平生の隠れ家に於いて——現場に於て觀察しに行くのであつた。静寂な大森林のおぼつかない足跡を辿つて、時には高い草の中に迷ひ込みながら、或ひは楓やサワサフランスの梢に「青い鳥」を窺つたり、或ひは黄金なす蜜柑樹や、大きな白い花を咲くマダノリアの中で、森の兄弟の凡ゆる囀りを授げ返へす「皮肉な鳥」の、眞似も出来ない音譜を聞いたたりした。

「何人もその神祕を詮索することの出来ない」本能の、此の偉大なる讚美者は、よく滔々たる急流に心許ない小舟を浮べて行つた。と、堂々たる鷺が大木の絶頂から對岸の磯と呼び交はしてゐる。かと思ふと、忽然猛禽は奇人の笑ひのやうな叫びを放ちながら、降る星の如く大氣を突切つて生餌に襲ひかゝる。

臆訶不思議な原因に對して、フアブルと同じやうな讚仰の氣分に満たされてゐた彼れは、南方の焼けつくやうな炎暑も北方の痺らすやうな嚴寒も物とはしなかつた。彼れはよく岩のそゝり立つ湖岸へ天幕を張つた、彼れはラブラドルの深い藪の中へ——西部の茫漠たる草原の高い草の中へ——ルイジアナの沼澤の水の中へ、常に泥に塗みれながらその忠實な犬を従へ、手には鰐魚を防ぐために獵のナイフを持つて、實に多くの壯麗な、若しくは不思議な鳥の跡を跟け、その祕密を發き、現場に於いてその舉動や習性を描寫し、そして彼れ自身が云つてゐるやうに、當時まで知られなかつた此の世界の中で、「開闢以來常に隠されてゐたもの」を發見するために、何處までも／＼深く進み行くのであつた。

吾々の國にあつては、誰しもフアブルを比較しようと思ふのは、第一にレオミュールである。彼れをその單なる繼承者に過ぎないと思惟する人さへもある。事實に於いて、フアブルは彼れの著作を愛しはしなかつたが熱心に讀んだ。彼れは此の多産な泉を飲んだ。彼れはそれに浸つた。然しながら、彼れの豊富な收獲は、一つとしてレオミュールに負ふてはゐない。

註一 René-Antoine de Reaumur, 1683—1757 La Rochelle で生れた。理學者で又博物學者である。十八世紀のブリーヌと呼ばれた程の人である。(譯者)

360

それにしても兩者の間には、その間を斷つ幾多の相異があるにも拘はらず、何んと云ふ類似、何んと云ふ共通の特徴があることか！

此の有名なロシエル産の博物學者は、ファブルと同じやうに、生れながらにして凡ゆる自然現象に對する趣味を持つてゐた。そして後年幾多の驚くべき發見によつて名聲を馳せるに至つた理學と博物學との難問題を研究する前に、彼れも矢張り數學の深い研究を以つてこれが準備をなしたのであつた。

然しながら、ファブルよりは恵まれてゐたレオミュールは、生れながらにして彼れの熾烈な智的活動に必要な、凡ゆる物的條件を兼有して居つた。幸運が凡ゆる賜物を以つて此の寵兒を幸ひし、彼れをして夙から閑暇を樂しむを得せしめ、そして彼れの幸先よい傾向を自由に展開せしめ、以つて大いに彼れの光榮に資する所があつた。國家も亦彼れに年金と幾多の位階とを與へた。それにして彼れはセリニヤンの隱者と同じやうに、思ひ高振らざる偉人をもつて終始し、常に他人の後

へに立つて、その宏大な才能を私慾のために利用したことは絶対にない。

彼れが居を定めた聖アントワーヌ街の端れに當る廣々とした庭の中へ、彼れも亦多年の希望通り一種の「アルマ」を造つたのであつた。

彼れが當時未だ處女地だつた昆蟲學の領域に於て、蜜蜂の驚くべき共和國の謎を解き、また無數のさうした小さい生命を明るみに出したのは、實に此の「アルマ」に於てである。しかもさうした小さい蟲けらは、當時尙ほ凡ての人に輕蔑せられてゐたものではないか。否、それがファブルに到るまで輕蔑せられ、尠くも全く何うでもよい事のやうに思はれて來たのだ。「吾々の手近かな事」と彼等との間には、幾多の關係が存在することを洞察し、其處から「色々な奇妙な結果」が引き出だされることを指摘したのは、彼れが最初の人である。

彼れの不可思議な「想ひ出の記」の中には、何んと云ふ多くの事實が記されてゐることか！此の偉大な古人の中には、何んと云ふ多くの摘まるべきものがあることか！且つまた、彼れもファブルの様に、當時の多數の讀者を魅する力を持つてゐた。トランブレエ (Tremblay)、ボネ (Bonnet)、ド・ゲエル (de Geer) などは、彼れによつて使命を啓示せられ、ユベヘル (Huber) もまた、彼れ

361

によつて天才の火を點じられたのであつた。

註一 “Mémoires pour servir à l’Histoire des insectes”

何よりも先きに理學者であつて、微細ではあるが比較的單純な研究に慣れて居りながら、彼れは天晴れ斯うした探究の異常な複雑さをも感じたのであつた。されば、眞の科學者に相應しい謙遜さを以つて、彼れは彼れの極めて充實した研究さへも、後人のための道標としての外、何んら價値あるものとは敢て考へなかつた。

事實に於いて、「昆蟲記」の作家に劣らないほど正確且つ綿密なレオミユールは、非常な注意を以て自ら確かめ、若しくは訂正したのみを書きつけてゐる。實際、彼れが記録してゐるところのものは、凡て彼れ自ら目撃したものであると信ずることが出来る。

「誤謬の泥の海」に於て、彼れもファブルのやうに、驚くべき程確かな明識を羅針盤としてゐた。そして矢張り、虚偽の中に屢々含まれてゐる一粒の眞理を巧みに引き出すことの出来る彼れは、これまた等しく傳説の扉に聴くのであつた。即ち彼れは、「お祖母さん達の物語」を嗤ふに先立つて、先づ傳説の根源に遡り、その眞の深さを測るべきであると信じて居つたのだ。

彼れはまた、實驗を試みる氣にもなつた。そして彼れはかうした困難な問題にあつては、純觀察のみでは屢々何物をも發見することが出来ないこと云ふことを、頗る判然と考へてゐた。今此處では、彼れが實驗から巧みに引き出した極めて意外な、而かも既に希望に満ちた一結果を云へば足りる。即ち、慧眼なるレオミユールが始めて昆蟲の卵を冷蔵庫の中へ入れて、その孵化を遅れさすことを考へついたのであつた。この實驗が、動物生命に對する冷氣の應用、及びシャルル・テリエの發見に道を開いたもので、事實に於て、彼れはその最も著名な先驅者なのだ。彼れは同時にさうした方法に依つて、蛹の生存を通常の経過以上に、幾らでも長い間持續せしめる秘訣を見出した。それ所ではない。彼れは幾年もくの間、それをして巧みに昏睡生活をなさしめて、自由自在に「七人の睡眠者」の奇蹟的な眠りを繰り返へさせるのであつた。

註一 “Mémoires pour servir à l’Histoire des insectes” t. iii, premier mémoire.

Charles Tellier, “Le Frigorifique. Histoire d’une invention moderne” chap. xxiii: le froid appliqué au règne animal.

然しながら、彼れはあまりに些細な方面に没頭して、自然をして語らせる術をば知らず、心傾向

の地盤に於て、事實を超越することには殆んど成功しなかつた。

そして敬虔な讚美の念を以つて觀察するにも拘はらず、彼れは彼れの觀察する小さい蟲けらと、真に一體となることは出来なかつたので——彼れは心理學者、乃至は眞の詩人と云ふよりも、寧ろ常に理學者として蟲けらを、謂はば外から眺めるに過ぎなかつたので、彼れは彼等の器官の働き、彼等の仕事の仕方、彼等の特性、彼等の蒙る變化などを巨細に記録するに止つてゐる。彼れは彼等の動作を解釋することは出来ぬ。彼等の内外に顛へてゐる生命の神祕が彼れには解らず、また、それに依つて彼れは促進せられても居らぬ。彼れに光彩のないのは實に此のためである。それは珍奇に満ちた明るい園生である。然しながら、それは生命もなく、藝術もなく、深い見透しも廣い眺望もない單調な園生である。彼れの著作は少しく散漫で反復に充ち、屢々一本調子で一つの蝶の脱蛹を語るために、幾つもの記録、否、幾冊も捧げられたりしてゐる。が、それにしても自然に興味を持つ人達の文庫の一部を成すものである。これを参考すれば得る所が多い。何時まで経つても参照せられるであらう。凡ての眞率な、自然な、そして健全なものに對するやうに、ちよいとそれに歸つて休養さへしたいと思ふ。が本當を云へば、もう誰一人讀む者はない。

偉大なるラトレイユの言に依れば、昆蟲學はレオミュール以來、一個の煩瑣な、果てしのない命名法に過ぎないものとなつた。そして、若しも眼界は局限せられてゐるが類ひ稀れな觀察者であるユベエル兄弟を除くならば、遠くフアブルに到るまで、たゞレオン・デュフウルあるのみである。

註一 Pierre André Latreille 1762—1883 フランスの有名な昆蟲學者。(譯者)

註二 Léon Dufour 1780—1865 幾度かの戦役に従ひ、後ランド地方で醫者をした。有名な博物學者。(譯者)

父から相續したサン・スヴェル・シュル・アドウル (Saint-sever-sur-Adour) の靜かな小ぢい町で田園に歸つた此の軍醫は甚だ高貴な生活を送つた。

田舎のつましやかな患者らを手にかけてながら——日毎に醫學上の實驗や觀察を記録しながら、彼れは止むに止まれぬ興味に惹かれて一本の草、若しくは一匹の昆蟲を見つけるために、「凡ゆる隅つこを掘じくり、大きからうが小さからうが凡ての石を引掻き起し、疲勞を厭はず、困難を避けず」時には極めて高い劍山や斷崖絶壁を攀ち登つたり、幾多の危険をも物とはしなかつた。

ラトレイユの門人なる彼れは、特に熱の籠つた記録家として輝いた。

ピレネエ山のリンネとも云はるべき彼は、此の山の植物と昆蟲とを分類した。そして種を判定したり、蠅の腦、若しくは蛆蟲の内臓を調査することにかけては、彼れの右に出づる者は無かつた。また、彼れにとつては昆蟲の三重生活、即ちあの魔術的な變態の不思議よりも魅力のあるものはなく、彼れはこれを創造の最も驚くべき一現象と見做した程である。

彼れはレオミュールよりも更に遠く、更に遙かを見た。そして彼れはフアブルと同じ煩を以つて燃えた。何んとなれば、彼れの中にも頗る大なる詩人の素質があつたのだ。彼れは好奇心から莫大の標本を蒐集したのであつた。然しながら、後年フアブルも告白したやうに、彼れも次のやうな告白をした。——「それは骨塚のやうなもので、眼には色々物を云つて呉れるが、心と魂とは何んにも語つて呉れぬ。そして昆蟲の眞の歴史は、彼等の習性、工業、戦争、戀、私生活、及び社會生活などの歴史でなければならぬ。さうしたものを地の上で、土の中で、水の中で、空の中で、樹の皮の蔭で、幹の内部で、荒地の砂の中で、否、動物の身體の上や中などでさへも、巧みに窺ひ見ることが出来なければならぬ。」

後年フアブルが彼れのアルマに立て籠つて、生ける昆蟲學の實驗場を建設し、「農業と哲學とが大

いに勘定に入れるべき此の小世界の本能、生活様式、仕事、鬭争、繁殖」等を唯一の對象となした時、彼れが必らず實現しようとした所の野心滿々たるプログラムは、既にデユフウルの此の言葉に盡くされては居らないか。

デユフウルは更にまた、宇宙の全的調和に於ける昆蟲の役目を、天晴れにも豫感してゐた。彼れは寄生の中に——互に掠奪し合ふ此の生存の縫れ合ひの中に、「同型の餘りに大なる繁殖を阻止することを目的とする均整の法則」を看破したのであつた。そして、昆蟲は凡てさうした永遠の使命を帯びてゐるが、此の神祕な法則は、「然しながら、絶対に説明を許されない」と云つてゐる。

それにしても彼れは此の小さい民族と、大して親密にはならなかつた。彼れの注意は諸方面へ散つてゐたのである。恐らく彼れは努力を長い間、一定の主題に集注することが出来なかつたのかも知れぬ。それともまた、かうした探究に於て成功するためには、彼れに天才の第一條件——あの忍耐が缺けてゐたのではないか。

要するに、彼れは無数の貴重な事實を以つて科學を豊富にし、多くの昆蟲の習性に關する詳細を公けにしたにも拘はらず、それら小さい魂をばたゞの一つも把握することは出来なかつた。それは

實際、デュフウルは自然を強烈に感じたのであつた。然しながら、彼れは自然の全部を如實に傳へることは出来なかつた。そして三百の記録に互る彼れの歴大な著作は、殆んどそのまゝ何んらの効果もなくしてゐる。

「吾々の田舎の彼方此方に散らばつて、靜かに考へ、靜かに研究し、そして毎朝の新聞にも書き立てられないやうな、靜かな、尊い生活をしてゐる人々」が、一體當時に於て、否、今日に於てもどんなにあることか。

例へば、誰れかエロン・ロワイエの名を聞いたことがあるか。それにしても彼れは、フランス動物學會の創設者の一人だつたではないか。彼れが悲しい月日を送つたその地方に於てさへも、今日尙ほ、あの腰の曲つた黄色い顔の、眼には焔を燃やした、小さい瘦せた人を記憶してゐるものがあるらうか。彼れは自ら進んで巴里を遁れたのであつた。巴里では博物學に對する情熱が、よく彼をして事務をそつち除けにさせるのであつた。何んとなればどんな職業に従事してゐる者に對しても、一また、どんな領域に屬してゐる者に對しても、科學は遠慮會釋を知らないからだ。それは掛持ちを

許さないからだ。

註一 Héron-Royer 博物學者。一九一一年アンボワーズに於て死す。

こんな譯で、彼れは身心を獻げるために、アンボワーズ (Amboise) の郊外で、ロワール河 (Loire) の島へ隱退した。彼れは其處で、彼れが撮んでやる蟲を食ひに来る蟻や蛙に取り圍まれて、甚だ慎しまやかな、殆んど貧しい生活をしてゐた。戀の季節には、六月の暑い夜の静けさのなかで、此處河のたゞ中から異様な音樂が空中へ立ち昇り、アリテツス (Alytes) の銀の音色は、ペロパテス (Pelobates) の抑へつけたやうな洞ろな音や、赤い腹を持つた鈴振り蟻 (Crapaud sonneur) の銅を叩くやうな不氣味な調子とうち混り、一段高く豹紋の蟻 (Crapaud Pantherin) の莊嚴な、力強い歌が響き渡るのであつた。事實、彼れは其處で、蛙類の解剖學、胎生學、生物學、及び習性等を研究するために、庭へ澤山の泉水を作り、そして極めて稀れな、極めて奇妙な種類を飼養したのである。そして此の方面の研究にかけては、彼れは最初の人であり、今尙ほ主なる蛙の歴史家となつてゐる。

そして彼れの興味を咬る力は、實にロリナの生涯を決定した程である。

嗚呼、ロリナ！ 此の魔術的な名前は何よりも先きに、幻想的な明暗の境に酔へる不可思議な藝術家、フレツスリイヌ (Frosselines) の隠遁者、同時にあの目ざましい田園詩の作者を想ひ浮ばせる。

實際、彼れは山野を跋渉して辛抱強く摘み集めた正確な観察を、靈妙な言葉を以つて巧みに云ひ表したのだ。そしてさうした観察が、實にモオリス・ロリナをして吾々の最大な自然詩人たらしめたのだ。

註一 Maurice Rollinat 1853—1903 フランスの有名な田園詩人。(譯者)

眼にもつかない不可思議な生き物の戀、それがまたレエモン・ロリナ (Raymond Rollinat) のあんなにも獨創的な、博物學上の著作の特徴ともなつてゐるのである。

彼れも親戚にして同時に思想の兄弟たるモオリスが高度に持つてゐたやうな、鋭い觀察眼を授かつてゐた。それはキユヰイエ (Cuvier 1769—1833 フランスの有名な博物學者) の門下生であり友人だつた祖父から受け継いだもののやうである。そして夙くから、彼れはシャトオルウ (Châteauroux) の中學校を出るか出ないかに、既に慾得を離れた探究の情熱を持つてゐた。

彼れはモオリスの所謂「自然に對する都會」——巴里に反感を抱いてゐた。そしてジョルヂユ・

サンドに依つて不朽にせられた彼れの郷土、クルウズ川、その蜿蜒り、ブランヌ地方、その沼澤、その山椅子に縁取られた窪んだ路、また春には紅いブルーエールや黄金のえにしだ、が播かれる黒い谿などに、何よりも戀々としてゐた。其處に無限の魅力と無限の研究主題とを見出した彼れレエモン・ロリナは、曾てその小さいアルジャントン (Argenton) の町を出たことはなく、四十年の間と云ふもの、森の中、ブルーエールの藪の蔭、沼や澤のほとりに動く凡ての生き物の上へ——或ひは窪みや洞穴の中を這つたり、闇を掠めて飛んだりする凡てのものの上へ、その鋭い眼を据ゑたのであつた。

彼れの驚くべき觀察は、單に自然を見るに止つてはゐない。彼れの最も尊敬した博物學者であり、彼れ自ら敢て譲らざる大ファブルの例に倣つて、彼れも自ら方法を案出し、甚だ個人的な、甚だ獨創的な技術を以つて實驗をも行つてゐる。されば博物館あたりの大家達は、彼れを大家の大家と仰ぎ、遠く來つて助言を求め、範例を請ふのである。ペリイ (Berry) 地方の動物で、彼れに秘密を知られてゐないものはたゞの一つもない。然しながら、彼れが特に興味をもつて研究したのは、異様な、神祕な動物である。即ち、みみづく、蝙蝠、蛇、龜、蜥蜴、山椒魚……など、凡てこれまで何

人にも精密に研究せられたことのない闇の友である。彼れは傍近く硝子の箱へ蝮を入れて置いて、夜半これを観察するために起き上る。それは恐ろしい頭を擡げ、大きな口を開らき、音のする息を吐き、その怖るべき毒を注がうとして身を構へ、岩の割目を探検するために、垂直になつてゐる腫れを持つたその眼は、鋭く黄色に輝く。然しながら、彼れにとつては、「何が何んでも、その落着いた力が實に美しい」のだ！ 未來の爬蟲學の最も確實な基礎の一たるべきかうした堂々たる研究の中で、彼れは彼等の戀のぢやらつき、戦争、誕生及び化成などの祕密を物語り、そしてこれらの憎惡せられ、恐怖せられる動物の眞の姿を示し、彼等と他の動物との關係、特に吾々自身との關係を示してゐる。此の動物も世人の憶説とは反對に、屢々吾々の貴重な補助者であり、無意識な奉仕者である。

然しながら、多くの人にとつては、脊椎動物の深い研究はあまりに費用が懸る。實際、さうした理由から之れに献身する人が、どんなに少ないことか。蛇、若しくは蝙蝠の素晴らしい食欲を充たさせるために、屢々、何んと云ふ困難に出逢ふことであるか。ロリナは粉の蟲が無いので、彼れの

蜥蜴にやるばつたと、龜にやる蝸牛とを手に入れるために、よく地方の凡ゆる子供等を驅り立てるのであつた。而かも一匹のヴェスベルテイリオン (Vesperilion 蝙蝠の一種) を満腹させるためには、一千以上の蠅が無ければならぬ！

これに反して飼育に殆んど費用の要らない昆蟲は、誰れにでも手が出せる。彼等は極めてへり下つた、極めてつましやかな人々にも彼等の謎をかけて、只管これが解決を待つてゐる。事は吾々の試みるか否かにあるだけだ。そしてさうした試みが、屢々地方の學會の中に現はれるのだ。實際地方の學會は、あまりに無視せられてゐるのであるが、それにしても高貴な、自由な、率先の中心であつて、其處には沈黙と影との中に埋もれながら、有効な勞苦を續けてゐる無私無慾な、思ひ高ぶらない、本當の學者が見出される。

尙ほまた、セリニヤンの隱者の歩いた跡を、既に熱心に辿つてゐる者もある。さうした人々の中で、最も恵まれた才能を持ち、篤實な、謙讓な、溫良な、そして道念に富んだフェルトンは、最初彼れの著作に魅せられて、これまた偶然に方向を見出したのであるが、やがて「昆蟲記」の鱗を考察し、その釣合を批評してみようと云ふ氣になつた。彼れは辛抱強く、そして凡ゆる科學的嚴密さ

に身を浸した分析者である。彼れにも他の多くの人にとつてのやうに、その優秀な観察者の素質を十分發揮させるために、先づ隱遁生活の閑暇がなければならなかつた。何んとなれば、冬はボニフアシオに於いて、夏はアルジェリ海岸の或る小さい町で、彼れは確かな方法を以つて観察し、實驗してゐたからである。彼れは、私にかう打ち明けて云つたことがある。「茨の蔓つたアルジェリの野の静寂の中で、新しい、若しくは思ひがけない幾多の事實を私に見せて呉れた膜翅類と相對して、私は本當の幸福を感じたのです。アラビヤ人さへが、野を去つて了ふやうな日中の極めて暑い幾時間かの間、私はよく印度人の涅槃へはいるのでした。」

セリニヤンの隱者がレオミュールの著作に對したと同じやうに、フェルトンはフアブルの最も有名な觀察の或るものを、勿論致命傷とはならないが、訂正し、且つ明確にした。蓋し彼れはフアブルとは異つて、分類も命名法も却けはしないのだ。彼れは非常な嚴格さを以つて、種を判定することに腐心した。また習性を描寫しようと云ふ野心を持つて、一つ一つの種の正確な動作を記し、完全に確かめられた智識や事實を蒐め、それを格に合つた文章を以つて簡潔に説明し、そして必要缺くべからざる事をのみ語り、博物學を、から／＼した公式、ぎこちない方程式となしてゐる。然し

さうした乾燥無味な事實——觀察の亡骸なきがらなぞも、フアブルの手にあつてはあの絢爛な文章によつて、生き／＼したものとなつてゐたではないか。

試みに、「昆蟲記」の宏大無邊な叙事詩を見てみ給へ。極めて微々たる昆蟲の中にも、全生命とその限り無い關係とが認められるではないか。吾々自身の構造、その深淵及び空隙の上へ——同時に、吾々の無意識な活動の奥底に、それと氣づかれ出した豊富な能力の領域の上へ、突如として明りが投ぜられるではないか。

夕べ、日が暮れて、蟬の宏大なアンダンテも止んでから、いよ／＼螢が「その蒼い明りを灯し」、「蒼白のイタリイ蟋蟀が夜に酔ふて、迷迭香の上で甲高く鳴き、」また遠くの方では「鈴振り蕨が、その麗はしい鈴の音を隠れ場から隠れ場へと響かせてゐる」——さうした時刻に於て、此の大家は如何なる神祕な、如何なる奥妙な魔術に依つて、生命の微かな閃めきが物質に授けられるかを垣間見せるのだ。

彼れは吾々に森羅萬象の隱密な關係——凡ての生き物を密接に結びつけてゐる全的調和を示してゐる。彼れはまた、到る所吾々の周圍には、極めて微々たるものの中にさへも、吾々さへ巧みに發

見ることが出来るならば、詩が隠された明りのやうに存在してゐることを示してゐる。

彼れの廣々とした頭腦は、南フランスの凡ゆる昆蟲——膜翅類、直翅類、鞘翅類、半翅類、脈翅類、鱗翅類、蜘蛛類、多足類、癡醉術師、人殺し、腹の割き手、吸ひ手、坑夫、左官などを凡て抱擁したのである。彼れはさうした宏大な領域に於て、生物學的昆蟲學——唯一の興味ある昆蟲學を創造した。そして生命の限りなき難問題の解決に對して、それが齎すことの出来る無際限の貢獻を示してゐる。然しながら、彼れの著作の最大なる魅力は、彼れが眞の創造者であり、同時に何人もその權威を疑はぬ動物心理學——本能と、そのメカニスム及び無數の様式との研究である。

そして彼れは彼れの蟲けらを以つて吾々を「暗い洞穴の中へ」案内して呉れて、極めて下等なものの中にさへ閉ぢ込められてゐる多くの靈妙な力と意外な明りとを發いて見せる。それに依つて吾等は、全宇宙に充ち／＼てゐる不可知の力の巧妙さに依つて、空しい外形の下には無數の現象が隠されてゐることを感知する。

蓋し、彼れは凡てを云ひ盡くしてはゐないのだ。此の不可測な、それまで手をつけられなかつた領域に於て、彼れもなか／＼凡てを究め盡したのではない。

未だ發見せられずに隠されてゐるもので、尙ほ摘むべきものはどれだけあることか！ 「いくら摘んでも穗に限りはない。」思へ、「極めて知れ切つてゐる種にさへも歴史がない、若しくはそれに就いて云はれてゐる僅かばかりの事も、嚴密なる訂正をせられなければならない」ではないか。また思へ、茨の如きはたゞ一本で五十種以上の昆蟲を養育し、そしてレオミュールの正確な觀察によれば、一つ／＼の種には「それ／＼の習性、習慣、工業、特質、技術、建築術、いろ／＼な本能及びそれ／＼の天分がある」ではないか。

何んと云ふ宏大無邊なイロハを解からなければならぬことか。而かも、吾々はわづかにその始めの假名を幾つか拾ひ読み出したに過ぎぬ！ 吾々がどうにかそれを全部讀むことが出来、また觀察者が多數になつて互ひに協力し、照し合ひ、互ひに補充し、矯正し合ふやうになる時、その時始めて吾々は、常に人類の興味を咬つて來たあの高遠な問題——それを全く解くには到らなくとも、尠くも吾々自身の片影を掴み、そして魂の王國を一層判然と見ることが出来るであらう。

セリニヤンの集ひ

然しながら、僅かに謹嚴な休養をするだけで、途絶えることのないあゝした孤獨な刻苦精勵を、彼れのやうな雄々しい熱情を以つて繼續する他のファブルが、果して何時見られることであるか。

早晨に跳ね起きて、彼れはパンを齧りながら、先づ臺所の板瓦の上を大股に歩き廻る。實際彼れにあつて、思考を進めるために活動が必要であることは、實に非常なもので、かうした朝餉の時ですさへも、既に彼れの身體が揺れ動かすにはゐないほどなのだ。それからアルマの彼方此方、露の玉に光彩陸離たる灌木の下へ、既に冥想に耽りながら幾度か立ちとまり、やがて彼れは藁地に獨房、即ち實驗室の沈黙の中に閉ぢこもる。

此處人目を避けた、寄つてもつけない靜寂の中で、彼れは「汗水を流して稼ぐ。」そして、正午までもちつとして、或ひは觀察を繼續したり、若しくは實驗を見張つたり、或ひは現に行つてゐる

観察、若しくは前日の観察を記録したり、或ひはまた私が前に述べたやうにして、彼れの決定的な幻を言葉に現はすことに専心する。

その時静寂は彼れにとつて、何よりも重要な條件である。而かも、それは單に原野の大静寂だけではない。たゞ冬のみは、薪を一杯に詰め込まれた小形のストーヴが、シユミネの前で音を立てた。然しながら、チクタクのうるさい振時計の運動などは、真先きに止めてしまふのだつた。彼れはまた、鶯に對して猛烈な憎しみをふくんでゐて、時には激戦を行つたこともある。その鳴き聲が彼れにとつてとてもやり切れなくなるのは、朝、實驗室の中で、何んか重要な仕事、たとへば觀察の結果を立派に書き表はさうとしてゐる時だつた。さうした場合に鶯が其處らで聲でも出して、癩癩が忽ち彼れをとつつかまへる。彼れは忍び足で銃を取りに行く。住居が殆んど孤立してゐるので、それは泥棒の用心に、何時でもちやんと大霰弾をこめられてゐたのだ。念にも念を入れて、彼れは鳥の鳴いてゐる絲杉に近寄り、落着いて狙ひを定める。と、突然彼れの怒りでも爆發したかのやうな、物凄い爆音が轟く。そして緑の葉や枝が千切れて飛び散る中に、歌ひ手は斃れ、時としてはそれが紛微塵にさへなるのであつた。

且つまた、斯うした朝の時刻に訪ねて来て或ひは玄關を叩き、或ひは畑に通ふ人達の間道に向いた、そして墓石のやうに黙々たる小さい裏門のベルを押した人々で、そのまゝ無駄に引返へした人がどれだけあることか！ 然しながら、さうした規律なしに、果して彼れのなしたやうな偉業を大成することが出来たであらうか！

極度の勞苦によつて精も根も盡き、彼れはいよ／＼「蒼ざめた顔、引き吊つた相恰」をして實驗室を出て来る。

註一 ルイ・シャラツスから著者への手紙。一九二二年、二月二十日。

やつと今、彼れは閑な身となつた。「半日が濟んだのだ。」然しながら、彼れは無爲に時を過さすのではなく、他のあまりきつくない仕事によつて氣を晴らし、ゆつくりした氣持ちになるのである。何んとなれば、彼れは如何なる場合に於ても、決して安閑としてゐると云ふことはなく、ポケットへ突込んでおいた鉛筆の切れ端をもつて、ゆくりなくも心に浮ぶ凡ての事柄を、それからそれへと絶えず紙片に書き止めるのだ。田舎の奥では通常詰らなく、ほんとにうんざりする堪へ難い午後も、彼れには短く思はれる。時には植物の前に立ち止まり、時には地べたに伏せつて昆蟲を觀察し、